
ある女錬金術師の試み

屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある女錬金術師の試み

【Nコード】

N 8 6 8 7 M

【作者名】

蜃

【あらすじ】

女性の身ながら錬金術の研究所に勤めるマリィは、かつて婚約者が別の女性と駆け落ちしたせいで、恋愛が出来なくなっていた。ある日、友人の結婚式に参列したことで寂しさをおぼえたマリィは、いつそのこと錬金術を駆使し、自分の恋人を作ってしまうおう、と考える。そうして、「彼」の完成したその日、新たに赴任してきた助教授を見て驚いた。その顔が「彼」そっくりだったから。 R 1 5 は一部のみです。

寂しさから 1

教会の鐘が鳴る。

マリーは作り笑いを浮かべながら、祝福を惜しみなく送った。けれども、心の中はちつとも笑っていなかった。いや、むしろその逆だった。

ため息をつきたい気持ちをこらえて、友人の門出を見守るのが今の私の義務なのよ。しっかりしなさいマリー、と自分に言い聞かせて、しばらく苦痛のときが過ぎるのを待つ。

もちろん、すぐになど終わらないのは知っている。

招待客は大体明日の昼くらいまでもてなされるのが慣例だから仕方ないが、研究を言い訳に帰ってやるうか、と何度思ったことか。

空はよく晴れていて、夏の暖かく爽やかな空気が心地よい。

いい日だ。友人の新しい門出にはピッタリだ。

だが、マリーの方はといえば、許婚には別の女と駆け落ちされ、近頃は研究も上手いかわず、教授とも折り合いが悪い。

スケベだった助教授はこの間左遷されたからいいものの、今度来る人物がどんなふうなのかわからない。また似たような奴だったら嫌だな、とマリーは思った。

マリーは決して不細工ではないが、美人と断言できるほどでもない。

鼻の上に散ったそばかすや、高すぎる背、肉づきの良すぎる胸などがそれだ。一番もてはやされる女性の容姿はといえば、細い体つき、今にも倒れそうな、金髪に白い肌をした少女のようなひと、と決まっている。そう考えると、マリーの姿はだいぶ規格から外れていた。

そのうえ、完全男社会、しかも頭のいい連中ばかりが集まった大学院で、錬金術の研究員をしているともなれば、たいていの男はそれだけで逃げていく。今日も何人かに声をかけられたものの、マリ

ーの肩書きを聞くと、そそくさと逃げ出していつてしまった。
ふん、別にいいわよ、と思いつながら供されたワインをすする。

マリーは燃えるような赤い髪と、アメジストのようにも見える深い青の瞳をした女性だ。この髪のせいで勝手に気性が荒いと決めつけられ、傷つけられてきた。それでも赤い髪は綺麗だから気にしている。

パーティは立食形式で、色とりどりのオードブルなどが並び、壮観だ。

このパーティが終われば、これから花婿と花嫁が初夜を迎える。
うんざりしてきて、心の中で悪態をつく。

（私だって、誰かと恋をしたいし、愛し合いたいわよ）

好きで、許婚に捨てられた訳ではない。マリーとは一生氣が合わないような、頭の固いキザな男だった。それでもマリーは彼のことを愛そうと努力したのだ。それでも、数ヶ月前に彼は可愛らしい頭の弱い金髪の少女と駆け落ちし、婚約は白紙になった。

そのあと、マリーと縁を組もうという男は現れず、親戚からは、お前が変わらない限り、一生そのままと言われ続けている。

マリーを思つての忠告なのだ、とわかっていても、傷ついた。
空しさに打ちのめされながら、静かにワインをすすり、密かに思う。誰もが私の側から離れ、逃げていくけれど、やはりひとりはずしく寂しくて、誰かに側にいて欲しいと思う自分がある。

それならば、いつそのこと……。

マリーはその思いつきが気にいった。

式の間中ひたすらにそのことばかりを考えつづける。

どうすればいいのかは分かっていた。それが本当は禁忌に触れることも知っていた。

それでも、マリーは寂しかったのだ。

ひそかな決意を胸に、マリーは友人の家となったその館に泊まることを辞した。

両親はまたかと呆れたような顔で送りだしてくれたが、招待客の

何人かの口から、いたたまれなくなっただけというささやきも
れるのが聞こえてしまった。

それを聞いて胸は痛んだ。どうせいつものことだと、自分に言い
聞かせる。

だからこそ、この痛みを少しでもやわらげられればいい。

マリーは寮の部屋へ帰り、すぐに大学院に向かった。

そしてそれから一カ月あまり、ほとんど寝る間も惜しみ、今まで
学んだすべてと自分の理想を詰め込んで「彼」は完成した。

寂しさから 2

「完成したわ……ふふん、なかなかの出来よね」

マリーはつぶやいてみて、不意になんともいえない馬鹿らしさに襲われた。

朝日の差し込む研究室。

一応それなりの能力を持っているマリーには、研究に集中するための個室が与えられていた。

壁や床は冷たい石張りで、作りつけの棚には大量の書籍や、一般の人が見てもさっぱり理解できない器具類が所狭しと並べられている。休憩用のソファや、書きもの机の上には、マリーが書き散らした紙が散らばっていた。

天井にはくもの巣がはられており、大きなくもが上の方で静かに休んでいる。

掃除もろくにしていなかったことに、今さらながら思い至ったが、朝日を受けたくもの巣はきらきらしていて綺麗だった。

そして、目の前の一番大きな作業用テーブルには、マリーが作りだした命の宿らない、血の通わない、動くこともない人形が横たわっている。

美術館の彫像や、神話に出てくるような美しい顔立ちと引き締まった肢体。

髪は濃い褐色で、やや波打っている。長いまつ毛に縁取られた目は、明るい金色。マリーより頭一つ分も背が高く、かなり大きい。唇は薄いが、それが妙にセクシーだった。

皮膚も人のように柔らかく、人形のように固くはない。

もちろん、その他色々な部分も細部までしっかりと再現されているが、これは現実には存在しない人物なのだ。なにより、皮膚は死人のように冷たい。

「彼」を動かすには魂が必要となるが、それに成功した人はいな

い。

そもそも魂をとらえ、人形に宿らせるということ自体が不可能なのだ。

魂には実体がないのだから。

なにしろ、錬金術において最も重要視されているのは「金」の生成であり、至上の物質である「賢者の石」を生みだすことである。

かつては人造人間「ホムンクルス」を生みだすことが重要視されていた時代もあったようだが、現在はそれは不可能なこととして過去の人間のたわ言という扱いになっている。

それら過去の資料を集めて作成した「彼」の出来は素晴らしいものだった。

でも喋らないし、冷たい身体がマリーを抱いてくれるわけでもない。

「後は、どうやって命を吹き込むかよね」

つぶやいてみて、ますます自分が無謀だったのではないかとマリーは思った。

その時、ドアが軽くノックされた。

「はい、どうぞ」

ドアを開けて入ってきたのは、同じ研究室で助手をしている青年、クリスだった。

金髪でそばかすだらけだが愛嬌のたつぷりある青年で、人をからかうのが好きなどころさえなければ皆に愛されるのに、とマリーはひそかに思っていた。

「あれ、マリー今日もいたのか？」

「まあね、昔のひとがやってたことを再現してみてるんだけど……やっぱりうまくいかないわ」

「へえ、ってうつわなんだこの美形……こんな現実にいるかよ」

クリスは「彼」を見るなり吹き出した。

「いいじゃない別に、人形なんだもの」

マリーは言って肩をすくめた。

「そりゃあそうだ、だけど本当によく出来てるよな。君さあ、結婚前だったのに、男の身体ここまで知っていると色々疑いたくもなってくるよ」

クリスは含みのある笑みを浮かべて言う。

マリーは彼を睨んで、

「何か用があつたんじゃないの？」

と声を低くして言った。

自分より少し背の低いクリスを見下ろす形となり、マリーはまず自分が可愛くない女だわ、と思つて軽く落ち込んだ。

「はは、そうでしたそうでした。」

用つてのはね、ついさつき新しい助教授が来たんだ！

これからここにあいさつに来るんだって。

教授より有能だつて噂だから、席を追われるんじゃないかってさ、ない髪かきむしつてイライラしてる姿が可笑しいんだ！

早めに行つて見ないと損だよ！」

クリスはもう可笑しくて仕方ないとばかりに腹を抱え、しまいは大声をあげて笑いだした。目じりにはうつすらと涙まで浮かんでいる。

「あら、それは是非見てみたいわ！」

マリーもその様子を想像したら、顔がにやけてきた。

あの教授、権力をかさに着て言いたい放題だったからいい気味よ！
「助教授のお出迎えもしなくちゃならないし、行きましょ」

「よし！」

いいか、笑つちやだめなんだからな？」

「分かつてるわよ」

それでもくすくす笑いが漏れてしまう。

マリーはクリスと共に部屋を出ると、笑を噛み殺しながら研究室へと向かった。

寂しさから 3

マリーがクリスとともに部屋へ入ると、すでに全員が揃っていた。

その中に、数少ない女性の錬金術師であり、友人のリサを見つけ、マリーは彼女の側へと歩み寄った。教授はまだ来ていないようだ。

「あら、ようやく来たのね。今日もすごいクマ、大丈夫？」

「平気、と言いたいとこだけど、流石に今日は早く帰って寝るわ」

リサの呆れたような言葉にマリーはそう返した。

実際、鏡など見ていないからひどい状態だと思う。

いつも綺麗なリサとは大違いだ。

リサは良家の子女で、くせのない銀系のような金色の髪を後頭部ですっきりと編みこみ、露出の少ない青いドレスを着ている。

ただ立っているだけでも気品が感じられるたたずまいが、マリーにはいつも羨ましい。

彼女が大学院へ入ったのは、虚弱な婚約者、ビツクの身体を直す方法を調べるためだったのだが、やがて医学よりも錬金術の方に興味がでてしまい、今に至る。

ちなみに婚約者のビツクは相変わらず虚弱なものの、リサの怪しい研究の成果が、少しずつ外でのパーティなどにも参加できるようになってきているとか。

「もったいないわね、せっかく美人なのに」

「なにバカなこと言ってるのよ。私なんかせいぜい十人並だわ、綺麗にしたって、そんなに美人になんかならないし、なにしたら男は逃げてくんだからもういいのよ」

それよりも、研究室のアレを完成させたい。

アレが完成しさえすれば、少なくともこの寂しい気持ちだけは解消するだろう。

けれど、先人達が知恵を絞っても完成させることの出来なかった人造人間を、私程度の者が一生懸命学んだ知識を全てつぎこんだ：

…というだけで、完成させることなど出来るのだろうか？

挑戦してみなければ、結果など分からない。

それでも、やっぱり不安にはなる。

マリーはため息をついた。

「……一回きちゃんと鏡を見せてあげるわ」

リサが呆れたようにつぶやいた言葉を、マリーは聞き流した。

結局のところ、外見が問題ではないのだ。

マリーが相手にされないのは、きっと内面の問題だろう。一般的にイメージされる女性と比べると、マリーは利発すぎだし、言葉づかいも男みたいに強いから、怖がられているのは分かっている。そしてなにより、求め続ける「夢」が原因なのだと思う。

一般的な男は、女に、自分の「夢」についてきて欲しいと思っているが、女の「夢」に協力しようなんて考えもしないのだ。

諦めればいい話なのは分かっている。

けれど、夢を手放せば自分が自分である意味がなくなってしまうような、そんな気がするから。だから、このままでいい。マリーはいつもそう結論付けてしまう。

それ以上考えても、辛いだけだから。

だから、男はいらないなんて強がってみたりする。

それでも、やっぱり寂しいものは寂しい。

だからこそあんな思いつきにすぎるようにして、アレを作ってしまったのだ。

そんなことを考えていると、教授が教授室の扉を開けて出てきた。ワイアー教授は、腹の出た恰幅のいい身体を難儀そうに移動させながら、待っていた面々を見渡した。

「待たせてすまない。

紹介しよう、以前勤めていたオットー君の後を引き継ぐ、ハースト君だ」

教授が手招きをすると、その男性はやたら背の高い身体をすばめるように、うつそりと姿を現した。

マリーは、その顔を見て絶句した。
……そんな馬鹿な！

同じ顔、ふたつ 1

とりあえず、夢でも見ているのだろうか、と頬をつねってみる。
痛い。

クリスの方を見ると、彼も仰天した顔でこっちをちらちら見ている。

「初めまして。

アレックス・ハーストです。北のヤグディウム大学院から赴任して来ました。

パディントンはかなり研究が進んでいると聞き、楽しみにしております。至らぬところもあると思いますがこれからよろしくお願いします」

背の高い男性は、低く張りのある、しかし抑揚に欠けた声で言った。顔にも声にも、感情のあまり出ないタイプのようだ。しかし、それよりも問題なのは顔だった。

なにしろ「アレ」とそっくりなのだ。身長も恐らくほとんど同じだろう。

アレの顔はあくまでもマリーが、もしも劇に出てくるような魅力的な恋愛が出来るなら、相手はこんなふうな人がいいな、などと気楽に考えて造形しただけのものだった。

今まで見てきた劇の俳優や、物語の挿絵、教会のフレスコ画、彫像などなど、色々見本にしたものをまぜまぜして好きなどころだけ取り出して組み合わせたものなのだ。

現実に存在するわけがないはずなのに……。

しかし、彼はそこにいる。そしてこれからしばらくここで一緒に研究をするのだ。

助手を務めることにもなるかもしれない、指示を仰ぐこともあるだろう。

マリーは血の気が引く思いだった。

（と、とにかくアレを始末しなくちゃ……っ！）
もし見つかってしまったら、なんと説明すればいいのかわからない。

例えば……。

「貴方の顔は知らなかったけど、たまたま同じになっちゃいました、テヘっ」

「以前一目見た時に、美しいお顔だと思ってモデルにしてしまいました。すみません！」

どちらも言いにくい。

前者では信じてもらえない可能性が高いし、後者では嘘をつくことになる。

「彼の専門は、鉱石関係だそうだから、そちらの研究をしている者たちは師事を仰ぐといい。」

それでは、今日からよろしく頼むよ」

教授はやや引きつった顔でそう言うのと、新しい助教授、アレックスの背を軽く叩いた。肩を叩こうとしたのだろうが、届かなかったらしい。

「はい」

アレックスは静かに頷くと、集まった研究員に軽く会釈して助教授のための部屋へと下がっていった。やがて教授の長つたらしい挨拶、まあ大半がこれからの自分のことだったのだが、が終わると、マリーは出来るだけ怪しまれないように急いで研究室へと戻った。

そして戸を開けると、しばし立ちすくむ。

「……なんてこと」

「おいマリー！ どうするつもりだよあれ……ってあれ？」

追いかけてきたクリスがマリーの背後から部屋の中を、特に作業台の上を凝視してから、次いでマリーの青ざめた顔をまじまじと眺める。

「お、おい。もしかして動いたとかないよな？」

「そんな……ゾンビじゃあるまいし」

マリーは呟いて、ぞっとした。

もしもそうなら完全にゾンビではないか。魂の宿らない人体など、死体と同義だ。

「と、とにかく探すから手伝って！」

「えー、僕だつてやること山のようにあるんだけど？」

「じゃあ後でそれ手伝ってあげるから！」

マリーは殆ど泣きそうになりながら言った。クリスは少し考えるそぶりを見せ、少ししてからにやつ、と笑って何度も頷いてみせると、もったいぶって言った。

「よし！」

じゃあ一番手ごわい、面倒極まりないやつを手伝ってもらうことにするけど……それでもいいかい？」

そのセリフに、マリーは思わずクリスを睨んだが、今はひとりよがりの方が効率がいい。仕方なく、分かったわと弱々しく告げた。

「とにかく学内を手分けして探しましょう。私は上の階を探すから、下の階をお願い」

「了解」

クリスはふざけた敬礼をしてから出て行った。

（クリスめ、後で頬をつねってやる）

マリーは額に青筋をたてつつ、自分も急いで研究室を出た。まずは近くの場所をしらみつぶしだ。なんとかして「アレ」がアレックス・ハーストの目に留まらないうちに見つけなければならぬ。

もしも見つかってしまったら……。と起こる不測の事態を考えてみたが、今はあまり思い浮かばない。

それよりも急いで探さなければ！

マリーは廊下に出ると、気合いを入れるために頬を叩いて、「あれ」を探し始めた。

同じ顔、ふたつ 2

アレックスは、指定のローブを脱ぐと椅子にかけた。

この学院で研究に携わる者は、通う学生と区別をつけるため、それぞれの研究分野現す紋章の縫い付けられたローブの着用が義務付けられている。

学生のものは白で、他の職務に携わる者たちは全員青い色と決められていた。

しかし、ずる長いローブはうつとうしく、アレックスは好きになれなかった。

「全く、ヤグディウムではこんなもの着なくても良かったのだが」
ぼやいて、書きもの机に向かう。

とりあえず、ここに来て分かったことは、教授はなにかのコネでここにいるのだということと、研究員たちはあまり有能ではなさそうだ、ということだった。

なにひとつ質問が飛んでくともなく、研究内容を聞いても興味を示すような顔をしたものはいなかった。ただなぜかひとり、非常に顔色の悪い女性がいたが、体調でも悪かったのだろうか？

それを除けば、皆あまりやる気のない様子だった。

「あの教授の下にいるのだから、仕方ないか」

自分が上に上がることにしか考えていないようなクズだ。

上手く言葉を選べば、ああいう輩は利用出来るだろう。

アレックスは、研究が続けられる環境さえあればそれで十分なのだ。ただし、こちらが利用されるようなことだけは避けなければならない。

ああいう小悪党はそういうことだけには知恵が回るからだ。

アレックスには目的がある。それを成すためには、どんな努力も惜しむ気はなかった。

邪魔だけはされぬようにしなければ、そんなことを考えつつ、部

屋にどのようなものがあるのか見聞していると、バタバタと騒々しい足音がして、戸がノックされた。

「誰ですか？」

「あの、リサ・ヤーディンという者です。錬金術の研究員です……中に、いらっしやいます、よね？」

「……何のことですか？」

とにかく入ってきて、ちゃんと話して下さい」

そう言うと、戸が遠慮がちに開いて、美しい女性が入ってきた。

少し前、青い顔をしていた女性の横にいた人物だろう。アレックスは怪訝そうな顔をしている女性、リサの顔を見て訊ねた。妙に顔が赤い気がするが気のせいだろうか。

「何かあったのですか？」

「えっと……それが、助教授と同じ姿のひとが校内をうろついていたもので。」

その、ぜ、ぜ、全裸で」

しばらく部屋に沈黙が流れた。

アレックスはまず自分の耳を疑った。疲れているのだろうか。彼女は何を言っているのだろう。なにしろ、自分はここを一步も出ていない。そもそも記憶にある限りは、生涯で一度も、裸で人前をうろついたことなどない。

神に誓ってない。

だが、この学院内で研究されているのは、錬金術だけではない。

天文学、神学、心霊術、召喚術などなど、人が知りうるさまざまな学問の全てが研究されているのだ。もしかしたら、それもそうした研究の一環であり、何らかの失敗作である可能性がある。

「それを、どこで見ました？」

「あの、この上の階の、悪魔学研究所の付近で……」

「分かった。確認してみます、君はそれが私ではないと会った人に伝えておいて下さい」

「わ、分かりました」

リサは少しほっとしたように頷いた。

アレックスは脱いだばかりのローブを持ち上げて、袖を通すと部屋を後にした。

同じ顔、ふたつ 3

やや薄暗い廊下を歩きながら、マリーは焦っていた。

そもそもどうして「彼」がなかったのだろうか？

探すにしても、まったく手がかりがないのだ。ただ、まだそんなに時間がたっていないから、遠くへは行っていないだろうというのが唯一の救いだった。

廊下を歩きながら、片端から鍵のかかっていない扉を開けてみる。

……いない。

少し美形に作りすぎたのだろうか？

誰かが気にいって持ち帰ってしまったのだろうか？

それとも、怪しい研究に使おうと持って行ってしまったのだろうか？

一番ありそうなのは最後の選択肢だ。

なにしろこの学院はそういう研究をする場所なのだから。

マリーはいつそのこと、このまま放置してしまおうかとも考えた。クリスさえ口止め出来れば、他に知る者はいないのだ。

マリーはそんなことを考えながら、廊下を歩き、ふと足をとめた。ここから先は「悪魔研究」をしている場所だ。学内でも極めて忌避されている場所である。マリーもあまりいい印象は抱いていない。かつて出資していた貴族の青年が死んだことがある。悪魔に魂を食われたのでは、などと噂されているが、真偽が定かではない。

行きたくない。

マリーは心の底からそう思った。

大体、研究内容が悪魔についてだけならともかく、召喚まで含まれているのが嫌だ。

あんな醜いものに魂を食われるなど、考えただけで身の毛がよだつ。

だからといって、スルーしてしまう訳にもいかない。

どうしよう。

悩んでいると、なにやら歓声が聞こえた。

マリイは思わず身を固めた。何があったのだろう。気持ち悪すぎる。しかももう夏も近いうえ、昼間だというのに、真黒なカーテンを締めきっている。

壁に設置された燭台のロウソクの炎がゆらゆらと揺らめく。

そのオレンジ色の炎に照らされて、何かがゆらり、と動いた。

「ひっ！」

マリイは思わず後ずさった。

もういい、もう嫌だ。ここを探するのは諦めよう。しかし、暗闇に背を向けるのが怖くて足が動かない。

男たちに強い女だとか、クールだと言われることの多いマリイだが、そんなことは全くない。

むしろ逆で、かなりの臆病者なのだ。

外見のせいでそう思われてしまうのもマリイの悩みの一つだった。恐怖で涙が出てきた。

それでも動けないマリイの前に、それは現れた。

「そ、そんな」

シヨックで言葉すら出てこない。

「彼」は見つかった。というか、いま目の前にいる。しかも動いている。

「彼」はマリイの目を見て、妖艶にほほ笑んだ。

そして、硬直したままのマリイの前まで「全裸」でやってきて、おもむろに顎に手を掛けて上を向かせる。頭が真っ白になっているマリイはなすがままだ。

「ふうん、なかなかの上玉じゃないか。丁度いい、あんた俺と契約しない？」

いい夢見させてあげるよ」

アレックスの声とは違う、優しい声。その声は耳をくすぐり、背筋をぞわり、と粟立たせる。

赤く輝く瞳がマリーを射抜くように見つめてくる。

瞳の色は確かに金色にしたはずなのに、その中に炎でも宿したような金赤色に変貌していた。

整った薄い唇からも、白い牙がこぼれおちている。

少しずつ、その唇が近づいてくる。

逃げなくては、とマリーが思った時、暗闇で派手な音がした。人が転んだようなドタツ、バタツという感じの音だ。

少しして、暗闇から黒ずくめの女性が出てきた。

「待って！ 待って下さい！ ハウエルズ様、ご契約はこの私が仰せつかります、どうか、どうか！」

悪魔学研究所からまろびでてきた少女は、見たところその学生のようなだった。黒ローブの下に、白い制服が見える。可愛い美しい少女だが、狂気めいた顔でこちらににじり寄ってくるため非常に怖い。

「お願いです、お願いです！」

少女はすがりつくように「彼」、どうやらハウエルズというらしいが、その足に両腕を絡めて何度も何度も願いをことう。

が、ハウエルズは至極面倒そうな顔で、

「えー、おまえまずそうだからやだ」

と言い放った。

美少女はその言葉に泣き崩れた。

ハウエルズはそれに一瞥をくれただけで、またすぐにマリーに向き直った。

同じ顔、ふたつ 4（前書き）

キス描写が出てきますので、苦手な方は読み飛ばして下さい。

同じ顔、ふたつ 4

マリーは、やっと少し我に返って、震える身体を叱咤して、必死に後ずさる。

「あれ、何で逃げんの？ 今あんた俺に気を許しそうになってたじやん」

「……貴方本当に悪魔なの？」

「うんまあそうだよ、呼ばれたから来てみただけだけど。なんか珍しいなあと思って。」

入れ物に宿れ、なんてこと初めてだからさ、面白そうだなあと思つて。

丁度空腹だったし、腹ごしらえついでにさ」

よくしゃべる悪魔だとマリーは思った。

「まあ気は済んだし、君を頂いて帰るよ。」

いやまてよ、いつそのこと連れ去って俺の愛玩物にしようかな、君、俺の好みだし。

それにこんな入れ物に入っていない俺の方がきつとずっと麗しいと思つよ」

ハウエルズは自分の胸に手を当てて、自己礼賛の言葉を並べる。

マリーは不意に自分の中で何かがぶちり、と切れる音を聞いた気がした。

「……で」

「で？」

「出ていけーーーーー！」

それは私が丹精込めてつくった最高傑作なの！

あんたみたいなカス悪魔なんかが入っていいものじゃないのよ、将来の恋人の予定でつくつたのに、気が済んだなら出ていけこのナルシスト！」

「カスって、おまえ少し前と性格違わねえ？」

「うるさいうるさい！」

マリーは叫んだ。

すると、不意に目の前が暗くなった。

唇にやわらかいものが触れる。それが自分の作りだした「彼」のものだと悟った瞬間、マリーの頭は再び真っ白になった。少しして唇が離れると、今度は舌で唇をなめられる。

温かくて柔らかい感触に、頭が真っ白になる。

「ん……っ、やめっ」

「やだ」

ふたたび口づけられて、マリーは動けなくなってしまった。

全裸の男性にキスされているというとてもない状況なのに、身体が動かない。逃げなければならないと思うのに、頭の芯がしびれてしまっ
てどうにもならない。しかも、口づけてきているのは、マリーが最も好きな姿をした存在なのだ。

抵抗する気力が奪われていく。

このまま……魂を食べられてしまふのだろうか。

舌が唇から侵入してくる。

「……やだっ、んっ」

こんなキスは知らない。今まで挨拶のキスしかしたことがない。

マリーは必死に理性を呼び起こして抗った。

彼の胸に両手をついて、なんとか押しやろうともがくが、びくともしない。

誰か、と声を上げようとした時、少し前に聞いたばかりの聲がした。

「どういうことですかこれは！」

まぎれもなく、アレックスの声。

すると、ハウエルズの手の力が緩んだ。マリーはもがいて、必死に彼の腕から逃げだすと、床の上に尻もちをついた。

「っ、痛……」

痛さに顔をしかめつつも、目を開けて状況を見る。

視線を上げると、蒼白な顔をしたアレックスと、興醒めしたようなハウエルズの顔が目に入る。

同じ顔がふたつ並んでいるのに、絶対に別人だと分かる。

マリーはとりあえずどうすればこの状況を無事に切り抜けられるかと考えを巡らせたが、ショックが残っており、どうにもいい案が浮かばない。

視線をさらに巡らすと、少し離れた場所で恥ずかしそうにうつむいているリサが見えた。

あれを見られてしまったのだろうか。

まさに穴があつたら入りたいという気分だった。

「貴方は一体誰なんです？」

何故私と同じ顔をしていて、ここにいるんです？」

アレックスが訊ねる。が、ハウエルズは、曖昧な笑みを浮かべて、
「さて、どうしてでしょう？」

と答えた。まともに答える気はないらしい。

それに気づいたアレックスは、悔しそうに押し黙る。

「くくつ、まあいいか。俺の事を知りたければその女に訊け。
せつかく久しぶりに地上に出てきたことだし、お楽しみは後にと
っておくことにするさ。」

またあとでな、俺好みの赤毛ちゃん」

ハウエルズは、せせら笑うように言うと、開いていた窓から飛び降りた。

「あ！ 待ちたまえ！」

アレックスの言葉も空しく、ハウエルズは窓の外へと全裸のまま消えた。

「くそ、一体なんだというんだ……」

アレックスは悔しそうにつぶやいて、今度はマリーに視線を向けた。

「貴女、何か知っているんですね？」

ちよっと詳しく話してもらいましょうか？」

「……は、はい」

ほとんど有無を言わせぬ気迫に、マリーは思わず頷いてから後悔した。

どう話せばいいのだろう。

マリーは嘘をつくのが苦手だった。

正直に言うしかない。

せめて立たないと、と思って、壁に手をつけて立ちあがろうとするのだが、足が震えてしまい、立ちあがれそうにない。

悔しくて唇を軽く噛む。

すると、アレックスが手を差し伸べてくれた。

「あ、ありがとうございます」

「倒れている女性を助け起こすのは当然の礼儀ですよ、礼などいりません」

言葉は優しいのに、声が冷たい。

怒っているのだ、ものすごく。

萎縮する心をなだめて、マリーはアレックスの手を取った。

骨っぽい、がっしりした手。

「彼」の指の長い綺麗な手とは違うのに、とても素適だなと思った。

「ふむ、ここでは落ち着かないですね。

私の部屋で話を聞かせて貰いましょうか……そこまで歩けますか？」

「は、はい。なんとか」

マリーはうつむいて答えた。

「ええと、リサ、でしたね。そこに倒れている学生をお願いします」
「はい」

答えたりサが心配そうにマリーを見てくる。

しかし、マリーはただ力ない笑みを返すしか出来なかった。これから、マリーがここに残れるかどうか決まるのだ。

気が遠くなりそうだった。

笑顔

マリーは椅子に座ったまま、気まずい思いで縮こまっていた。
あれからきちんと正直に経過の全てをアレックスに報告したのだ
が、何も言ってくれないのだ。

黙りこくったまま、動かない。

早く引導を渡して欲しい。

「マルガレーテ・ヘイスティングス」

「はっ、はいっ！」

いきなりフルネームを呼ばれて、マリーは上ずった声で返事をし
てしまった。

「……そんなに怯える必要はありません。

あなたはもしかしたら自分がここを辞めさせられるとも思っ
ているのですか？」

「ち、違うんですか？」

てつきり、やってはならないことをしてしまったのか……と」

マリーは顔をあげて、恐る恐るアレックスの顔を見た。

微かに、ほんの微かにだが、口元に笑みらしきものが浮かんでい
る。

理由は分からなかったが、マリーの胸がちくり、と痛んだ。

（あれ、なんだろうこれ？　なんだか胸のところがじんわりと温か
くて、ちよつと痛い……）

だが、謎の痛みはアレックスの次の言葉で吹きとんだ。

「違いますよ。むしろその逆です、私は君が欲しい」

「……え？」

マリーは耳を疑った。

「ここにはやる気のある人材がいな**い**とばかり思っていたのですが、
ちゃんといってくれて良かった。

あなたには私の助手になって頂きます。

教授にはそのように話を通しておきます。あなたさえよければ、
ですが」

マリーは呆氣にとられて、ただひたすらアレックスの顔を見詰めた。

「そんな、いいんですか？」

「ええ、私がここに来たのは、錬金術は人の役に立つ、素晴らしい学問なのだと世に知らしめたいがためなのですよ。なのに、教授はあんなですし、その下の学生も助手たちも、あまりやる気があるように見えなくて、ここに来た事を少し後悔していたのですが、君みたいな人がいるとは。」

人体を作り上げることは、先人たちが挑戦したあと、誰もしてこなかったことなのです！まさかそれに挑んでいる研究員がいたとは、私は嬉しいですよ。

まあ、よりによって私と同じ顔のものが全裸でうろついていたことには怒りを感じていましたが、そういう理由ならばむしろ私には僥倖きようひんです。

……ただ、なぜ顔が私だったのかだけは教えて下さい。

私はあなたを知らないのですが、どこかでお会いしたことがありましたか？」

アレックスはそれまで無口だったのが嘘のように喋りだした。

マリーは啞然とその様を見て、並べられた言葉を聞いていた。とりあえず怒っていないことが分かってひどく安堵したが、問われた言葉を思い返して我に返った。

あの非常に恥ずかしすぎる理由を言わなくてはならないらしい。嘘をつくのが苦手なマリーには、正直に言うしか道がない。

ごくりとのを鳴らしてつばを飲み込む。

「あの、その、ですね、あの顔は……………だから」

マリーは羞恥にうつむきながら、小声で言った。

「何ですか？ 聞こえなかったのですか？」

「わ、わ、私の好…………… ったら、たまたまそっくりに…………… てしまっ」

「あの、すみません、もう少し大きな声で」

マリーは少し涙目になって、覚悟を決めて言った。

「私の好みの顔に作ったら、たまたまそっくりになっちゃったんです！」

アレックスはしばらく黙った後で、引きつった顔で言った。

「あの、それはつまり」

「…………… そこまで言わせるんですか！」

マリーは思わずそう怒鳴ってしまった。

アレックスはまた押し黙ってから何度か咳払いをして、窓の外を見やった。

「そ、そうですね。」

申し訳ありません、愚問でした…………… さて、問題はあなたの作った人体に悪魔が入り込んでしまったことですね。

あんなのにうるつかれては私が困りますし、神学科の方に手伝って貰って払うのが賢明でしょう」

「そうですね！」

最低ですよあんな奴、いきなりあんなことするなんて…………… あんな奴に入り込まれるなんて、さっさと払って貰いたいです！」

マリーは強く言い放った。

まだ頭の中が整理できていないが、初めてだったのだ。

顔は確かに好みかもしれない。

それでも、最初のキスは好きな人と思っていたマリーとしては、やるせない気持ちだった。

「…………… 災難でしたね。」

しかし、魂を取られていたかもしれないと思えば、良かった」

アレックスはそう言うと、椅子から立ち上がってマリーの側まで来て、ぽんぽんと頭を叩いた。

「助教授……………」

その仕草に包み込むような優しさを感じて、マリーは目をぬぐった。

「やばい、泣いてしまいそうだ。」

「答えを、聞かせてもらえますか？」

マリーはアレックスの言葉に頷くと、震える声をなんとか整えようとぎゅっとこぶしを胸にあてて、小さく深呼吸し、それから答えた。

「……これから、よろしくお願いします」

マリーが言うと、アレックスは嬉しそうに、本当に嬉しそうにほほ笑んだ。

またマリーの胸がやんわりと痛む。

「良かった。」

こちらこそ、よろしくお願いしますよ。

医学科と協力して人体の開発に力を注いでいきましょう」

「はい！」

マリーは頷いて、胸がつかえるような感じを押し殺して笑顔を浮かべた。

今まで感じた事のない感覚だった。けれど不快な感じではない。

「とにかく、今はあの厄介な悪魔を捕まえないと、あなたはどうしてもかなり疲れているようですから、一旦帰って休んで下さい」

「で、でも」

「休むことも大切な仕事なんですよ？」

はい、帰ってちゃんと食事を摂って休んで下さい。綺麗な顔が台無しですよ？」

その言葉に、マリーの心臓がどきりとはねた。たくさん男性に同じことを言われてきた。

けれど、彼らはすぐにマリーの仕事を知ると、声を掛けてくることすらしなくなった。婚約者にも言われたが、最後には君は気違いだと言われて逃げられた。

心に痛みがにじみだす。

それでも、目の前の男性から目を離す事が出来ない。

マリーはぐちゃぐちゃな気持ちで、アレックスに礼を言っていると、軽く頭を下げて部屋を出た。

それから、ぼんやりしたまま帰宅して、適当に買ってきた食事をとり、軽く身体の汚れをおとしてからベッドに入る。

実際「彼」をつくるために徹夜続きで疲れていたし、ショックなことが重なりすぎて、疲れていたから眠りはすぐに訪れてくれた。

過去

「なんだてめえ！」

「なんだっていいじゃん……っ」

ハウエルズは路上を歩いていた警備兵とおぼしき男を殴り倒した。
「がっ！」

相手は壁に頭を打ち付け、その場にぐてつとのびる。

「とりあえず、着るものがないとな、人間てな面倒だぜ」

ぼやきながら身ぐるみを剥いで、それを着る。

邪魔な革鎧や、いかにも警備兵ですといったモノだけは避けて、それらしく服装を整える。あまり着込んでしまっても不審なので、せいぜい上着を羽織るくらいにする。

そちらは近くの古着屋から盗んだものだ。

これでいいか。

いくらなんでも全裸でうろつくのがマズいのは知っている。

この国の、この街に来るのも久しぶりだ。まだ存在しているとは思わなかった。人の世の移り変わりは、悪魔である身にはあまりにも早い。気にいった人間を見つけても、すぐに死んでしまう。

かつて、気にいった人間がいたことがある。

それも女だったが、気付いた時には彼女は死んでいた。

自分と同じ世界に連れ帰り、人でなくしてしまえば、永遠に自分のものに出来ると考えていた間に、人と人との間に起きたささやかな争いに巻き込まれたのだ。

「と、言っても、まだ気になる程度だしな……」。

とりあえず、残り香を辿ってみるか」

ハウエルズは、目を閉じてそつとあの赤毛、確かマリーと呼ばれていた女の匂いを辿った。

それは街の中心部から発しているようだった。あの大学院からさ

ほど離れていない。

「よし、見つけた。

行って見るか」

そう言うのと、ハウエルズは人間には決して追いつけない速度で移動を始めた。

空間を飛んでいくような移動方法だ。

あっという間に、匂いのもとへとたどり着く。

そこは、集合住宅のある場所だった。雑多な人間たちの匂いにまじって、マリーの匂いがする。そもそも「匂い」と現すのも正確ではない。その人独特の、魂の色……とでも言えはいいのだろうか？とにかく、そうした匂いを追って、ハウエルズはマリーの部屋を探し当てる。

そこは大学院の敷地内にある寮のようだった。

まだ夕方であり、帰宅しているものは少ない。

ハウエルズは足音を立てず、そっと扉の前に立つ。

がっちりと施錠された扉をあっさりとすり抜けて部屋に入る。

そして、とりあえず黙ったまま部屋をよく見る。

あまりモノがない部屋だと思った。女性らしい飾りもないし、服をしまったための箱も簡素だった。家具もとても少ない。ベッドとテーブル、椅子だけ。そのテーブルの上には、食べかけのパンがきちんと紙に包まれて乗っていた。

他の人の部屋がどうなのか分からないため、判断のしようがないが、贅をつくした城に住んでいるハウエルズにしてみれば、ただの空間にしか見えない。

ただ、ひどく懐かしい感じがした。

それがなぜなのかは分からない。

けれど、ベッドに目をやり、寝息を立てているマリーを見ると、どうしようもなく連れて帰りたくなる。自分のものになって欲しいと思うてしまう。

「馬鹿な……人間なんて、あの人以外ただの食い物だ」

混乱した気持ちで目を眇める。

マリーはハウエルズの訪問に気付かず、健やかな寝息を立てている。

どうやら、この身体を作るためにかなり無茶をしていたらしい。相当疲れているようで、食事もそこに眠ってしまったのだろう。つ、と唇に触れる。

本当はあのまま食ってしまおうと思ったのに……。

食えなかった。腹は減っていたのだ……けれどそれよりも、もっと、もっとあの唇を味わいたいと思ってしまった。

「まあいいか……ここまで俺を執着させる理由は、ゆっくりと解明すればいい」

言いつつ、ハウエルズはベッドの端に腰を下ろした。

マリーは横向きになって眠っている。この女は男に人気がないらしい。この身体が持っていた記憶を読み取ったから、多少は知っている。

だが、とてもそうは見えない。

眠っている顔は、ひどく綺麗だった。

その顔に、懐かしい面影が重なり、ハウエルズは熱い湯に触れでもしたかのように手をひっこめた。

似ている、と思ってしまった。

あの人に……。

人の一生は一瞬で、その中でも輝けるのはさらにまばたきほどの間くらいしかない。その時の輝きを持ったまま死んだあの人と、この娘はよく似ている。

「はっ、そんなことある訳がない」

そうだとも。

さっさと食事して帰ればいい。そしてまた怠惰な日々を過ごすのだ。

そうすれば、余計な感情が沸き起こることもない。

ハウエルズはかつて、魔界の者たちに悪魔らしくない、まるで人

間になってしまったようだとなじられた。その時はそんなことはないと思っただ、取る行動があらさまに妙なので、後で納得した。だが、変わろうとしてきたのだ。

なら、確かめてみよう、この女を使つて。

悪魔の誘惑に勝てる女はまずいない。この女を陥落させ、自分の下僕にした後、魂を食らえば元の自分に戻れるかもしれない。

「そうしよう」

ハウエルズは薄い唇をゆがめて笑った。

そうだ、これはいい機会なのだ。

すやすやと眠っているマリーを眺めながら、ハウエルズはどうするか考えた。まずは、この女の弱みを握ろう……それには、交友関係から調べるのがいいだろう。

この女を誘惑するのはその後だ。

ゆつくりと、ゆつくりと籠絡なぐさくさせてみせよう。

そう決めると、そつとその場を後にした。

特別 1

目が覚めると、まだ外は暗かった。

「あれ、まだ夜かな？」

しかし、閉められた窓を見やると外はほの明るくなっている。

早朝のようだった。空気もやや肌寒く、マリーは上掛けを身体に巻いて、目を凝らす。

本当になにもない部屋だなと思う。

それはそうだろう、寝るのと荷物置き場くらいにしか使っていないのだから。

ここにいるのはただ単に、両親だけでなく親戚や知り合いに結婚の事をうるさく騒がれるのが嫌でたまらなかったからだ。

以前は家から大学院に行っていたのだが、いつ辞めるのかとか、いい人がいるのなら紹介しろだとか、社交の場にはちゃんと出て来いとか、帰るたびに言われるのだ。

そうやって、いいなりになってしまえば、こんなことをするのを止めてしまえば、きっと辛くないだろうとも思う。

それでも止めないのは、意地というより、ただただ楽しくて仕方がないからだ。

結婚適齢期ももうすぐ過ぎてしまう。

過ぎてしまったらおしまいだと嘆かれても、止めたくなかった。

ここの匂いが好きだ、変な器具や怪しい書籍を愛している。

だからまだここにいたい……。そのためだけに、妙なことになってしまったけれど。

とそこまでぼんやりした目覚めていない頭で考えて、思いだした。「そうだ！クリスのこと忘れてた！」

アレックスに見つかってしまったことがショックで、頭が真っ白になってしまった。そのうえ許してもらえた安心感から、色々なことを忘れてしまっていたらしい。

「なんてことよ！」

どうしよう、まだ探してるとかそんなことないわよね……」

マリーは慌ててベッドから抜け出て、姿見の前に立ち、着の身着のまま寝てしまったことを後悔した。ローブは脱いだが、下に着ていた服がしわくちゃだ。

なんとか着られそうなものをと服をしまった箱をあさり、淡い黄色のワンピースを取り出して着替える。

後でここの寮の管理人さんのところに洗濯物を頼みに行かなくては……。

あのひのことは苦手だが仕方ない。

マリーはため息をつく、急いで部屋を出た。

大学院へは寮から歩いて数分のところにある。

今日の天気は少し曇りらしい。もうすぐ、暑くてウンザリする夏がやってくると思うと、気分はやや落ち込んだ。

マリーは夏が嫌いだ。

暑くて研究に集中できないからか、ミスを連発したことがあるのだ。

いつかは錬金術で氷を大量に作れないかと頑張ったが、涼しくなるところつ、と忘れてしまうのでまるで進展しない。

今年は早めに取り組もう。そう決め、大股に歩きだすと、ふと前方に見た背中を見つけた。

アレックスがいた。

マリーは挨拶をしよう、と思ってそちらへ足を向けた。

だが、アレックスの傍に誰がいる。服装からして、女生徒のようだった。

頬が上気して赤くなっている。嬉しそうに楽しそうに話すその姿を見て、マリーは思わず足をとめた。

（あれ、足が動かない……）

ただ近づいて、挨拶してくるだけなのに、どうしても足が動いてくれない。

マリーは理由のわからないまま、しばらく立ちつくして様子を見ていた。

アレックスと女生徒の方は、マリーに気付かず、何か話している。助教授なので、講義などもしているはずだが、彼はまだ来たばかりだ。

女生徒の目的は、きっとアレックスと話すことだろう。

錬金術に興味がある振りをして近づこうとしているのかもしれない……。

あれだけ整った顔立ちの人物はそうそういないからだ。

そういう女生徒は、今までもたまに見てきた。その時はただ微笑ましかつたのに。なんだろう、すぐく、もやもやする。

（早く行かなきゃ……クリスが待つてるかもしれないのに）

マリーはアレックスへの挨拶は後回しにして、先にクリスに謝ろうとして、なかなか動いてくれない足を叱咤して歩き出す。

その時、マリーの視界に入ったのは、アレックスが優しくげな笑顔で女生徒の頭をぼんぼんと優しく叩く光景だった。

「……っ」

胸にナイフが突き刺さったかのような鋭い痛みが走る。

昨日、マリーの頭を優しく叩いた時と同じように、アレックスは優しく微笑んでいる。

マリーは不意に泣きたくなり、走り出した。

嗚咽をこらえて、涙が流れないように唇をかむ。泣きたくなかった。こんなどうでもいいことで泣くような自分なんて嫌だった。

必死で抑えていると、涙はやがて引っこんで、マリーは学内を走っていた。

そして、いつもの小さな研究室にたどり着くと、大きく息をする。理由がよく分からなかった。

なぜ逃げだしたのか？　なぜ泣きそうになったのか？

マリーにとって、アレックスとはただの上司だ。しかも理解のある、顔が好みの、優しい上司。

それだけ、それだけのはず。

「そうよ、それだけ」

けれど、もしかしたら、これが「恋」というものなのだろうか？
マリーは今まで「恋」というものを経験したことがなかった。

友達に説明されてもよくわからなかった。だからずっと「恋」することに憧れてきた。

ただただ、楽しそうなカップルが羨ましかった。幸せそうな若夫婦を見ては温かな気持ちになった。なのに、もしそうだとしたら、なんでこんなに胸が痛いのだろうか？

もっと、浮き浮きするものだと考えていた。

マリーはため息をついた。

もうこのことについて考えるのはやめよう。それより、今はクリスを探して謝らなければ。

考えても分からない感情に振り回されるのはごめんだった。

気持ちが落ち着いたところで研究室を出て、マリーは知り合いや、通りがかった人にクリスを見なかったかと聞いて回った。

やがて、休憩室でぶっ倒れてるよという返事が返ってきて、マリーは慌てて休憩室に急いだ。

特別 2

部屋の戸をあけると、ソファでひっくり返っている人物に目とまる。

マリーは申し訳なさそうにその人物に近づいた。

「寝てるの……？」

そう小さくつぶやくと、寝ている人物、クリスがぱつ、と目を開けた。

そしてマリーを見ると、怒りの形相のまま起き上がる。

「あれ？ 寝足りないのかな？ 目の前にうそつきが見えるんだけど……？」

「ご、ごめんなさいごめんなさい！」

一回寮に帰って寝てきたの……彼もちゃんと見つかって、まあ逃げられたけど」

「……ふん、つまり、僕のことは忘れてたって訳だ？」

「ちゃ、ちゃんと埋め合わせするから！」

本当にごめんなさいっ！」

マリーは謝りに謝った。

クリスはしばらく何も答えなかったが、少しして言った。

「お腹すいた」

マリーははっ、として、

「じ、じゃあ何か買ってきてあげる。何がいい？」

「甘いパン、なるべくたくさん」

「分かった！ 行ってくるから待ってて」

マリーは急いで休憩室を出ると、大学院入口近くにあるパン屋に向かって走り出した。

なんだか今日は走ってばかりな気がする……。

焼きたてを買い、大学院へ戻るときは流石に歩いた。ジャムを入れたものや、高価な砂糖やバターを使うケーキ類は結構高いが、埋

め合わせと思えばそんなに気になるほどではない。

現在では精製技術が発達して、昔より上質の小麦粉や砂糖が手に入るようになったから、値段も庶民に手が届く範囲になっている。

といっても、マリーの実家は上流階級だから、庶民ではない。

けれど、マリーはひとりで自活しており、収入もさほど多くなく、日頃買うものは庶民と大差ない。

ちなみに、クリスは酒屋の次男坊で、稼業は兄が継いだため、自分分は興味のあつた錬金術の研究をする道を選んだのだと教えられたことがある。

大学院内に戻り、休憩室へ行くとクリスはもうそこにはいなかった。

室内にいた助手仲間と訊ねると、第二研究室へ行つたと返事が返ってきた。マリーがそちらへ向かうと、クリスの中で何やら探し物をしていた。

「なにしてるの?」

「あゝお帰り。」

いや、マリーに手伝って貰おうと思つてた研究の資料が見当たらないんだ。

確かここに置いたはずなのに」

と言いながら、机の下や、引き出しを片端から開けていくクリス。

マリーは適当な台の上にパンの入った袋を置いて言った。

「手伝うわ」

「ああ、でもそろそろ教授挨拶の時間だ。探しものはそのあとだな…… たっぷり手伝つてもらうからな!」

「分かつてるわよ。徹夜でも何でもお付き合いします。迷惑かけちゃったんだもの」

マリーはそう答えてから、パンの袋をクリスに渡した。

「はい、後で食べて」

「おお、焼きたてかゝ、ラッキー。」

こいつは取られないように僕の荷物に入れとかないと」

クリスはパンを手にして嬉しそうに笑った。

いつもの第一研究室へ行くと、助手や研究員たちが集まってきた。リサもいる。彼女と目が合うと、マリーは苦笑いを浮かべた。リサはマリーを見つけると傍までやってきて、こそりと耳打ちしてきた。

「後でいいから詳しいこと教えてね」

「う……うん」

マリーは内心の動揺を悟られないようにしようとして、笑顔を浮かべた。

すると、教授室の扉を開けて、ワイアー教授が現れた。いつものようにもったいつけた動作が気にいらぬ。

「諸君、今日はまず発表したいことがある」

突き出たおなかを撫でながら、ワイアー教授は笑って、後ろのアレックスに合図した。

アレックスは持っていた書類を教授に渡す。

「このたび、新しい論文を発表出来る機会に恵まれた。

内容を聞いて欲しい」

そう言うのと、咳払いをひとつして、喋りだす。

マリーは最初はまたか、と黙って聞いていた。

教授は様々な論文を書き上げて、学会に発表しているが、その大半が大したことのない、どちらかといえば、上層部に媚を売っているような研究ばかりだ。

大半は足蹴にされて、ほとんど検討もされないまま終わる。

そのあとやってくる八つ当たりが迷惑なのだ。

だが、今回はいつもと違った。

内容もきちんとしている。しかし、なんだろう、どこかでこの内容を見た気がする。

嫌な予感がして、よくよく周囲に目をやると、クリスが青ざめているのが分かった。

マリーは瞬時に理解した。

かつて、同じ目にあつたことがあるからだ。

まだマリーがここに入りたての頃、まわりの圧力でやめさせられそうになったのだが、その時教授があるものと引き換えに救ってくれたことがある。

それが、マリーの研究内容を記した論文を、教授が書いたもののように発表することだった。

まだ研究員として未熟だったため、その発表は一蹴されたものの、マリーは残ることができた。そのあとで認められる内容のものを提出したため、マリーはきちんと残れることになったのだ。

しかし、これはそれとは違う。

噂では聴いていたけれど、信じたくなかった。

けれど、教授が読み上げる内容を聞けば聞くほど、手伝わされまくった時の記憶がよみがえる。

クリスは強く拳を握っている。

ここで逆らったらもう二度とここへは戻れないからだ。

（そんな、こんなことってないよ……）

マリーは強い憤りで、胃のあたりがぎゅっと痛むのを感じた。

他の仲間も気づいたらしく、時々気の毒そうな視線をクリスに送っている。

（このまま黙っているなんて……！）

マリーは自分のことを考えた。ここで声をあげたら、終わりだ。

けれど、胸にこもった憤りはどうしても黙っていてくれない。感情のままに行動してはだめだ。

そう言い聞かせる。

しかし、マリーは我慢が出来ず、口をひらいた。

特別 3

「あの、それは本当に教授が研究したものののですか？」

研究室に、気まずい沈黙が流れる。

クリスが首を何度も横に振る。それ以上何も言うなと言っているのだ。

しかし、マリーは見なかったことにして、言葉が続けた。

心臓の鼓動がひどく大きく聞こえる。今にも飛びだしてしまいそうだ。けれど、ここで言うておかなくときつと後悔する。

その一念だけで、マリーは言葉が続けた。

「私はその内容を知っているのですが、別の研究員の行っていたものと同じなのは何故ですか？」

「な、何を言っているんだね。」

これはちゃんと私がまとめたものだよ？

助手に手伝って貰ったことならあるからね、きっと君もその時見たんだろう」

教授はそういい逃れると、また咳払いした。

「盗んだんじゃありませんよね？」

マリーは言った。

教授の顔がみるみる赤くなっていくのが分かる。

クリスが泣きそうな顔をしているが、マリーは笑って見せた。

言ってしまうはどうなるのかは分かっていたのだから、気にしなくていいのよ……。

そう言っただけだったが、それは後だ。

「それ以上言ったらどうなるか分かっているのかね？」

「はい。それは別の研究員が書いたものです。」

私はそれを手伝っていたので間違いありません、元の持ち主に返して下さい」

マリーは言った。なんだか涙が出そうだ。

「そうか、しかし残念だがこれは私の研究だ。

言いがかりはよして貰いたい……後で私の部屋に来るように、分かっているね？」

「分かっています。」

でも、それは返して下さい！」

「まだ言うのかね……もう君はここに来なくていい！」

ついに教授も声を荒げた。

マリーの目から透明なはずくが流れ落ちる。分かっていたが、やはり、こみ上げる感情の渦に流されてしまう自分をとめられない。

「認めて下さるまで、言い続けます！」

マリーは涙声で叫んだ。

教授が、忌々しそうに言葉を発しようとした時、静かな声が割って入った。

「少しよろしいですか？」

アレックスが無表情のまま言った。

その場の全員がアレックスに視線を集中させる。

「なんだね？」

「発言してもよろしいですか？」

「かまわんよ……言いたいことがあるなら言いたまえ」

「ありがとうございます。」

それでは……」

アレックスは表情を変えないまま口を開いた。

「私の記憶によると、その研究を行っていたのはクリス・クローネという研究員です。」

教授はここしばらく、集まりなどにお出かけになっており、ひとつも研究をしておりませんが、間違いありませんか？」

アレックスが言うと、教授は目を丸くした。

「と、突然何を言い出すんだね君は……」

「いえ、時期尚早かとも思ったのですが、良い機会ですからここで言わせて頂きます。」

私は、学会の方から貴方の不正の証拠を探すようにと頼まれているですよ」

アレックスの言葉に、教授の顔が強張った。

しかし、それには構わず、アレックスは淡々と事実を述べ続けた。「確かに、貴方は学会とそれに連なる方々にとって有益となる研究を優先してくださるありがたい存在なのですが、それ以上に、学会の上層部は汚点を嫌うのです。」

今まで積み上げてきた権威を貶めるような行為が、いつまでも出来ると思いでしたか？」

そう告げて、アレックスは懷から一枚の紙を取り出した。

「これを御覧くだされば、私が嘘を言っていないことは分かるはずです。」

少々早いのですが、貴方には刑罰の執行がなされるでしょう。

今までしたこととも全て公にさらされます」

アレックスは紙を教授に渡すと、ため息をついた。

「では、本日からこの教授は私となります。」

皆さん、よろしく願います。

ワイアー教授ではありませんが、有益な研究は優先的に学会へと回しますので、励んで頂きたいと思えます…… それでは、私は挨拶のような時間の無駄は嫌いですので、本日以降行いませんが、何か質問があれば遠慮なく訊ねてきて下さい」

アレックスはそう締めくくった。

マリーは涙にぬれた顔をぬぐうことも忘れて、今の状況はなんだろうと考えていた。

頭が真っ白で、なかなか理解できないが、まわりの研究員たちがざわつきはじめ、しばらくしてちよつとした歓声が上がった時、やっと我に返った。

慌てて顔をそででぬぐって、クリスを見る。

彼はマリーより呆然として見えた。

身動き一つしないで、ぼんやりと中空を眺めている。

そこへ、アレックスがやってきて、教授が手にしていた研究書類をクリスに返した。

「さあ、改めてきちんと最後まで仕上げてから私に渡して下さい。期待していますよ」

「……………あ、は、はいっ！」

あの、あ、あ、あ、ありがとうございますっ！」

クリスの目に、光るものを認めて、マリーもなんだかまた泣きだくなってしまった。

クリスは戻ってきた自分の研究書類を大切そうに撫でた。

「あの、僕頑張ります……………」

「ぜひそうしてくれたまえ。」

その内容は実に興味深い……………まさかこんなに早く彼を追いつくことになるとは思わなかったが、それだけの価値がその研究にはある。楽しみにしているよ」

「はいっ！」

クリスは嬉しそうに返事した後、またしばし書類に見入っていた。マリーはただただ嬉しくて、その様子をじっと眺めていた。

すると、アレックスがそれに気づいて、マリーの傍に歩み寄ってきた。

心臓が勢いよくはねた。

「よくあの状況で彼をかばったね。」

すごい勇気だと思うよ……………やはり、君を助手に選んで良かった。

その熱意と誠実さをずっと大切にするんだよ」

アレックスはそう言ってほほ笑むと、マリーの頭をぽんぽんと叩いてくれた。

その瞬間、マリーは理解した。

ああ、そうか、私はこの人が好きなんだ……………と。

あの時逃げだしてしまったのは、嫌だったからだ。自分以外の他の女性に対しても、同じことをしているのを見るのが。

彼の、特別でありたい。

マリーはまた涙をうつすらとにじませながら思った。

「あの、私……頑張ります。」

クリスのこと、ありがとうございました」

「なに、遅かれ早かれこうなっていたんだ。」

死期を早めたのは教授自身だよ……さあ少し休んでから、仕事に取り掛かるう」

「はい！」

マリーは頭に置かれた大きな手が嬉しくて、笑顔で返事した。いつか、この人に認められるような研究をして、役に立とう。他に出来ることになって、自分にはない。

マリーは、自分が女性としてはどうしようもなくダメだということとはよくわかっていた。だから、せめて仕事で彼の役に立てればいい。

そう思った。

微かな胸の痛みには目をつぶろう。

気にしていても、先には進めない。

この厄介な感情に振り回されるのは嫌だった。

以前、そういう思いをしたことがあるから。

マリーはアレックスが頭から手をどけた後で、軽く会釈してから休憩室に引っ込んだ。

痛み 1

ハウエルズは、ソファでしどけなく横たわる女を見やり、嘆息した。

流石に少し疲れたような気がする。

疲れなどといったものを悪魔が感じることはないが、この虚しさのようなものは恐らく人間に当てはめたら、心が疲れた、ということになるのだろう。

それでも、大体のことは分かった。

この弱みを攻めれば、マリーは堕ちるだろう。

身体を手に入れるもよし、飽きたら魂を食らえばいい。

その頃には、あの強情な娘も調教済みだろうから、たやすく食える。しかし、そうしたとしても恐らく心が浮き立つことがないのは分かっていた。

ハウエルズは、暗い赤色をしたビロードの重苦しいカーテンに手を伸ばした。

柔らかいソファの上に立ちあがり、窓の外を見やる。早朝の少し前くらいのため、まだまばらに人がうろついている。大体は酔っ払いだ。

時々だが、ケンカでもしているのか、罵声が聞こえてくることもある。

横の女はよく寝ている。

彼女はマリーの友人で、既婚者だ。

夫は愛人宅に足しげく通うようになり、息子は乳母にとられ、寂しさから遊び相手を求めて歓楽街にいたところを捕まえた。

甘い言葉を囁いて、悪魔の持つ誘惑の瞳を使ったらあっさり落ちた。

マリーはそこまでしても落ちなかったが、ここまで簡単だとバカバカしくなってくる。

これで何人ものマリーの「友人」が落ちた。

行為に及ぼうと思えば出来たのだが、そこまでしなくてもぺらぺらと過去の友人の秘密をよく喋ってくれたので、秘蔵の香と酒を与えて快樂に酔わせるだけにした。

なんとなく、この借り物の身体を汚すのがためらわれたからだ。

皆、マリーほどの美しい魂は持っていない。魂だけではなく、外見までも、醜い。

不細工というほどでもないが、化粧がたっぷりされていて、心の貧しさから肌荒れしているのがありありと分かるのがなんとも侘しかった。

ハウエルズは、焚きしめた香が逃げないようにそつと窓を開け、まだ夏の暑さがじわり、と残る外へと飛び出した。そのまま屋根に飛び移り、街を一望する。

大学院は比較的大きな建物で、しかも変わった造りをしているためすぐに見つかる。

「さて、後はどう料理しますか」

ニヤリと笑い、ハウエルズは考えた。

正攻法で行こうか、それとも不意に訪ねて驚かせてみようか。

どちらにしても、マリーは終わりだ。

ゆっくりと、この懷の中に落ちてくる姿を思い浮かべ、ハウエルズは嗤った。

痛み 2

夜、寮の部屋へ帰ってきて、マリーは不意に床に座り込んだ。

「なんだろ、氣力がわかないや」

そう呟いて、ふと衣装がしまわれた箱からはみ出している布地を見た瞬間、心に鋭い針が撃ち込まれたみたいな痛みが走った。

「まだ……あつたんだ」

それは淡い緑色のドレスだった。

かつて着ていた服の大半は捨てたはずなのに、まだ一着残っていたらしい。

昔は、こんなふうな研究者になるのではなく、どこかの家に嫁いで妻となり母となるのが当然と思っていた。あれはその頃の残滓^{ざんし}だ……。

それとともに、思いだされる光景がある。

心を突き刺すような言葉を耳にするとともに知らずに、人々のさざめきの中を縫うように歩いて、小さい頃からこの人と生きていかなければならないんだと教えられた人物を探す。

彼の事はどちらかというと好きだった。

美男子だし、階級も同じ。

賭博や女性との浮ついた噂もあまり聞かないし、女学校の友人たちには羨まれていた。

社交の場でも、彼は理想の存在だった。

その時も彼を探していたのだが、その姿を見つける前に、言葉が聞こえてしまった。

「何が羨ましいものか。

あんな冷血女と結婚しなくちゃならない僕の身にもなってくれよ」

笑い声が上がった。

「そいつはないだろ？あんな美人なかないじゃないか」

「いや、話してみれば分かるよ。言葉こそ穏やかだけど内容とかす

「ごきついんだ。男がどれだけデリケートか分かってないんだよ。あんなの奥さんにしたら胃がもたないぜ。女としては失格だよ」
なんてひどいことを言う人だろう、そう思っただけをそれを見て凍りついた。

それからのはただ悲しくて苦しくて速くそこから去ることしか頭になかった。家へ帰って泣いた。それからしばらくは勉学に打ち込むことで色々なことを忘れた。

気づくと、勉学の方が楽しくなっていた。

社交の場へは、どうしても、という場合しか顔を出さなくなった。それでも、言葉は容赦なくマリーを痛めつけ続けた。

（私は、女としては失格……）

その言葉は、今でもマリーの心に突き刺さったまま抜けないトゲになっている。

例えば、マリーには男性もあまり声をかけてこない……そう、つまりそういうことなのだ。

それなら、もうなにも望むまい。女としての幸せは、所詮私には手に入らないものだったのだ。そう言い聞かせて、心をなぐさめた。折しも、錬金術と出会ったところだった。

しばらくした後、彼が駆け落ちしたという報せが入った。

親や親類にはあんな男と結婚しなくてよかったとなくさめられたが、噂ではマリーから逃げだしたのだ、とか、婚約者に魅力がないからだとか、借金があったのだらうとか、色々と言われていた。

マリーはますます社交の場から遠ざかるようになり、その時に大学院へと進んだ。

もう結婚とか恋とか愛とかはうんざりだった。

それでも寂しくて、恋人を作るなどとバカげたことをしてしまったのだ……。

そんなことをしなければ、こんな思いをまたしなくて済んだらうか？

マリーは不意に我に返った。

時々、こんな風にして痛みの海に溺れてしまっていることがある。その度に、こんなことではいけないと思うのに、心は言うことを聞いてくれないのだ。

「なんとかして、忘れなくちゃ」

マリーはため息をついて立ち上がると、テーブルの上のろうそくに灯をともす。

食事は済ませてきているし、アレックスの研究内容を教えられ、クリスにこき使われ、くたくただ。シャワーを浴びて早く寝ようと思った。

けれど、なんだか気が落ちつかない。

マリーの視線は自然とテーブルに向かう。

あまりモノの置かれていないテーブルには、ブランデーの瓶と小さなグラスが置かれている。

マリーはそれに手を伸ばした。

すると、不意に窓があき、誰かが入ってきた。

痛み 3

「……な、何！」

マリーは驚いて思わず床に尻もちをついた。
つくづく自分の運動神経のなさが嫌になる。

痛む尻の抗議は放っておいて顔を上げると、整った顔が月光に照らされてこちらを覗き込んでいた。

「……ハウエルズ」

忌々しげにその名を呼ぶと、彼はなぜか嬉しそうに笑った。

「名前覚えてくれたんだ」

「当然よ。私の傑作を持ち逃げした忌々しい悪魔の名前だもの、忘れるわけないでしょ」

そう答えると、ハウエルズは窓からマリーの部屋へ入ってきた。

きちんと施錠したはずなのに、なぜか鍵がきかないらしい。

悪魔だから、と言えばそれまでだが、なんとも腹立たしい気がした。

「それで、何の用なの？」

「あれ、絶対にこの身体を取り返してやるとか息まいてたのに、何もしないんだ」

ハウエルズはからかうように言った。

マリーは眉間に縦じわを刻んだまま口を曲げる。

全く、いったいなんだってこんな時に現れるんだろう。

今のマリーは弱っている。こんな時に来られたら、対抗できる自信がない。

唇を奪われた時の事を思い出し、マリーは胃が痛くなった。

「帰ってよ、今日はあなたの相手してる気分じゃないの」

「ふうん、もしかしてさ、ハロルドってのが関係してる？」

「……！」

マリーはその名前を聞いた瞬間、思わずハウエルズを睨んだ。

「私の前で、その名前を言うのはやめて！」

思わず声を荒げてしまい、マリーはハッとして口をつぐむ。

ハウエルズは笑っている。

その口元に浮かぶ魅惑的な笑みに、マリーは思わず見入ってしまった。

「復讐したい？」

深い、耳触りのよい声が鼓膜を震わせる。

「俺だったら叶えられるよ、何でも、君が望むものをあげられる。

一緒にいようよ……俺はお前が欲しい」

弱っていた心の隙間をくすぐるように、言葉が脳を揺らす。

「どうして、私なんかにそんなにこだわるの？」

そこまでしなくても、魂をとって食らえる人間なんかたくさんいるでしょ？

他の人の所へ行つてよ」

そう言ってから気付く。

他者に押し付けることで目の前の存在から逃げ出したい自分がいることに。

ひどい人間だと思う。

このまま流されたほうが楽なのは理解できる。それでも嫌だった最後のプライドだ。

「そうだね、自分でも変だと思う。

俺はただ、君のことが知りたい……それには、俺の所へ来てもらうのが一番だからさ」

ハウエルズはそう言いながら、ゆっくりとマリーの近くへ歩み寄ってくる。

マリーは尻もちをついた姿勢のまま、後ずさりした。

ちゃんと人間の服をまとして、堂々と立つ姿は、自分が造形したなどと信じられないくらい、存在感があった。月の光に浮かび上がる輪郭が綺麗だと思った。

声こそアレックスとは違うが、頭の中が混乱するほど、心が騒ぐ。

「君は恋人欲しさにこの身体を作ったんだろう？」

なら、俺が魂の代わりをつとめてあげるよ、悪くない話じゃないか。

お互いに欲しいものが手に入るんだ……なのに、なぜ君は頷かないんだ？」

「そ、それは」

そうだ、考えてみればそうだった。

今まで色々なことがありすぎて、じつくりと考えてみる暇などなかった。

マリーは嘆息して、床の上に座りなおした。板張りの床は冷たかったけれど、それが頭を冷やす役に立った。床の上にはうつすらとほこりが積もっている。寮母さんが掃除してくれているとはいえ、自分ではなにもしていないのに、ほこりは溜まっていく。

除去しない限り、そこに積もり続ける。

まるで心の中の痛みのように……。

「私は、あなたのことは好きじゃないのよ。」

恋人の代わりとか、そういうのは嫌なの、ちゃんとそこに愛が欲しいのよ」

マリーは疲れたように呟いた。

それを聞いたハウエルズは怪訝な顔をした。

「誰かに愛を求めても裏切られるかもしれない。」

それが嫌でこの身体をつくったんじゃないのか？」

ハウエルズの言うとおりだった。裏切られて傷つくのが嫌で、もう一度同じ思いをしたくなくて、マリーはあの「身体」を作ったのだ。

それを恋人のように扱うことで心の隙間を埋めたくて。

けれど、マリーはアレックスに出会ってしまったのだ。

「そうよ、でも気付いたの。」

そんなことをしても、自分を苦しめるだけだって……だから、身体を返して。

魂が欲しいなら、それを望む人の所へ行けばいい、どうしても私でなければだめだというなら、しばらく待ってくればいつかあげるから」

マリーは真つ直ぐにハウエルズを見て言った。

ハウエルズは、なぜか傷ついたような顔をした。

「いつまでも、自分の失敗を残しておきたくないのよ。

お願いだから……返して」

「何で……」

「え？」

「何で俺じゃだめなんだ！」

唐突にハウエルズが叫んだ。

マリーは何故目の前の悪魔がそんなことを叫ぶのか分からなかった。

しかも、その表情はまるで人間のようで、悲痛にゆがんでいる。

「あいつもそうだった……アミールアも、同じことを」

ハウエルズは独白するように言い、それからハッと我に返った。

慌てて口元に手を当て、悔しげにマリーを見ると、次の瞬間身をひるがえし、風のように窓から出て行ってしまった。マリーは突然のことにただただ呆気にとられるばかりだった。

痛み 4

まるで嵐が過ぎ去ったあのように、思考がなかなか戻ってこない。

開けっ放しの窓から吹き込む風が、ゆったりとカーテンを揺らしているのを眺める。

その風はひどく冷たくて、身体の芯まで冷やすようだった。

「何だったのよ……もう」

唐突に戻ってきた静けさは、今しがたの言い争いをマリーにまざまざと思い起こせる。

「……俺じゃダメ、か」

額に手を当て、髪をかきあげる。うつすらと汗ばんでいるのが分かった。

マリーは重い身体を起こそうとテーブルに手をかけ、なんとか立ちあがる。それからふらつく足でベッドに向かい、倒れこんだ。

うつ伏せに倒れこんだまま、ぼんやりと考える。

何故、ハウエルズはあんなことを口走ったのだろう？

再び開いてしまった自分の心の傷から目を反らしたくて、ハウエルズのことを考えた。

「……アミーリア、って誰なのよ」

女性の名前であることは間違いない。

もしかしたら、とマリーにある考えが浮かんだ。

それを弄ぶように、さまざまな事を勝手に想像してみた。

もしかしたら、あの身体に入り込んだ悪魔は、かつて人のように人に恋してしまったのかもしれない。悪魔に性別があるのかどうか定かではないが、一応名前や言葉づかいからして男だと思う。「アミーリア」とはその恋した女性の名前なのではないだろうか？

そしてあの様子からすると、彼の思いは叶わなかったのだ。

悪魔であるハウエルズがいつ生まれたかなど分からないが、少な

くともマリー達の何倍も生きていて、寿命らしきものがないのだから（悪魔被いに消されたり天使に消されたりはするかもしれないが）その「アミールリア」という女性はすでにこの世の人ではないだろう。「そっか、だとしたら、あいつも色々失ってるのね」

言ってみて、マリーは違うなと思った。

そもそものはじめから、マリーはハロルドが好きだったわけではない。恋ではなく、ただ好意だけ抱いていただけだ。友人ですらなかった。

恋は、そんな生易しい感情ではない。

だから、マリーは失ってはいないのだ、まだ……思いを伝えていないのだから。

今になって、ようやく気付いた。

相手がただただ欲しくてたまらない……気持ちを押し殺すのは本当に辛い。この思いを暴走させることはきつとたやすいのだ。けれど、それでは自己満足に過ぎないし、マリーのプライドも許さない。『女としては失格だよ』

マリーの心をずたずたにした言葉が脳内をまわる。

それでも、アレックスの役に立ちたかった。

言ってしまうば色々終わる気がした。

だから、殺すのだ、忘れるのだこの痛みを……。

マリーは嘆息してむくり、と起き上がり、そっと酒の瓶に手を伸ばした。

気づき 1

朝日がまばゆく、清浄な色をとまって研究室に差し込んでいる。アレックスはそんな気持ちのよい空気の中で、器具の手入れをしていた。

少しでも不純物が混ざらないように、定期的に手入れをしなければならぬ。錬金術に使われる器具は皆繊細なのだ。少しでも怠れば、錬成に失敗してしまうこともある。その時に稀代の錬成が出来ていたら取り返しがつかない。

特に入り組んだ構造をもつガラスの器具は、掃除するにもコツがいるのだ。

「今日は金属を扱う予定だったな……」

つぶやいて、黒板に書かれた内容に目を走らせる。

アレックスにとって、一人でその日のことについて考えを巡らせるこの時間は、とても落ち着く、安らげる数少ないひとときだった。教授の座にいた邪魔者を追い払って以来、研究員や学生たちにも活気が戻り、毎日が充実していると感じる。

新しく見出した助手のマリーの能力も申し分ない。

彼女に自分の研究を手伝ってもらえれば、アレックスにとっての悲願が達成される日もそう遠くないように思えた。

だが……。

アレックスはふと手を止め、研究室の戸に目をやった。

ここ数日、マリーの様子がいつもと違うことに、アレックスは気付いていた。

顔色も悪いし、目の下にはいつも隈が出来ている。まともなものを食べている姿も、そういえば見ていない。あまり眠れていないようだ。ある日など、酒のにおいをさせていた。

が、彼女の性格からして、昼間から飲んだりほしないだろうから、昨夜飲んだものが残っているに違いなかった。

何か、悩み事でもあるのだろうか？

だとしたら、その力になってやりたい。

彼女は優秀だし、やる気もある。ここで身体を壊したら、なんにもかもが潰れかねない。

それはとても惜しいことだとアレックスは思った。

不意に、なぜ自分そっくりの身体など作ったのかと尋ねた時の様子が思い出された。

その時の彼女はともかわいらしかった。

思わず口元がほころんだところで、戸が開いた。

一瞬マリーか、と思ったが、入ってきたのはクリスだった。眠たげにあくびをしながら入ってきた彼を見て、アレックスは思わず失笑した。

一方のクリスはアレックスの姿に気づくと、慌てて口をふさいだ。「すみません、いらっしやるとは思わなくて」

「いや、気にしないでいいよ。」

少しばかりだらしない姿を見たからと言って、いちいち咎めたりするのは変な話だと思うんでね。

ただ、やるべきことまでだらしないのは良くないが……」

アレックスは苦笑気味に言った。

個人的に、目の前の青年には好感が持てる。

所作がだらしなかったり、軽口をたたいたりしていても、決してそれが嫌みではないからだし、何より研究に対する熱意が、アレックスにはとても好ましい。

錬金術はもとの怪しい印象と、目立った成果が挙げられていないせいで、学問の中ではかなり扱いが低く、人によっては薬学や鉱物学と混同している者すらいる。

だからこそ、有用性を強めるために、優秀な人材はいくらいても良いと思っていた。

そのクリスは、マリーとは仲が良いのか、よく一緒に研究をしている。

最近では自身の研究が手詰まりなのか、よくマリーについてアレックスの研究室へやってくるようになり、彼にも手伝ってもらっているのだ。

今では毎日のように顔を出すため、すっかりなじみの顔となっている。

「そりゃ……そうですね」

クリスはニヤリと笑って見せ、それから今日やることについての確認作業などを始めた。

アレックスはふと、彼ならばマリーの不調について知っているかもしれないと思い、器具を磨く手を止めて訊ねてみた。

「そうだ、君なら分かるかな」

「はい？」

「いや、最近マリーの様子が変だと思うんだよ」

そう言つと、クリスは「ああ……」とうめくような声を出した。

「多分、またいつもの発作みたいなものだと思いますよ。」

あれ、でも変だな。

春はまだまだ先だつていうのに、何かあったかな……？

クリスは説明しようと口を開いたが、途中でなにやら考え込むようになしぐさをして、首をかしげた。

「発作？ 発作ってどんな？ 何か病気を持ってるんじゃない？」

アレックスは心配になり、やや身を乗り出して訊ねた。

気づき 2

「ああ、違いますよ、トラウマってやつです。」

あいつ、昔婚約者に別の女と駆け落ちされたんですけど、その時かその前かにひどいこと言われたらしくって……内容は忘れちゃったんですけどね。

ほら、マリーの家って上流階級でしょう、シーズン中には色々な催しに呼ばれるんですよ。

そのたびに周囲の人間から気の毒そうに見られたり、あからさまに陰口叩かれたり。

そのせいでよく夜眠れないってこぼしてましたよ」「
クリスはやや憤慨したように言った。

「何が嫌であんなイイ女振ったんだか分かりませんがね。」

リサとか、仲のいい友達がなぐさめてもどうにもならなかったみたいで……。

正直、あんな幽霊みたいなマリー見るのはこっちも辛いです。

でも、まだそんな時期じゃないはずだし、最近は行かないようにしてるって言ってたんで、ちょっとは大丈夫かな、とか思ってたんですけど……やっぱり何かあったのかな？」

最後はぼやくようにクリスが言った。

アレックスはクリスの話した内容を聞いて胸が痛んだ。

おおまかなことしか語られていないが、マリーの心中を察すると、ひどく強い怒りが込み上げてくる。

「そうか、辛い思いをしたんだね」

「ええきつと辛かったらうなって思いますよ。」

ほら、マリーってああ見えて自分を責めちゃうようなところがあるから心配なのよ、ってリサも言っていましたしね。

とにかく、僕としてはそんなクズ男さっさと忘れて欲しいところですよ。

何より、マリー自身のために、ね」

クリスは肩をすくめて、悲しそうに言った。

そんなクリスを見て、アレックスはなんとはなしにつぶやいた。

「君はマリーのことが好きなんだね」

「そりゃあまあ、マリーがいなければ僕はここにいらなかったですし…… っていうても、恋愛感情とかじゃないですけど。」

どっちかというところ危なっかしいんだけど、でも時には頼れる妹、みたいな存在ですよ。

どのみち身分違いですし……」

クリスは苦笑交じりに言ったが、後半ふと言葉を濁した。

「…… どうしたんだい？」

「ずいぶんと、その、マリーのことを気づかうんですね」

「え！ いや、最近とにかく具合が悪そうだったものだから気にしていてね……」。

ささいな病でも、大病に化けることがあるから気をつけないと。

せっかく出来た優秀な助手を失いたくないんだ、私は」

アレックスはやうろたえた。

返した言葉は、我ながら滑稽なほどじつまがあっていないように思われる。

なぜこんなに慌ててしまったのだろうか？

「それもそうですね、余計なこと言ってますいません」

クリスはその言ってアレックスの言葉を肯定したものの、納得した様子は感じられなかった。

アレックスは小さく嘆息して思った。

どうやらクリスは先程の発言で、私がマリーを好きだと思ってしまったようだ。

しかし、そんなはずはない。

そもそも、アレックスには結婚どころか、恋愛をする気など全くなかったからだ。

かつてアレックスの姉が、恋愛を経験したことにより身も心もボ

口ポロになって亡くなったのを見た時に、決めたのだ。

恋愛が、何もかも全てを失ってしまう病のようなものならば、最初から避けるべきだと。

あのような最後をとげたくなかった。

アレックスには成し遂げたいことがあるのだ、そのために、リスクと思われるものからはなるべく身を守っていたかった。

だが、なぜこつも胸が痛むのか。

その時、戸が小さな音とともに開いて、マリーが顔を出した。

アレックスはそのやつれた顔を見た瞬間、彼女を捨てたと言う男を殺してやりたい気分になった。

「おはよう、今日は珍しく早いね」

「うん、なんか掃除するとかなんとかでたたき起こされちゃって、部屋から放り出されたんだ……というかマリー、まだ眠れてないんじゃない。薬学部に知り合いいるから薬貰ってやるって言ってるだろ？ ひどい顔だよ」

「失礼ね、まだそこまでひどくないわよ。もっとひどい時あったんだから」

マリーは少しむくれて言った。それからアレックスに気付くと、笑顔を向けてきた。

「教授、おはようございます。いつも早いですね」

「ああ、おはよう。その、本当に大丈夫なのかい？」

「え？ 平気ですよこんなの。さあ、今日はなにをするんですたっけ、ああ、そうか……昨日の金属の続きでしたよね。」

えっと……」

「……マリー、そつちじゃなくてこつち」

クリスが、見当違いの場所を探し始めたマリーに言った。

「あ、ごめん」

それから二人はいつものようにやりとりをしながら準備を始めた。いつものように。
変わりなく。

それがクリスの優しさなのだろう、いつもどおりに接することが、アレックスには出来なかった。と、いうより、どういう訳か口が恐ろしく重い、言葉を発せられる自信がない。

そうか、と妙に腑に落ちる思いがした。

かつて恋人を失ったことで亡くなった姉が言ったとおりだ。

どんなに逃げても追ってくる、決して避けられない、そして、天国か地獄を与えて去っていく。それが人を好きになることなのだと気付かないふりをしていたのだ、自分の心すら偽って。そうやって自分の心を守っていたのに、クリスが無気なくした話でアレックスが築いた防壁はもろくも吹き飛んでしまった。

（そうか、私は彼女が好きなんだ。女性として……）

その事実、妙に優しくアレックスの心に突き刺さった。

思いの届くとき 1

しとしとと雨が降っている。

マリーはため息をついて窓の外をじっと眺めてから再びベッドへ戻った。

今日は学院は休み。

いつもは休みだろうとなんだらうと、勝手に研究室を使って何かしていたものだが、今は特にやりたい研究もないので、久しぶりに寮でじっとしていた。

本当はなにかに集中していたいのだが、近頃まともに休めていなかったから、身体の調子がかかり良くない。

今日もなんとなくだるくて、熱っぽかった。

仕方なく、昨日のうちに学院の図書館から貸出可の本を何冊か持ち出して来て読んでいる。

「全然内容が頭に入ってこない」

ややうらめしげにぼやいて、ベッドに倒れこんだ。

部屋はけっこう寒い。

外を見れば、まだ木々に緑が残っているのだが少しずつ赤や黄に染まってきている。

あれが赤茶けて散ればもう冬だ。

ハウエルズに身体を持っていかけたのが夏だから、ずいぶんと時間が経ってしまったな、とマリーはぼんやり思った。

「たまには、こんな日もいいか」

つぶやいて、マリーは久しぶりに心が休まっているのを感じた。しばらくそうして呆けていると、不意に戸がノックされた。

マリーは、ハッ、としてからすぐに首をかしげた。ここしばらくというもの、マリーの部屋を訪れたのは、あの悪魔以外にいない。

もしも彼であれば、まずこんな風にノックしたりしない。いきなり窓から侵入してくるだろう。

マリーは誰だかさっぱり分からずに、とりあえず声をかけた。

「あの、どちら様ですか？」

ここには大学院関係者しか入れないようになってはいるはずなのだが、マリーにはここを訪れる理由のある人物が全く思い浮かばなかった。

少しして、返ってきた返答の主はは思いがけない人物だった。

「私だ……ハーストだ」

返ってきた声に、マリーの心臓はひっくりかえって激しくうちはじめた。

「き、教授っ？」

マリーは転げるようにベッドから出て、慌てて戸を開けた。開けてしまってから、自分がひどい格好をしていることに気付いたが、もうおそい。

戸の向こうには、マリーが今最も見たくなかった人物が雨に濡れて立っていた。その手には、何やら大きな布のかたまりがおさまっている。

「やあ。」

いきなり訪ねてしまつて済まない」

「いえ、あの……どうぞ」

マリーはどう答えたらいいのか分からず、とりあえず中に入るよう勧めた。

寒い外に立たせっぱなしにしてはおけなかったからだ。

本当なら、未婚の女性が男性を部屋に招き入れるなどしてはいけないことだ。

けれど、今のマリーにはそのことに気付いても、追いつ返すなど出来なかった。

「いいのかい？」

「そのままじゃ、風邪をひいてしまいます。」

教授に、風邪をひかせるわけにはいきませんから」

アレックスの問いに、マリーはややうわのそらで答えた。

彼は、そうかと口元でつぶやいてから、少し恥ずかしそうに、大きな身体をかがめて部屋に入ってきた。そして、しばらく驚いたように立ちつくした。

「……これは、何と言つか」

「どうかしましたか？」

あ、教授は椅子にかけて下さい、私はベッドにすわりますから」
「あ、ああ」

アレックスは持っていたものをテーブルに置くと、言われたとおりに椅子にかけた。

それから、包みの中のものを次々と取りだしてならべはじめた。戸を閉めて、アレックスの髪などを拭くための布を取り出してからそれを見たマリーは、啞然とした。

彼が持ってきたのは、珍しい南国の果物、パンのかたまり（そうにしか見えなかった）、調理済みの肉や魚や野菜の缶詰、チーズのかたまり、ハムにソーセージ、バターなどの大量の食べ物と怪しげな薬の包みに、お守りらしき不気味な飾り物に、毛布だった。

「あの、なんなんですかそれ……？」

最後に小脇に抱えてきた薬草などが潰けられたワインの瓶を置いたアレックスに問う。

「見ての通りだよ。」

最近なんだか具合が悪そうだったし、あまり食べていないようだったからね、栄養をつけてもらおうと思って……。

ああ、説明が必要なものもあるね、これはよく眠れると評判の薬屋の薬。

このワインは滋養強壮に良い薬酒。

こっちは今流行の魔よけだということだよ」

アレックスは、なにやら目玉や生首がたくさんぶら下がっている謎の飾り物を手にし、しごく真面目な顔で説明した。

殺風景もいいところだったマリーの部屋に、これほどの色彩があふれたのは、良く考えてみなくても初めてのことだった。

マリーはまさか不眠と不調の原因は目の前の貴方です、などとは言えないので、口元を引きつらせて笑みを作って見せた。

「あ、ありがとうございます。」

あの、まさか今日はこのためにわざわざ……？」

「大事な研究も控えていることだし、君に倒れられては困るからねアレックスはこともなげに言った。

その言葉はマリーの胸をするどく貫いた。

けれど、涙だけは見せなくなかった。

「私は、大丈夫ですよ。」

気づかいは嬉しいですけど、体力だけはあるんです私。

風邪だって滅多にひかないんですよ」

顔を見られたくなくて、マリーはつつむきがちに、早口で言った。

「そう言う訳にはいかないよ。」

まだ平気に思えるのは若いからだ、強いからではないんだよ？

もっと自分の身体をいたわってやりなさい」

アレックスは心から心配してくれているようだった。

マリーは少し顔をあげ、その心配げな優しい顔をまともに見てしまった。思わず、感情があふれてきて、泣き笑いのような表情になっってしまう。

「そんなの、無理ですよ」

疲れたように、マリーはつぶやいた。

そう、もう本当に疲れていた。

強情を張ることも、自分の気持ちを隠すことにも……。

「それはどうして？」

悩みがあるなら私に相談してはくれないか？

いや、私などで役に立てればの話だが、言ってしまうえば楽になることもある」

マリーは不意にピンと来た。

「……もしかして、もうご存じなんですか？」

マリーはやや剣呑な気分で訊ねた。

アレックスの言い方からすると、すでに知っているはずだと思った。案の定、アレックスはやや戸惑ったように、マリーから目をそらした。

「そうですか……別にいいですけど」

いったん口を閉じて、マリーは外の雨音を聞いた。

散々悩んできて、なぜこんなに苦しいのかは分かっていた、

それは、ハロルドの言ったことを否定できないからだ。

自分が情けなくて、悔しい。

それでも、最初の頃はそんなじゃない、私はそんな女じゃない！
と言いたくて、自分を変えようと努力もした。けれど、どれだけ
欠点を克服したかに見えても、周りの見る目は変わらなかった。

そうして、結局はいつもこの自分に戻ってしまう。

もう彼の言葉を覆せない。

心にそんな諦めが染みついた時に、ほとんどヤケクソであの身体
を作ったのだ。

そのマリーの前に、アレックスは現れた。

最も自分のことを女性として見て欲しいひとが現れてしまったの
だった。

思いの届くとき 2

「昔言われたことを、いまでも引きずってるなんて、馬鹿ですよ」

……私」

マリーが言うと、アレックスはハツとしたように顔をあげた。

「……そんなことは」

「いいんです。」

いつものことですから……教授の研究にご迷惑はおかけしません」
マリーはそう言うと、深呼吸した。

落ち着かなくては……そう自分に言い聞かせる。

「そのうち、復活すると思います……」

言葉は最後まで続かなかった。

気がつく、マリーはアレックスに抱きしめられていた。

あまりのことに声も出せず、身体はちいさく震えた。

「そんなに、無理をするな。」

私にとって、君は大切なひとなんだ」

耳元で、囁くように放たれたことば。

それを額面通りに受け取れたなら、こんなに幸せなことはないの
に……。

息を吸うと、彼の匂いがする。

研究室のものと、彼の身体の匂いとが入り混じった匂い。

マリーにとって、いま一番好きな匂いだった

そして、思わず言ってしまった。

「それは、どういう意味での“大切”なんですか？」

マリーは言った。

もう、黙ったままではいることは出来なかった。

背中にまわされたアレックスの手がこわばるのがわかった。

やはり、彼も他の男と変わらないのだろうか？

マリーは、女性として見てもらえない存在なのだろうか？

小さく息を吐いて、マリーはついに言った。

「私は教授が好きです。もちろん、教授として尊敬しているという意味でも好きですが、ひとりの男の人として、あなたが好きです」アレックスは驚いて、マリーから身体を放すと、じつと顔を見つめた。

マリーはその視線がいたたまれなくて、うつむいた。

「返事は無理にききません。ただ私が言っておきたかったただけなので……」

口ごもりながらもぞもぞ言う。

とにかく恥ずかしくて仕方なかった。それ以上に、どんな言葉が返されるか怖かった。

けれど、言わないで後悔するより、言って後悔したいと思ったのだ。たとえ、そのことで傷つくことになったのだとしても。

今のマリーには、そう思えた。

やがて、アレックスが口を開く。

「いや……嬉しいよ。」

というより、先を越されてしまったな」

アレックスは茫然として言った。

マリーは耳を疑った。

いま、アレックスは嬉しいと言わなかっただろうか？

驚いてマリーは思わずアレックスを凝視してしまった。

「まさか、咲に言われてしまうとは思わなかった」

彼は同じことをくり返して言った。

しかし、ただ喜んでいるのではないように見えた。アレックスは

口元を手で押さえて、マリーを見た。

「ちょっと……予定が狂ったな」

「……え？」

「いやね、君が私を好いていてくれるだなんて思いもしなかったものだから……」

けど、言おうと思っていたことに変わりはないか」

アレックスはひとりごちるように言う。

両想いになれて嬉しい状況なのに、マリーは小躍りでもしたいくらいなのに、アレックスはまだ何か思い悩んでいるふうだった。

それがなぜなのか、早く言って欲しかった。

マリーは彼が次の言葉を発するのを、ただじっと待った。

心臓が破裂しそうな気分だ。

やがて、アレックスは言いにくそうに告げた。

「マリー、私はまだ結婚を考えていないんだ」

腹をくくったように、すべるように言葉がつづく。

「君のことが好きだ。」

結婚する気はないから特定の女性に思いをよせまいとしたんだが、だめだった。

君を、自分以外の誰かにとられるのは絶対に嫌だ。

これは本当なんだ……だが、同時に思ったんだ。この激しい感情はいつまでも続くものではないと。そして私はいま、何よりも研究が大切なんだ。

つまり、私はいま君と婚約出来ない」

アレックスはすまなそうにマリーから目をそらす。

「それでも、こんなひどい私でもいいなら、君の恋人にして欲しい」
絞り出すように、アレックスは言った。

まるで、懇願するようなその姿に、マリーはどう答えを返したらよいのかわからなくなってしまった。

そもそも、マリーは結婚や婚約などについては考えもしなかった。そこまで考えが至らなかつたのは、マリーの方も、アレックスが自分のことを好きだとは思っていなかったからだ。

もちろん、かつてそういった人生の一大事について考えてみたことはある。

あるのだが、ハロルドの一件のせいで、マリーはそれを自分自身の身に起こることとして考えるのをやめてしまっていた。

だから、いまのマリーは結婚ということの手前で止まってしまっ

ている。

改めて問われて、マリーは気付いた。

自分は、結婚していく友人たちが羨ましくて仕方なかったのだと。だから、本心をアレックスに言うのなら「ちゃんと婚約してくれなければ嫌だ」と言わなければならない。

けれど、目の前に立っている愛しいひとは、まるで雨にぬれた子犬のような顔をしていた。

雨のしずくがまだ髪や肩を濡らしている。

目をそらそうとして、それでもそらせずに、時折マリーをまっすぐに見る。

なにかにすぎるように……。

マリーはそれを見て、自分が傷つくことなどどうでもいい、と思った。

ただ、手を差し伸べたくてたまらない。

心は決まった。

「私は、かまわないです」

言ってみて、マリーはすぐに心が傷つくのが分かった。

それでも痛みをこらえて、微かに笑って見せる。

「教授の言いたいこと、なんとなく分かります。

いつか消える炎なら、お互い傷が少なく済むように……でしょう？」

マリーがそう言うと、アレックスは安堵したように息をついた。

彼はこう言いたかったのだ。

ひとつというのはいつ気が変わるか分からない。

だから、もしもそうなった場合を考えて、互いを縛るのはよそう。つまり、いつ終わらせてもいい関係でいよう、と……。

それは、永遠を、少なくとも死ぬその時まで愛を誓う間柄を望むマリーにとって、この上なく残酷な言葉だった。

けれど、そんなことはおくびにも出すまいとマリーは決めた。

（それでもいい、それでも、好きだと言ってくれた……）

「本当は、こんなことは言いたくない。

だけど、私はひとの心を信じることが出来ないんだ、一番信用できないのは自分の心かもしれない。

けど、君は理解してくれるんだね、嬉しいよ」

アレックスはちよつと悲しげに言つて、再びマリーを抱きしめた。彼の腕の中は、大きくて温かく、他の女性より身体の大きなマリーですら、すっぽりと包んでくれた。それなのに、ちつとも心が安らがなかった。

むしろ、心の一部が死滅してしまったかのような気分だった。

痛みや苦しみがマヒすると同時に、優しくて熱い思いもまた、なくなってしまうたような感じだ。

それからしばらくして、アレックスは持ってきた食べ物とワインで、マリーと一緒に軽く食事をしてから帰って行つた。食欲はなかったが、マリーが食べるところを見ないと気が済まない、とアレックスが強く言うので、無理やり食べた。

そのせいで、なんとなく胃が重い。

部屋にひとりになったマリーは、テーブルに乗っていたもの全てをひとまとめにし、布に包んで部屋の隅に置いた。それからアレックスの声がしそうで、見ていたくなかったのだ。

（誰かが持つていってくれば、この心の重荷も軽くなるかしら？）
ベッドの上にうずくまり、マリーはぼんやりとそんなことを思いながら、なんとかその日を過ごしたのだった。

うわさと本音 1

お互いの告白から五日ほどたった。

あいかわらず、マリーは毎日もやもやしていた。

というのも、あの日以来アレックスが何も言わないからだ。

あの雨の日の出来事が本当にあったのかどうかすら、なんだかわからなくなってしまうている。

しかも、時々ちよっとしたことに気付いて、思考の邪魔をする。

（キスひとつしない……のもやっぱり、婚約が出来ないとかと関係ある、のかな……？）

大切にされている、といえば聞こえはいいのだろう。

けれど、なんとなく不満がくすぶるのだ。

本当に好きなら、こんなふうにならないはずだ。

他のカップルを嫌な程見てきたマリーには、互いが恋人同士という気がまるでしないこの状況に混乱していた。

「……はあ」

思わず出たため息に、近くにいたクリスが嫌そうに眉をひそめた。

「おいおい、今日何回目だよ？」

聞いている方がうんざりするからやめてくれ……。

待てよ、もしかしたら薬が強すぎたりとか……はないよな？」

「ううん違うの。」

「ごめんなさいうつとうしくて。」

薬の効き目は丁度いいわ、お友達にお礼言っといてね」

「そっか、ならいいけど……あのさマリー、具合悪いならたまには休めよ」

「んー、でも研究してた方が気がまぎれるし」

マリーは金属の粉を秤にかけながら言った。

結局、マリーは痩せ我慢するのをやめ、クリスの友人から薬を貰うことにしていた。

眠れないまま体調を崩すのは良くない、アレックスにも心配をかけてしまう、と思い、はじめてみたのだが、これが意外と良く効いてくれた。

おかげで嫌な夢もみないで、すっと眠れる。
あまり長く続けるのは良くないと言われてはいる。

だが、気持ちの整理がつくまでだし、と考えて気にしないことにした。

長引いたら長引いたままでのことだ。

「まったくマリーは……」

クリスは呆れたように肩をすくめた。

マリーは彼の言いたいことは分かっていたが、あえて無視して作業を続けた。

すると、ふいに戸が開いて、リサが顔を出した。そういえば、研究内容が違ってしまっているため、あまり話をしていなかったのだ。マリーは久しぶりに友人の顔を見られたので嬉しくなっすぐに声を掛けた。

「リサ、どうしたの？」

もしかしてリサもこっちの研究に回されたとか……」

だが、リサはそんなマリーを困惑した表情で見つめた。
それから言いにくそうに切り出した。

「ねえマリー、教授とあなたがその……男と女の関係になってるって本当？」

マリーは思わずもっていたさじとピンを落としそうになった。

「ちょ……何で急にそんなこと！」

リサの心配そうな顔に、マリーは背筋が寒くなったような気がした。

まさか……見られていたのだろうか？

「いまね、ちょっとうわさになってるの……寮のあなたの部屋に入っていく教授を見たっ、て。」

それで、ほら、色々な憶測が飛びかって……」

「……そう、なんだ」

マリーはリサの言葉にやっぱり、と思った。

あの日は雨ふりだったにもかかわらず、見ていた人がいたのだ。それが口伝えに伝わり、うわさになってしまったのだろう。

実のところ、アレックスはあんなふうで、女性のこと対してはあまり積極的ではない。

だが、実際は女生徒や女性研究員たちのあこがれの的になっている。

あの容姿に加え、若さ、教授という地位、研究者としての能力の高さ、実績、そして名門貴族、ハースト家の出であることなど、女性たちが惹かれても仕方のない魅力を持ちすぎるほど持っている。

そんな感じで注目の的であるアレックスが、一女性研究員の部屋を訪ねたとあつては、うわさにならないほうがおかしかった。

「それとね、その教授があなたのこと呼んでる」

リサはちよつと興味がありそうな様子で言った。

マリーは思わず顔をこわばらせてしまった。

なにか言わなくては、と思うのに、のどがかすれてうまく声が出せない。

「……なあ、やっぱり何かあるんじゃないのか？」

クリスが作業の手を止めて訪ねてくる。心配そうな声色だ。リサもうなずいて、

「私もそう思う。」

ねえ、マリー……それは私たちにも言えないことなの？」

と訊ねてきた。

ふたりが本気で心配してくれているのに、何も教えられないのがマリーにはたまらなかった。

「うん、そうなんだ、ごめんね。」

いつか話せる時が来たらいいんだけど」

マリーはそう言って、ため息交じりに研究室を出て行った。

うわさと本音 2

「……本当にもう！ もう少し私たちを頼ってくれたっていいじゃない！」

リサは唇をとがらせて、不満げに言った。

「だよね、なんでああやって一人で抱え込むんだろう？」

それとも言えない事情つてのがよほどのことなのかな？」

やや諦めたようにクリスは言つて、作業に戻った。

「大変そうだし、力になってやりたいけど、マリーの方があれじゃあなあ。

だからといって、ムリヤリ根掘り葉掘り聞くのもちよつとなあ」

わだかまりが残るのか、ぼやくようにクリスはつぶやく。

それを耳にしたリサは眉をつりあげた。

「じゃあ私たちは何もできないっていうの！」

クリスも意外と薄情なのね、マリーに何度も助けてもらつておいて」

「そうは言つてないだろ！」

マリーは言えない事情があるって言つてただろ。

色々聞きたそうとするのもマリーを苦しめることになるってこと

だよ、僕はこれ以上マリーの負担を増やすような真似はしたくない」

いつもは穏やかなリサが噛みついてきたことに戸惑いながらも、

やや憤慨ぎみにクリスは言った。

リサは言葉につまり、次いで肩を落とした。

「もう。」

友達が苦しんでるって言うのに、何も出来ないで見守るしか出来ないなんて、なんだか自分が情けなくなっちゃうわ。

こうなったら、教授の方を問い詰めてやる」

「おいおい」

クリスは驚いてリサを見た。

目が据わっている。クリスはそんなリサを見て閉口した。止めた方がいいのは分かっているのだが、ああなってしまったらリサはとまらない。止めようとしたらひどい目にあった。

その記憶がよみがえり、クリスは小さく身震いした。

「じゃ、ちよつと言ってくるわね」

「ほどほどにね」

「多分無理」

リサは怖いくらいの笑顔で言うと、研究室を出て行った。

恐らく陰でこっそり教授とマリーの話が終わるのを待ち、それから突撃するつもりなのだろう。

面倒なことにならないければいいんだけど、と思いながら、恐らくあり得ないなと確信しつつ、クリスはまた作業に戻った。

うわさと本音 3

教授室の前に立ち、マリーはぐりとのどを鳴らした。

いままで生きてきて、たかがドアをノックするのにこんなに勇氣が必要だったためしはない。

（と、とにかく何かの話をするだけよ。

別に、大したことじゃないかもしれないじゃない……よし）

マリーは腹をくくり、ノックするために拳を握って振り上げた時、ドアが向こうから勝手に開いた。

図らずも、部屋の中の様子が目に入る。

目の前では、マリーの知らない女性がこちらを驚いたように見ていた。

それも、相当な美人だ。これほど綺麗な女性はなかなかいない。歳の頃はマリーとあまり変わらないように見える。

最新流行が取り入れられたファッションで全身を飾っており、その洗練された風情から、アレックスと同じ階級の人間だとすぐに知れた。

だが、その女性はマリーを目にすると、一気に美貌が台無しになるような顔つきをした。

（えっ！ な、何で……？）

マリーが理由も分からずに固まっていると、女性は部屋のほうを振り返った。

「もしかしてこの方が？」

柔らかな女性らしい声で彼女は訊ねた。

「……もう話は終わっていますよ、イーデイス」

すると、穏やかだが、どこか剣呑としたものを含んだ声が返ってきた。

それを聞いて、女性……イーデイスと呼ばれていたのだから名前だろう……は小さく鼻を鳴らして去っていった。

マリーはただ呆然とその背中を見送った。

「ああマリー、来てくれたんですね……入ってきて下さい」

「あ、はいっ」

呆氣にとられて頭の中が真っ白になっていたマリーは、慌ててノックしようと振り上げたこぶしをしまうと部屋に入ってドアを閉めた。

そういえば、こうして二人きりになるのは久しぶりだ。

「その……すみませんでした」

アレックスは唐突に謝った。

マリーはいままで放ったらかしにしていたことだと分かったが、何も言わなかった。

そのまま黙っていると、アレックスが困惑したようにマリーを見た。

「あの、何か言ってくれませんか？」

マリーはやはり何を言ってもよいものか考えあぐね、場に沈黙が流れる。

「えと、何か私に用があったのでは？」

とりあえずマリーは訊ねた。

正直に言つと、あの女性はなんなのか、誰なのか。なぜこんなに長く放ったらかしにしたのか。など、聞きたいことは山ほどある。けれど、この場所でそういう話をするのは何か場違いな気がした。アレックスは、少々気にいらなような、傷ついたような顔をした。

そして、ひとつため息をつくと言った。

「……君は、ここ数日、学院内で広まっているうわさについて知っていますか？」

「はい。」

先程リサに教えてもらいました」

マリーは答えてうつむいた。

「申し訳ありません、いきなりご迷惑をかけることになってしま

って」

「いやそれは違う。」

私が勝手に訪ねたのだから……君のせいじゃありませんよ。

それで、考えたんです、このままこのうわさを放っておくのはお互いにとって良くないと」

アレックスはマリーの言葉から何かを察したのか、急に表情を明るくした。

「それで、少しの間だけ、君に私の助手を外れてもらうことにしました」

マリーは耳を疑った。

「……そんな！」

それだけは嫌です！」

思わず声を大きくしてマリーは言った。

アレックスの役に立つことが、マリーにとっての全てなのだ。

他に残せるものや、望めるものがないのに。

研究に役立つことをし、手助けすることだけが、この思いを形に出来る唯一の場なのに。

ここで外されてしまつては、何の役にも立たない……。

「私とて嫌なんですよ。」

けれど、このまま一緒にいれば、ますますふたりとも身動きがとれなくなってしまうでしょう。

私はそれだけは避けたいのです……申し訳ありませんが、分かってください」

マリーは並べられた言葉のひとつひとつが胸に刺さるようで、いてもたってもいられなかった。

唇を噛んで、感情を散らすけれど、それもあまりうまくいかない。このままではまた泣いてしまいそうだ。もう泣きたくななどないのに。今までだって、十分すぎるほど泣いてきている。

マリーは、抑えきれずに胸の中の嵐を吐き出した。

「……そんなことになるなら、教授は告白なんかするべきじゃないんです。」

いいです、分かりました……。

どうせ何も始まってはいないんですから、最初からなかったことにします。

そうすれば、何も証拠は残りませんし、あったことすら誰にも分からないでしょう」

言いつつ、きっと今の自分はひどい顔をしているだろうと思った。「すぐに意見をひるがえしてごめんなさい。」

でも、やっぱり私には辛すぎます」

そう言い捨てるように言うと、部屋を飛びだす。

「待つ……！」

呼びとめる声が聞こえた気がしたが、マリーは足を止めなかった。ただただ苦しくて、息をするのも辛かった。こんな状態ではまともにものを考えられない。

（やっぱり、私に恋なんて向いてないんだ……）

そんなことを思いつつ、マリーは自分の個人研究室に逃げ込んでドアの鍵をしっかりとかけた。そのまま、ドアの前にくずおれるように座り込む。

「……何を言われても、平常心を保てると思ったのに」

マリーはぼやいた。

本当の心は、隠し通せるものではないということなのだろうか？

「自分の心に、裏切られるなんてね」

あの時、アレックスの心に寄り添いたと思ったのは本当だ。

だが、マリーが本来望む恋人像は、いまのアレックスの真逆の存在なのだ。

「もう、どうしたらいいか分かんない」

ひざをかかえて座り込み、マリーは痛みを訴え続ける心を抱えて、ため息をついた。

その時、前の方から声が降ってきた。

うわさと本音 4

「……なんかお取り込み中のところ悪いんだが」

マリーはびっくりして顔をあげた。

窓のところにいたのは、街をふらふらしている若者が着ているような、派手な色彩の服をまとったハウエルズだった。

何やら意味不明のことを言っただけで消えてからは音沙汰がなく、静かでもいいか、と思っていたら、こんなタイミングで現れるとは……。

「何か用なの？」

悪魔などの相手をしている余裕のないマリーは、むすっとしたまま言った。

「いや、ちよつと聞いてもらいたいことがあったんだが……。

その様子じゃ無理そうだな」

ハウエルズは初めて見せる、本気で残念そうな顔をして言った。

「何よ話って……魂ならまだあげないわよ」

「いや、ちよつと大切な話だから今はいい。」

急いでないしね、それより、お前の方が何かあったみたいだな。とんでもない顔してるぜ」

そう言いながらハウエルズは窓から下りて部屋に入ってくると、マリーに歩み寄った。

「……今あなたの顔は見たくないの。」

どっか行ってくれない？」

マリーが剣呑に言うのと、ハウエルズはにやつと笑った。

「あの教授と何かあった訳だ。」

じゃあ……忘れさせてやろうか？」

ハウエルズは、アレックスが決してしないだろう妖艶な笑みを浮かべた。

炎が宿っているような瞳を閃かせて、マリーのあごに手を掛ける。口元から、牙がのぞいていて、それがひどく艶めかしい。

拒否しようと顔を横に振るが、すぐにまた正面に戻される。

さらに抵抗する力は、マリーに残っていなかった。

「……ずいぶんと大人しいな。」

なんか、調子が狂う」

「しょうがないじゃない。」

もう、何もかも分からなくて、こんな状態の自分が嫌でたまらないのよ」

マリーは思わず本音をこぼしていた。

「こんなことになるなら、告白なんてして欲しくなかった。」

ただ、憧れたままでいられば良かった……こんな、先の見えな
い、いつ終わるのかも分からなくて、あの人に振り回されるだけの
関係なんて、やっぱり私には無理だったんだわ。

まだ、なにも始まっていないのに……絶望感しか感じられないな
んて……！」

マリーの瞳から、大粒の涙がこぼれ落ちはじめた。

ハウエルズは、思わずマリーの背に腕をまわし、抱きしめていた。
小さく震えている肩が、支えを求めているように感じられたから
だった。

（馬鹿な……。）

悪魔であるはずの俺が、いったい何を……？）

いま、悪魔としてのハウエルズがとるべき行動は、マリーをなぐ
さめながら甘い言葉で淫行をそそのかしたり、墮落への道をそつと
歩かせることのはずだ。

決して、なぐさめるために抱きしめるなどということではないは
ずだ。

（アミーリアに会ってからだ……）

原因はなんとなく分かってた。

今日は、そのことについてマリーに相談してみようと思ってやつ
てきたのだ。

この、どこことなくアミーリアと似たところのある娘ならば、これ

がなんなのか分かるような気がしたからだ。

だが、肝心のマリーがこれでは……。

ハウエルズはそこを動くことも出来ず、遠慮がちにマリーの背をさすった。

なぜか、マリーが辛そうな姿をしていることは、ひどく胸をしめつけた。

その時、ドアが激しく叩かれた。

「マリー！」

ここにいるのか、いたら返事してくれ！」

ドアの向こうから、心配そうなクリスの声がした。

マリーはびくつ、と身じろぎし、驚いたようにハウエルズを見て、やや慌てながら身体を離そうともがいた。ハウエルズは、少し意地の悪い気分になり、先程より力を込めて抱きしめた。

「マリー！」

……ここにもいないのか」

「い、いる！」

いるわ！ ちょ、ちょっと待って、いま開けるから」

マリーは必死になってハウエルズを押しつけて立ちあがる。

ハウエルズはおとなしく離してやった。

そんなハウエルズを少し睨みながら、マリーは目もとをそででぬぐってからドアを開けた。

「あ！ いた、良かった。帰っちゃったのかと思ったよ」

開けるなり部屋のなかにはいつてきたクリスは、もう一人の存在を認めて固まった。

「あれ、えーと、マリー……アレは？」

そう問われて、マリーははっ、としてハウエルズを見た。

気が動転していてすっかり忘れていた。そういえば、マリーにはすっかり彼の存在が当たり前になってしまっているが、クリスは動いている彼を見るのは初めてなのだ。

「初めまして。

とりあえず俺、あの笑わない教授様じゃないんでよろしく」

言ってハウエルズは、クリスに歩み寄ると妖しく笑った。

「俺の名前はハウエルズ……なあ、何か望みはないか？

何でも叶え……っぐっ！」

「な、なに言ってるのよこのボケ悪魔！」

いきなり契約を持ちかけようとしたハウエルズを、マリーは思わず手近な、重い本でどついた。

それからすぐにクリスの様子を見て、背中に嫌な汗が伝うのを感じる。

「あのさ、もしかしてあの時の……？」

クリスは顔をひきつらせたまま、ハウエルズを指差して訊ねてきた。

マリーは、もうどうしようもなく、とりあえずうなずいた。

「ま、まさか、いまマリーが教授とうわさになってるのって、こいつのせいだったり？」

違う、とマリーは言いたかったが、それではアレックスと何かあったことが分かってしまう。気が咎めたものの、マリーはクリスにうそをつくことにした。

ばれたら色々面倒だろうし、クリスを巻き込みたくなかった。

もしもばれてしまった時はひたすら謝ろう……そう誓って口を開く。

「えっと、そ、そうなんじゃないかな。

何かね、今は時々くる野良猫みたいになってるのよ」

「へえ、そうだったんだ。

確かに良く見てみると全然教授と違うね。雰囲気とかさ。

あ、僕はクリス。

あんたのおかげであの時はおいしいパンをたくさん食べられたし、とりあえずよろしくな」

クリスはマリーが拍子抜けするほどあっさりとハウエルズを受け

入ってしまったようだ。

「ちょ、ちよっと、いいの？」

そんなんで……そいつは私のつくった身体だけど、中身は悪魔なのよ？」

思わずマリーが言うつ、クリスはどこかあきらめにも似た表情で嘆息し、

「君の友人やってればいちいちこの程度で驚いてなんかいられないよ。

今までだつてずいぶんともないことをしでかしてきたじゃないか。まあ、ここまで突き抜けるほどともないことははじめてだけど」

と言つて、改めてハウエルズをまじまじと眺めた。

「本当の本当に悪魔が入ってるんだ……」

クリスは心底興味深そうにつぶやいた。

一方マリーはクリスに言われたことに反論が全く出来ず、渋い顔で口をつぐんでいた。

そんなマリーを置いておいて、ハウエルズは殴られたダメージから回復したのか、やや楽しげに軽口を返す。

「そうだけ。」

身体とは契約で縛られてしまっているから、本来の姿を見せられないのが残念だけだな」

「それは確かに！」

悪魔だつたらさ、男にも女にも変身できるんだろ？

それは見てみたかったなあ」

「ふふん、当然その程度はお安い御用だ。

この身体を出られてからだが、俺と契約すればどんな願いでも叶えてやるぜ。

お代は分かつてると思うけどな」

「ははは、知ってる知ってる。

まあ悪魔にお願いしたいことなんか針の先程もないけどね」

クリスの言葉に、ハウエルズは引きつり笑いを浮かべた。

「あ、そうだマリー」

「な、何？」

「忘れてた。話があつて探してたんだよ……リサのことなんだけどさ」

そう言つとクリスの表情が曇つた。

マリーはなんととはなしに嫌な予感がして、いいあぐねているクリスに言葉の続きを促せなかった。

それでも、クリスの表情が気になり、落としていた視線をあげるふと、開けっ放しにしたままのドアの向こうからこちらに急ぎ足で歩いてくる人物を見つけ、思わずあつ、と声をあげた。

うわさと本音 5

マリーは慌ててドアを閉めようと駆け寄るが、時すでに遅く、その人物……アレックスはすでに部屋の中にはいつてしまっていた。アレックスは入ってくるなり、いきなりハウエルズの腕をつかんだ。

「まだ存在していたのですね……あれ以来姿を現さなかったの、私はてつきり、マリーのことは諦めて別の誰かのところに消えたのだと思っていました……」

「そいつは残念でした。」

俺はまだまだマリーを諦めるつもりはないぜ」

ハウエルズは腕をつかまれたまま、歯を剥いて笑った。

尖った牙がのぞき、マリーは思わずぐくりとのを鳴らした。真っ白なその牙は、ハウエルズが宿ってから生えたもので、まさに彼が悪魔なのだと思いますもののように思えたからだ。

もしかしくなくても、その力を振るえば、ハウエルズは簡単にアレックスを引き裂いてしまえるのではと思って背筋が寒くなった。

さらに、マリーはアレックスの姿にも驚いていた。こんなにふうに激しく怒っている彼を見るのははじめてだったからだ。

「何にしても、彼女の様子がおかしい理由が分かりましたよ……あのまま去ってくれていれば、もう追う気はなかったのですが、そちらがあくまでもその気なら仕方ありません。」

使えるものはすべて使い、あなたを消します」

いつもは温かな色を帯びているアレックスの金色の瞳が、暗く翳って冷たい色に変わっている。

それを受け止めるハウエルズの赤い瞳も輝いて見えた。

「フン！」

出来るもんならやってみな！」

ハウエルズは静かに激怒しているアレックスをせせら笑った。

そして、自分の腕を折らんばかりの力でつかんでいるアレックスの手を、あいている方の手を使ってもぎ放すと、すぐ近くで立ちすくんでいたマリーの胸をがっちりつかんだ。

「え……？」

あつけにとられて身動き出来ないでいるマリーの身体を力強く引き寄せ、ハウエルズはそのまま窓へと飛んだ。

まさか、と思った時にはすでに窓の外だった。

冷たい風が全身に吹きつける。

「……待て！」

アレックスは窓の棧にとりついて必死に手を伸ばしたが、マリーがのびた手をつかむことは出来なかった。手はむなしく空をかき、そのまま、ふたりが落下していくのを齒がみして見送る。

「……くそっ！」

こんなことになるくらいなら、ちゃんとあの時退治しておくんだっ

人でも殺せそうな凄まじい顔で、悔しげにアレックスは言った。

それから小さくため息をつく、と、部屋の中を振り返り、呆然として、なりゆきについていけないような 크리스に問う。

「君は……このことを知っていたのですか？」

このこと、というのは恐らくハウエルズのことだろう。

クリスはもし知っていて黙っていたなら許さない、と言いたげなアレックスに言い知れぬ恐怖を感じつつ首を横に振った。

「いえ……僕も、今日……というかついさっき知ったばかりです」

「そうですか……」

「……あのう、ちょっと訊いてもいいですか？」

「何です？」

「教授とマリーってその……なんというか、えーと」

クリスが恐る恐る、言いにくそうに言葉を並べる。

彼の言いたいことは察しがつく。ここまで見られてしまった以上、変に隠しだてしない方がいい。そう思いつつも、アレックスは全く

余裕のない自分自身の行動を呪わずにはおれなかった。

「君が思っている通りです。」

ただ、このことは誰にも言わないで下さい」

アレックスが言くと、クリスはすぐにうなずいた。

と、同時に疑問が浮かんだ。

マリ―は自分に嘘をついたし、アレックスもまた黙っていて欲しいと言う。お互いに好き合っているのに、変な話だなとクリスは思った。

「でも、それならどうして婚約しないんですか？」

黙っていられずに問うと、アレックスは困ったような顔をした。

「いや……色々と込み入った事情があるんですよ」

「そうなんですか、まあ、事情については突っ込みませんが、早く厄介ごとがなくなるといいな。」

マリ―、辛そうだし……」

ぼやくようにクリスは言った。

アレックスは、ふと今まで疑問に思いながら聞けなかったことを口にした。

「いい機会だから訊いておきたいのですが、君とマリ―とはどんな関係なんですか？」

「え？ 何でまた急に……前にも言ったとおり……」

「君たちはいつも一緒にいるじゃないですか？」

ただの友人で済ませるには妙な気がするんですよ」

アレックスの言葉に、有無を言わせぬものを感じ、クリスは思わず苦笑した。

うわさと本音 6

「まあ、確かにただの友人とはちよつと違いますね」

「では一体……？」

「あんまり言いたくないんですけどね本当は。」

「マリー……というか、マリーの父親のヘイスティングス卿が恩人なんですよ」

クリスの言っている意味をつかみかねて、アレックスは眉根を寄せた。

「まあ、そういうことです。」

「というか、僕の事なんか気にしていいんですか教授……？」

あの悪魔とマリー、追いかけるんじゃない？……？」

言われて、アレックスは少し笑った。

先程までは神学科の誰かを捕まえてから、追いかけてやるつもりだった。

「もちろん、これから悪魔学研究と神学の研究が行われている場所へ行き、専門家に相談したうえで、確実に抜える方法を見出します。それに、あの状況でマリーは私に手を伸ばしてくれた。

だから、信じますよ……彼女のことを。」

悪魔などの甘言に屈するようなことはないでしょう。

そういうマリーだから、好きになったんです。

なにより、身体能力が違いすぎますからね、今から追いかけても、このパディントンの街を一周するだけで終わってしまいそうです。

こういうとき、人の肉体の限界が悔やまれますね……」

クリスは思わず笑いを噛み殺しつつ言った。

「……何だか、聞いている僕の方が恥ずかしくなってきました」

「いえ、私だって十分恥ずかしいですよ。」

でももう君には色々見られてしまっていますから今さら取り繕っても仕方ないじゃないですか？

それより、教えて下さい。

ヘイスティングス卿とはどういう関係なんですか？」

「分かりましたよ、お教えします。

でも絶対にマリーにも他の人にも秘密ですよ。

まあ、別に大した話じゃなくて、良くある話なんですけど」

「分かりました。決して言いません」

アレックスは請け合った。

「僕はそもそも労働者階級出身なんです、本来ならお金がなくてこんな学問の最先端に行くような場所にいられるはずがないでしょう？

でも、卿がお金を出して下さったおかげでここにいるんです……

代わりに、マリーの近くにいて、様子を見張って時々報告をするように言われています」

「ああ、なるほど」

アレックスは納得した。

「だが、それでは君は自分の好きな学問を選べなかったのではありませんか？」

「いえ、卿は元々マリーと同じ学問に興味がある優秀な子どもを探していたんです。

それで僕が選ばれた、という訳なので僕としてはただただ有り難いだけでした」

「いつも一緒にいるのにはそういう訳があつたのですね……。教えてくれてありがとうございました。

さて、これでお互いにお互いの秘密を握った訳ですね」

「そうなりますね」

クリスは少しいたずらっぽい笑みを浮かべた。

小さい頃、すぐには声をかけられなくて、遠目から眺めていた。

なんとかして友人になろうと、同じものに興味があるフリをした
りした。

声を掛けることが出来るまでは苦労もした。

けれど、そんな努力はすぐに必要なくなった。お互いに興味を抱

くものがほとんど同じだったし、同じ目線でも物を見られるのはお互いだけだったからだ。

興味の赴くままに色々なものを追及していくうちに、気が付いたら友になっていた。

本当を言えば、淡い恋心を抱いたこともある。

マリーはとても綺麗な少女だったし、あのハロルドの件の時も側にいたのだ。

なぐさめてやりたかったけれど、彼女はそれをばねにして研究を続けた。

クリスはついていくだけで精いっぱいになっていた。

気がつくと、恋心は尊敬の念に変化していた。

「では神学研究所の方から行くことにします。

もし忙しくないようなら一緒に来てくれませんか？ 人手は多い方がいいので」

「もちろん一緒に行きます！

あ、後でマリーの部屋にも行くでしょう？

その時もついていきますよ。

僕が一緒の方がうわさが変なふうに広がらなくて済むでしょうし、リサのことも教えてやらないと」

「ああ、そういえばそうでしたね」

「あれ、ご存じだったんですか？」

「知り合いにウエストン家のものがいましてね、その人から聞いたんですよ」

「へえ、そうだったんですか。

貴族同士って知り合いになる機会多そうですね」

「気楽な次男ですから、そんなに色々な催しに参加してきた訳ではないんですけどね」

「ああ、苦手そうですねそういうの」

クリスは苦笑した。

「その通り、苦手です。居心地が悪いんですね何だか」

そう言つとクリスは楽しそうに笑つて、それ以上はなにも言つてこなかった。

だが、ふいにアレックスは表情を曇らせた。

貴族という言葉に、イーデイスのことを思い出したのだ。

彼女は昔から思い込みが激しく、氣にいらぬ時にはひどく攻撃的になる娘で、どういふわけかアレックスを好いているらしく、よく話しかけてきたものだ。

その時は本当に対処に困つた。

ヤグディウムの大学院へ移つてからは会わずにすんでいたのだが、戻つてきてしまつた以上、どうにかしなくてはならない。

まさか大学院内まで押しかけてくるとは思わなかつた。

あの穏やかなビック・ウエストン……リサの婚約者である彼の妹とは到底思えない。

度が過ぎるようなら、ウエストン男爵、男爵夫人や、アレックスの父であるハースト子爵夫人などに相談し、自分以外に目を向けてもらうよう取り計らつてもらおう。

そういうことに関しては女性同士に任せてしまふのが一番だからだ。

そんなことを考えながら、アレックスはクリスとともに神学研究室へと向かいつつも、なんだか憂鬱な気分になつてきた。

（全く……面倒なことになりましたね）

しばらくはマリーやクリスとともに、ゆつくりと研究を続け、自分の心と向き合つて行くつもりだつた。だというのに、周囲はアレックスたちを放つておいてはくれないらしい。

本当にやりたいことは全て後回しになつてしまつてゐる。

どうしても、焦りと苛立ちがつつた。

ままならないものだ、と思いながら、アレックスはクリスに分からないよう、小さくため息をついた。

白魔女の記憶 1

気持ちの悪い浮遊感のあと、地面に下り立ったのを感じて、マリィは閉じていた目を開けた。

だが、ハウエルズはなかなかはなしてくれない。

もがいても、胴にまわされた腕はびくともしなかった。

「ちよつと、離してよ!」

「一緒に来て話を聞いてくれるって約束すれば離してやる」

「……どこへ行くつもりよ」

マリィは苛立ちながら言っ、周囲を見回し、安心した。

個人研究室の外は、ちよつとした林になっているため、人がいない。

この状況を誰かに見られることは避けられたのが幸いだっ。顔を上げて下りてきた窓を見る。

アレックスの姿は見えない。なんとなくチクリと胸が痛んだ。

宙に浮いた足を動かすと、ガサガサと音がする。足元には大量の

落ち葉が積もっていた。それでハウエルズは無事だったのだろうか？

「落ち着いて話が出来るとこさ。」

言っただろ？ 聞いて欲しいことがあるっ、て」

「話を聞くだけなら寮の私の部屋でいいじゃない」

「それは却下」

「どうしてよ」

「お前の知り合いが来たら困る。」

さっきのクリスって奴とか、あのいけすかない教授とかがさ」

「教授は来ないわよ、多分……。」

クリス……は、そういえばリサがなんとかって……あんたのせいで聞きそびれちゃったじゃないの」

マリィが口をとがらせて文句を言っ、ハウエルズは呆れたように肩をすくめた。

「俺じゃなくて、あの教授が来たせいだろ？」

まあ、明日聞けばいいんじゃないか？

どのみちお前、今すぐには戻りたくないだろう？」

全くもってその通りだったので、マリーは言い返せなかった。

代わりに、齒の間から唸るような声を出してから、ため息をついた。

「じゃあ行くわよ。」

でもいかがわしいところ以外でお願い」

「そうだなあ、じゃあ公園にでも行こうか？」

ハウエルズは、少し考えるそぶりを見せてから言った。

「公園、て、人がたくさんいるじゃない。」

落ち着いて話が出来るところがいんじゃないかなかったの？」

「だからだよ、人がいるのが当然のところ、知り合いじゃない男女が何か話していても誰も気にとめやしないだろう？」

確かにそうかもしれない、とマリーは思った。

それでもなんとなくうなずかないでいると、ハウエルズが顔を近づけてきた。

「異論がないなら行こうぜ」

「わ、分かったわよ」

マリーがそう言うのと、ハウエルズは体をはなしてくれた。

急にはなされたので、マリーが少しよろめくと、彼はとっさに腕をつかんで支えてくれる。

思わず心臓が大きく跳ねた。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

笑顔を返してくれたハウエルズに、マリーは複雑な気持ちになった。

彼は悪魔なのだ。

わかってはいても、ハウエルズの行動のひとつひとつが、マリーがアレックスに求めるものであることがたまらなかった。

目の前の悪魔がアレックスなら、と思ったものの、そもそも本来の彼ならばこういう行動はとらないだろう。それが、妙に苦しかった。

「……どうした？」

「な、何でもない！」

行きましよう。日が暮れる前には部屋に戻りたいし……」

「ああ」

歩き出したマリーに、どこか疑っているような返事をして、ハウエルズも歩きだした。

マリーはなんでそんなに勘がいいんだと罵りたくなったが、それは口に出さず、ただもくもくと歩き続けた。

白魔女の記憶 2

貴族や上流階級の人間たちが走らせる馬車が邪魔だな、と思いつきちゃんとよけて、マリーとハウエルズはベンチを探した。

時刻は昼過ぎで、日差しが芝を温めている。

外でもあまり寒くないのはありがたかった。

何しろマリーは上着を学院においてきてしまっているのだ。

しばらくふたりは視線をさまよわせて、座れる場所を見つけると、すぐにそこにおさまった。二人の間には、子どもが一人座れるくらいの距離があげられた。

「それで……私に聞いて欲しいことってなに？」

「ああ。」

アミールリア、という人間のことなんだ。俺がかつて、魂を狙ったことのある人間だ……彼女は、薬草を調合して、薬をつくって暮らしていた。

近くの町や村の人間たちからは、癒しの力を持つ魔女と呼ばれていた」

魔女……。

その言葉から、アミールリアというひとはずいぶん前に生きたひとなのだとわかった。

今では学問の世界も、人々への教育も進み、魔女と呼ばれたいにしろの知識をつないできた人々への偏見も、農村部でこそまだ残っているものの、かなりすくなくなっている。

だが、かつて世界に無知だった人々は、彼女たちを恐れた。

もちろん、なかには受け継いだ知識を悪いことに使う悪人もいたが、たいていはただそれ活かして人の役に立ちながら自分も生活しているだけのひとがほとんどだったのだ。

彼女たちは語らない。

ゆえに誤解も生み、迫害されることも多かった。

「その、アミールリアというひとを気にいらなかった誰かがあなたに魂を狙わせたの？」

恐れた人々が、とも考えられたが、ならば神父や牧師を呼ぶだろう。

わざわざ悪魔をよんで殺そうとするとは思えない。他の人々に知られずに害したい誰かの仕業としか考えられなかった。

「んーまあ、正確にはその地域を所有してた地主のおっさんだよ。愛人にしようとしたのを拒まれて、なら墮落させて殺してやるってことだね」

「うわー、最低ねそいつ」

マリーは心底嫌な顔をした。

今は多少改善されたとはいえ、かつては立場の弱い女性はかなりそういう被害にあっていたようだ。

「そこで呼び出された俺が行くと、アミールリアは怒って出て行け、消えろ、この害虫って言い放ったんだ。たいていの人間はこの瞳を見ると心を奪われるって言うのに」

「へえー、まあしかたないんじゃない。」

実際そんなようなものだし」

マリーは言いつつ、ハウエルズの赤い瞳を見てみたが、綺麗だと思いきすれ、特に何も感じない。

ハウエルズはそれに気付いて顔をしかめた。

「やめてくれ……悪魔としての自信をなくす」

「でも私以外には効くんでしょ？」

「じゃあいいじゃない」

「肝心の人間に効果がなきゃ意味ないだろうが。」

もういい、話を続けるぞ……とりあえず、彼女の魂はすぐ俺の好みだったから、なんとかして落としてやろうと毎日通ったんだ。

そのうち、彼女のもとに薬を買いに来る人間があらわれた」

一旦言葉を切り、ハウエルズは小さくため息をついた。

「それは小さいガキの母親でな……医者にも見放されたけど、何と

か助けたいからといって訪ねてきたんだ。アミーリアはその母親の話を聞いて、薬は作れると約束して母親を帰した。

だけど、その薬に必要な薬草はいま手元になくて、採りに行かなくてはならなかった」

ハウエルズは時々言い辛そうに言葉を切った。

とても辛そうで、マリーは思わず手に触れたい衝動にかられたが、実際には触れなかった。

触れられなかった。

「翌日、俺は呼びだした人間に呼び戻された。

いつまでたつてもアミーリアが墮落する様子がないんで、変に思われたんだろう。

そいつは俺の話を聞くと役立たずと言い、結局地主が自分で始末を付けに行くから用なしだと言われて契約を破棄された。

俺はそれを聞いて、腹が煮えくりかえる思いだった。

怒りのまま召喚主を殺して、アミーリアを追ったんだ」

ハウエルズは大きく息をついて、言った。

「けど、間に合わなかった。

彼女は猟銃で撃たれて、倒れていた。近くにいた地主とその連れや使用人すべてを俺は殺した。

それから、まだ少し息のあった彼女に懇願されて、家へと連れ帰った。

家へ着くと、死にかけてるって言うのに彼女は薬を作り始めたんだ。

俺は止めたけどアミーリアは聞かなかった……そして、薬が完成すると、召喚主に逆らったせいで魂と肉体に傷を負っていた俺に笑って言ったんだ。

自分の魂を食えって。

その代わり、あの母親に薬を届けてやって欲しいと、俺は断りたかったが断れなかった。

傷のせいで、存在自体がヤバかったからな……。

だから……彼女の言うとおりにしたんだ」

ハウエルズは一気に語ると、少し疲れたように息をついた。

マリーは色々と言いたいこともあったが、口をはさむのはなんだかはばかられて、黙っていた。

「母親は喜んだよ……俺も嬉しかった。

嬉しかったんだよ。

悪魔が喜ぶようなことじゃないってのにだ。

それからさ……アミールアとの一件以来、俺はまるで人のように感じるが増えたんだ。

どれが怒りだとか、悲しみだとか分かるまでずいぶんかった。

もちろん、まだ理解できていない感情もある……それが何なのか、マリーに聞こうと思ってさ」

「そう、その反応が人間にとってどういう意味を持つのか知りたいって訳ね。

いいわよ。

そういうことなら協力する。

あ、でも、どうしてそれを知りたいなんて思ったの？

それじゃあまるで、人間になりたいみたいじゃない……」

ようやくハウエルズの真意がわかって、何を求められていたかわかったマリーは、ふと浮かんだ疑問を口にした。

すると、ハウエルズは驚いたような顔をした。

白魔女の記憶 3

「……どうして知りたいか、なんて考えもしなかったぜ。

そうか、理由……この俺が人間になりたい……？」

自問をし、困惑したような顔でマリーを見るハウエルズ。

マリーはやや呆れてため息をつく、少し考えた。

「あのね、もしかしたらなんだけど、傷ついていたのは体だけじゃなくて、存在そのものだっとは考えられない？」

その状態でひとの魂をとりこんだことで、人間の魂と悪魔の魂が混ざり合ってしまった。

ということは考えられない……？」

マリーがそう言う、ハウエルズはすぐにはのみこめなかったのか、しばらく怪訝な顔をしていた。が、意味を理解すると、眉間にしわを寄せてちいさくうめいた。

「待て、もしそれが本当だったとしたら、これはアミーリアが感じていることって訳か？」

うわ、ありえそうなだけに否定できない」

マリーは思わず、くすつと笑ってしまった。

悩んでいる彼の姿が、なんだか可愛らしく見えたからだ。

「まあ、ただの推測というか、憶測だから本気にしないで。

それはそうと、教えて欲しい感情があったんでしょ？」

どんなふうだか教えて」

「あ……ああ。

うーん、どう説明したらいいかわかんないんだけど、ある人のそばにいるのがただ嬉しくてたまらないんだ。その人に近づく奴がいると、すごく嫌な気分になる。その人が苦しんでいると辛い。なんとか力になりたいくなる。

所有欲かとも思ったんだけど、ちょっと違う気がするんだよな」
「それって……」

マリーにはすぐに答えが分かった。

というより、彼がなぜわからないのかが不思議だった。

「わかるか？」

ハウエルズは首をかしげ、下からのぞきこむようにマリーの目をまっすぐに見てくる。

思わずマリーは目をそらした。

なんだろう？ もやもやする……あまりにもわかりやすいその答えを言いたくない。

不意に胸の中でうずまきだした黒い感情に、マリーは混乱した。

「ね、ねえ、その人って誰なの？」

だめじゃなければ教えて？」

知りたい。とても。「その人」が一体誰なのか。

そんな欲求に突き動かされて、思わず口走ってしまったが、マリーはすぐに後悔した。なんて醜いことを言ってしまったのだろう。

取り消さなければと思って、口を開きかけたとき、ハウエルズが言った。

「だめだから教えない」

マリーは殴られたような衝撃を感じた。けれど、それを顔に出すわけにはいかない。そんな自分を見せたくない。

「そ、そっか。そうだよね……変なこと聞いてごめん」

マリーは明るく笑った。

「えーと、多分ね、その気持ちは……」

必死に勇気をふるいおこして、小さく息を吸う。

「恋、だと思う。ようするに、その人のことがすごく好きで、特別だってことよ。」

ずっと一緒にいたくて、相手の時間も、心も、体も欲しくなっちゃうの」

なんとか言うことができて、マリーは少しほっとした。

ハウエルズは、しばらくの間何も言わなかった。

マリーも黙っていた。

自分の心がどこにあるのかわからなくなっていたからだ。

もしかしたら、マリーはハウエルズという悪魔の、人間的な部分に惹かれつつあるのだろうか？ それとも、アレックスがああいう態度だから、マリーの心が逃げ場を求めて、ハウエルズに甘えてしまったのだろうか？

いままで本当の意味で恋したことのないマリーには、ただの気のせい、で片づけることくらいしか思い浮かばなかった。

「……ねえ、暗くなってきたし寒いし、そろそろ寮に帰ってもいい？」

「あ、ああ。そうか、そうだな……じゃあ送っていくよ」

「うん……あ。そういえばあなたっていつもどこにいるの？」

ベンチから立ち上がりかけ、マリーは今まで訊こうと思っていた訊きそびれていたことを口にした。

「どこ……って、まあ色々だけど。」

なにしろ暑さも寒さも痛みも特に感じないからどこにいてもたいして変わらないし。

昨日は酒場において変な奴らにからまれたんでつまみだしてやって、その主人に用心棒やってくれて懇願されて、暴れた奴を片っ端からのしてた。

店が閉まったあとは大学院のあいてる部屋で寝てたよ」

「ちよつと……危ないことはやめてよ」

マリーは眉間にしわを寄せてため息をついた。

「なんでだ？ 俺がどこでなにしようとか俺の勝手だろ」

「確かに、あなたはどこでなにしようとか勝手にすればいいわよ。だけど、この身体は私の最高傑作なんだから、傷つけられたり壊されたりしたら悲しいじゃないの！

自由に行動したいならこの身体から出てからしてよ」

怒りながらマリーが言うと、ハウエルズはにやりと笑った。

「そのお願いいきいたらマリーの魂俺にくれる？」

マリーは呆れて言葉も出なかった。

額に青筋、口もとにはなまぬるい笑みを浮かべ、ベンチから立ち上がると、そのまま歩き出す。

「あ、待ってくれよ！ 冗談だって」

ハウエルズは慌てて言うと、マリーを追いかけてきた。

マリーは立ち止まることもなく、そのまま歩き続けた。

今の時間帯、たいていの上流、中流の家はディナーのはずだ。そのため、馬車も人影もまったく見当たらないので、来たときより楽に歩けた。

風もどんどん冷たくなってきており、マリーは早く寮の部屋に戻りたかった。

が、後ろから肩をつかまれ、仕方なく立ち止まって振り返る。

「まだなにか用なの？」

悪いけど、今日はもう……」

言葉は最後まで続かなかった。

ハウエルズが後ろから強い力で抱きしめてきたのだ。

突然のことに、マリーは驚いて固まった。

しかも、なぜか振りほどきたいとは思わなかった。むしろ、彼の血の通っていない体の冷たさが悲しく感じられ、温めてあげられたらとすら思ったのだ。

「さっきの話にでてきたある人のことだけど……」

耳もとでささやかれ、マリーはちいさく震えた。

「お前のことだって言ったらどうする？」

「……なによ、それ」

ハウエルズの告白に、マリーは泣きたいような、笑いたいような気持ちで言った。

「もう、からかうのはやめて……」

「からかってなんかない……本心だ」

そう答えたハウエルズの声に、冗談や笑いめいたものは混じっていないかった。

マリーは激しく打ちだした自分の心臓の音に戸惑った。

「で、でも私は……！」

「わかってる。けど……そばにいるくらいならいいだろ？」
だめだ、とは言えなかった。

（ずるいな……私。最低……）

マリーは自分に対して心底そう思った。

アレックスが好きだと言った舌の根もかわかないうちに、ずっと否定してきたハウエルズに対してときめいてしまうなんて。

それでも、よりどこを必要としていたマリーの心は、悪魔の言葉を受け入れた。

「……帰りましょう。寒いわ」

「それ、そばにいてもいいってこと？」

「好きに考えていいわよ。」

ほら、帰るんだから離して」

そう言つと、ハウエルズはすぐに離してくれたが、かわりに手を握られた。

マリーは驚いて、振り返った。放してと言おうとして、ハウエルズの顔を見ると、何も言えなくなってしまう。

あまりに無邪気に、嬉しそうに笑っていたからだ。

マリーは慌てて彼から視線をはずした。

（なんだろう？

すごく頬が熱い……）

そのまま手をつないで歩きだす。

歩きながら、マリーはふつとほほ笑んだ。

こんな何気ないことが、ひどく嬉しくて楽しくて仕方なかった。

結局のところ、自分をなぐさめるためにつくったはずの『理想の恋人』が、本当の恋人になってしまふのかもしれない。

ちよつと皮肉げにそう思いながら、マリーは悪魔と手をつないで、のんびり帰路をたどった。

舞踏会への誘い 1

もうかなり暗くなってきたと言うのに、マリーはなかなか帰ってこない。

毛皮が裏打ちされた外套の前をかきあわせ、アレックスは憂鬱な気分になった。隣ではクリスが足踏みしながら、少しでも寒さをやわらげようと奮闘していた。

アレックスは苛立っていた。

こんなことになるうとは、予想もしていなかったのに。

自分はいったいなにをしているのだろう。それでも、この行動が間違っているとは思えないのが妙に腹立たしい。

かつて見た、悲しくつらい光景。

あんなものはもう二度と見たくないし、自分が同じ思いをするのも嫌だ。だからこそ、そうした事態を招くようなことはしまいと心に誓ってきたというのに。

完璧に閉ざしたと思っていた、封じこんだと思っていた感情を、マリーはいとも簡単にこじあけてしまったのだ。

最初はその真っ直ぐなところに興味をおぼえた。それから、研究にたいするひたむきさや、笑ったときの華やいだ顔などを見ていくうちに、引き返せないところまで来てしまっていた。

マリーも自分のことを男性として見てくれているとわかった時は嬉しかった。好きだと言われたときに感じた幸福感は、たとえばようがないくらいだった。

だからこそ、彼女の誤解を解かなければならない。アレックスはマリーを失いたくなかった。

正直、彼女が怒るのもわかる。アレックスは、自分の心を守るために、彼女にずいぶんひどいことを言い続けてきた。彼女に甘えていたのだろう。

（マリーに謝って……イーデイスのこともきちんとけじめをつけよ

う。

そのために、なんとか説得しなくては……)

アレックスはさらに深みを増してきた夜のとりと、そこに無数に浮かぶ星のまたたきをぼんやりと見つめながらとりとめもなくそんなことを考えていた。

「……マリー、遅いですね。食事してくるつもりかな」

クリスが鼻をすすりながら言った。

「そうかもしれませんね。」

でも、私はここで待ちます……クローネ君は、食事してきても構いませんよ?」

「……いえ、います。」

こうなったらマリーに食いものたかるんで、それにこんなに暗いんじゃない、ますます僕がいたほうがましじゃないですか」

「それは……そうですね」

アレックスは苦笑した。

クリスの言うとおりだと思ったのだ。

アレックスはともかく、これ以上あのうわさに油を注ぐようなまねをすれば、マリーの名誉は地に落ちるだろう。それを黙って見ていることは出来そうにない。

もしそうなったとしたら、最後の手段に出るつもりはあった。

アレックスが心のなかでこっさり決意を固めていると、小さな靴音が聞こえた。クリスにも聞こえたらしく、ふたりして音のした方を見ると、マリーがいた。腕に紙袋をふたつ持ち、驚いたのか目を丸くしている。

「あー!」

やっと帰ってきた!」

クリスが呆れたような声を出し、マリーに歩み寄ると、袋のなかをのぞきこむ。

「お、生ハム買って来たんだ。食べていい?」
ていうか、待たせたんだからいいよね?

待ってるあいだにお腹すいちゃってさ」

「待ってた……ってなんで？」

「なにかあったの？」

マリーは不安げな様子でクリスの顔を見て、それからアレックスを見た。

「まあちよつとね……それより中で話そうよ。寒くて寒くて」

クリスは大きく息を吐き出しながら言った。

白いもやが一瞬ひろがってすぐに消える。

学院の研究員と一部の助教授たちが寝起きする寮は、昔に学生寮として建てられたものを改装しただけであり、石造りでかなりの大きさがあるため、外にいと強い風に吹きさらされる。

その強さは、へたをすると荷物すら吹き飛ぶことがあるくらいだ。「かまわないけど……火は入ってないから中也寒いわよ。」

でも、クリスも教授も鍵持ってるんだから、中で待ってれば良かったのに」

マリーは不思議そうに言いつつ、合鍵で外の扉を開けて、ふたりをなかに入れた。

「まあ、ちよつと事情があつてさ」

クリスはあいまいに笑った。

「ふうん、そうなの」

マリーは良くわからないと言いたげにそうつぶやくと、うす暗い玄関広間を抜けて自室へ向かった。

冷たい風にさらされないぶん、建物のなかのほうがましだった。

それから少し階段をのぼり、マリーは自室にふたりを招き入れた。あいかわらず殺風景な部屋の中をみまわし、アレックスは以前自分が持ってきた食料品の残りを見つけた。食べてくれたのだ、と思うとなんとなく安心できた。

舞踏会への誘い 2

マリーは買ってきた食料品をテーブルの上に置くと、小さな暖炉に火を入れた。

どのみち、すぐには暖まらない。

それでも、橙色の光が見えると、いくばくかはましに感じられた。「それで……どうしてわざわざ入口のところで待ってたの？」

教授まで一緒に」

マリーが困惑したように言った。

アレックスは、彼女が自分のほうをあまり見ないようにしていることに気がついた。

「しょうがないだろ？」

例のうわさをもつとあおるようなことは出来ないし、話をしようとすれば君はいきなりさらわれちゃうし……というか、大丈夫だったの？

あの悪魔になにかされてない？」

「平気よ？」

彼、話があっただけだったの……そんなことより、話をそらさないで」

「そらしたわけじゃないよ……心配しただけじゃないか。

話っているのは、リサのことだよ」

言いながらクリスはテーブルの上の食料品をあさり、棚からナイフを勝手に取って、ハムやチーズなどを勝手に切り取って食べはじめてしまった。

マリーは何も言わないが、アレックスはいいんだろつか、と思った。

「そういえば言ってたわね。リサになにかあったの？」

でも、確かに今日だけじゃなくて、ここ二、三日姿を見てないわ」「うん、リサが……っていうか、ビックの方が困ったことになって

て。

まあその辺のことは僕も教授に教えてもらったんだけどさ」

食べものを咀嚼して飲みこんでからクリスは言い、ちらっ、とアレックスを見た。

入口近くで、大きな体をちぢめて立っていたアレックスは、マリィを見ると、軽く咳ばらいした。

「今日、私のところに来客があったでしょう？」

彼女は、ビツク・ウエストンの妹でしてね、そのことを伝えに来たんです。

この寒さのせいか、ビツクは強い流感にかかってしまったとかで……。

ほら、彼はもともと肺が良くないでしょう？」

体力が持たなければ命が危険ということだ」

「……じゃあ、リサは」

「彼についていようとしたらしいのですが、うつってはいけなからと追い返され、顔も見せてもらえなかったそうです」

その時のリサの心痛を思うと、アレックスは気が重くなった。

「と、いう訳でさ、明日一緒にリサのところに行かないかと思って学院はちよつと休ませてもらってさ……まあ、僕らがいたところでたいしたことは出来ないけど、誰か側にいれば、リサも少しは気分が違うだろ？」

クリスは肩をすくめつつ言った。

リサは今、おばの、気難しい準男爵未亡人とともに、パディントンの町屋敷で暮らしている。それ以外のリサの家族は領地で暮らしていた。

「そうね、わかったわ。

じゃあ明日行きましょう」

「よし、決まりだね。

それを聞きに来たんだ……ねえ、もう少しもらっていい？」

言いながら食べものを指差したクリスに、マリーは苦笑しつつ「

いいわよ」と返した。

「……私も一緒にさせてもらいます」

アレックスは、少し遠慮気味に言った。

すると、マリーだけでなく、クリスも目を丸くした。

「ビツクは私にとっても大切な友人なんです」

言い訳じみた言い方をしてしまったな、と思いつつ、アレックスはふたりを見た。

「寄宿学校時代、同じ寮だったんですよ彼とは。

色々面倒を見てもらいましたし、その逆に見たりもしました。

子どもの時はお互いの領地にもよく遊びに行っていましたしね。

ただ、私が研究者になってからは会っていないんです。

それに、もしかしたら私も一緒に行けば、リサさんも彼の顔をひと目見るくらいは出来るのではないかと……あ、いえ、ご迷惑なれば私はひとりでいきますが」

「そんなことはありません！」

もしそう出来たら、リサがどんなに喜ぶか」

マリーは勢い込んで言つて、嬉しそうにアレックスを見た。

その表情を見たアレックスは、言つてよかった、と思った。

「それなら良いのですが……では、明日の朝、この寮の前で集まる、ということが良いでしょうか？」

訊ねると、マリーとクリスは「はい」と返した。

「では……私はこれで失礼します」

アレックスはそう言つと、ふたりの返事を待たずに部屋を出た。

少しずつ、少しずつでいい。マリーを傷つけたせいで出来た溝を埋めるには、きっと時間が味方をしてくれるはずだ。

寮を出て自分の部屋のある通りへ向かいながら、アレックスは考えた。

今、一番厄介なのは悪魔の入り込んだ自分そっくりのあの体だ。

そもそも、アレックスはああした存在を前にしたのは初めてなのである。

錬金術、というある意味では正道ならぬ学問を研究する立場としてみれば、それは興味深い対象なのだが、個人的には邪魔で仕方ない。

それに、なにしろ存在の定義があいまいすぎる。例えばエクソシストなどに依頼したとしても、本当に追い出せるのかどうか分からない。

何しろ、とりついている体自体に魂が存在していない。それはつまり、侵入してくる存在に抵抗できる精神がない、ということでもある。

なにはともあれ、あの体から追い出せさえすれば良いのだ。

「……罨はすでに仕掛けたことですし、後はどれに引っかかるか、しばらく見物させていたたくとしましょう」

アレックスはひとり、暗い笑みを浮かべて通りへ出た。

大学院はパディントン市の最も東にあり、近くに市街地もないためとても静かだ。だから、こうして通りまで来ると空気がまったく変わってしまう。

人通りも増え、あらゆる階級の人々が入り混じる独特の喧騒に包まれる。

このなかに、あの悪魔もひそみ、とけこんで、人々の魂を狙っているのだろう。

だが、マリーの魂を欲して大学院まで来た時が、奴の運の尽きだ……。

無表情を装いながら、アレックスは心のなかで笑った。

舞踏会への誘い 3

マリーはひどくやりきれない思いでお茶のカップを口に運んだ。
「なんていうか、どうしようもないことって結構あるのね」

「本当だよ……僕もう帰ろうかな。」

なんだか疲れた。徹夜したのと同じくらい疲れた」

クリスがうめくように言った。

彼はマリーのななめ前のソファにぐったりと寝そべっている。

時間はまだ正午の前だったが、マリーとクリスとアレックスは、大学院の研究所がある棟の一階部分のラウンジで意気消沈していた。昨日の約束通り、三人は朝、寮の前で集まり、リサの家へと行ったのだが、彼女はふさいで寝込んでおり、とても会える状態ではないと執事に告げられたのだ。

しかたなく、せめてビツクの様子だけでもウエストン家の屋敷もたずねたのだが、やはりウエストン夫人もうつつてはいけなから、と会わせてくれなかった。イーディスは何かの集まりに出ているとかでいなかった。

どうしようもなくなった三人は、結局大学院に戻ってきたのである。

「申し訳ありません……何のお役にも立てなくて」

アレックスはうなだれて言った。

「いえ、教授が謝ることじゃないですよ。」

こういふこともあります」

マリーは慌ててそう言った。

こんなアレックスも初めて見る。いつも穏やかで、心の乱れなどとは無縁に思える彼だが、こんなふうに落ち込むのだ……。

マリーはとにかく昨日のことを謝りたかった。けれど、それはそれで自分勝手な気がして、自然と口が重くなる。

もっと、気がまぎれるようなことでも言って、この場の空気をや

わらげたいのに。

「でも、少し困りましたね……」

「どうかしたんですか？」

クリスマスが少し興味がわいた様子で聞いた。

「いえね、もうじきクリスマスでしょう？」

ふつつ私たちは領地にある屋敷に帰って、家族と一緒に過ごすものなのですが、中にはここにとどまる方々もいるんです……そこで、タンプリエ伯爵未亡人が、ささやかなクリスマス・ダンスパーティを催すということで、私も招待を受けているのです。

私も教授になったことですし、みなさまに顔を覚えていただく良い機会かと思い、参加するつもりだったのですが……。

一緒に行ってもらうはずのビックとリサさんがこれでは……」

「ひとりで参加しちゃだめなんですか？」

「いえ、かまわないはずですよ。同伴者をとまなつて、とは書いてありませんでしたし……ですが、私はどうも口下手で、社交界も久しぶりですし、そうだ！

こんな時に頼むのも気が咎めるのですが、マリー、一緒に来て下さいませんか？」

マリーはそれを聞いてお茶を吹き出しかけた。

「……わ、私ですか？」

「はい、予定があれば仕方ありませんが」

マリーはどう答えを返したら良いのか迷った。

もちろん、予定など何もない。

全くと言っていいほどだ。

家族にはクリスマスくらいは帰ってきて顔を見せて欲しい、と言われている。

けれど、帰れば地元の人々や、独り者の貴族などや親戚が招かれていたりすることもあり、嫌でも顔をあわせることになるだろう。そういった人々のなかには、すでにホコリをかぶっているような過去の話をわざわざほじくりかえすのを好むひともいるのだ。

そんな場所に帰るくらいなら、ひとりで静かに過ごしたかった。

「……予定は、まったくありません……でも」

マリーは言葉をにごした。困惑してしまったのだ。

なにしろ、アレックスの真意がわからないのである。

「なにか他に不都合が？」

「……その、着て行くものがまずありませんし、お金もないですし……」

「そんなことなら大丈夫ですよ。」

私が面倒なことを頼むのですから、必要なものがあれば言って下さい。

そうだ、これから仕立屋へ行つてドレスを注文し、他にも足りないものがあれば買つてきましょう。

どうせ今日は休むことになっているのですから」

満面の笑顔をうかべ、アレックスは言った。マリーはさすがに何も言えなくなつてしまった。ここまで言われてしまつては、断るにも断れない。

それに、とマリーは思った。彼に謝る良い機会になるかもしれない。

何より、アレックスと一緒にクリスマスを過ごせるなど、夢のようだ。

それが嬉しくないはずはなかった。

「わかりました。私でよければ一緒にさせていただきます」

マリーがためらいがちに言うと、アレックスは嬉しそうにうなずいた。

「良かったです。ありがとうございます」

「いいえ、お役にたてれば嬉しいんですが、何しろ、もう二度と社交界には顔を出さないと決めてしまつていたので、作法とか、色々忘れてしまつてなければいいんですけど」

マリーは、嬉しそうなアレックスを見て、少し申し訳なさそうに言った。

冗談抜きで、彼に恥をかかせてしまったらと考えると怖い。

「はは、それは私にも言えることです。少しくらい不作法者がいても、クリスマスなんですからきつと許して下さいますよ。」

そうだ、クローネ君はこのあとどうしますか？」

「んー、僕はお邪魔だと思っんで、部屋に戻って掃除でもしてます」
クリスはふたりの様子に苦笑しながら答え、ソファから立ち上がった。

それから、マリーの方を見てにやり、と笑う。

「うまくやれよ、マリー。じゃ、教授、また明日」

クリスはものすごく楽しそうな顔でふたりを交互に見やると、そそくさと立ち去った。

彼の言いたいことはわかったが、マリーはいたたまれず、怒鳴ろうと思ったら、クリスはもういなくなってしまうていた。

ものすごい早さだ。その早さをもっと違うところに活かせばいいのに、と思うが、それを言うべき相手はもういないので、軽く唇をかむことくらいしか出来ない。

恥ずかしい。とにかくものすごく恥ずかしい。

「では行きましょうか？」

なにこともなかったようにアレックスは言い、立ちあがり、手を差し伸べてくれた。その顔に浮かんでいる笑みが優しいものだったので、マリーは少し安堵しながら手をとる。

けれど、一応言っておかなければならないことがあった。

「……あの、私たち婚約者でもなんでもないのに、ふたりだけで出かけたりにいいんですか？」

さきほどからずっと気になっていたのだ。

こんなところを見られてしまつて、彼は困らないのだろうか？

だが、アレックスは軽く笑った。

「なに、そんなに気にするほどのことでもないでしょう。」

もし悪いうわさがたてられてしまった場合は、ちゃんと責任をとりますから安心して下さい」

彼はほがらかにそう言って、マリーの手を自分の腕にからめせると、歩きだす。

マリーは想像もしていなかった展開に、思考がついていけない。責任をとる？

それはつまり、いざとなったら結婚をするという意味にとっても良いのだろうか？

こんなふうにはエスコートされる日がこようとは、夢にも思っていなかったというのに。いったいアレックスに何が起こったのだろうか？

「あ、あの……教授！」

「……ふたりだけの時は、名前で呼んでもらえませんか？」

恐ろしく優しい声で言われ、マリーはますます混乱する。

「で、でもまだここ院内ですよ！」

何だか、アレックスがアレックスではないようだ。ひとが変わってしまっただけに感じる。

もしかしてこれは夢だろうか？

それとも、ハウエルズがいたずらでもしているのだろうか？

昨日までの彼と、あきらかに何かが違っている。マリーは「いったい何があったの？」と問い詰めたい気持ちでいっぱいになった。

何かあったんですか？

と聞きたい気持ちで、マリーの心の中はいっぱいになった。

「……かわらないですよ。もう、ね」

アレックスは晴れやかに笑って言った。

マリーは、のどに何かがつかえたような感じがして、声を出せなかった。

そのまま、アレックスに連れられて、ラウンジを出ると、院内を歩く。

今日のマリーは、いつもの研究員としての服装ではなく、地味なドレス姿だ。昔買ったオーソドックスな訪問着で、デザインは流行遅れになっているものの、生地が美しく、マリーに良く似合っていた。

一方のアレックスも、オーバーコートを着て、ハットをかぶり、手にはステッキという一般的な服装だったため、学内をふたりで歩いていても、奇妙に思われることもないはずだ。

大学院は日によつては一般にも立ち入りが許可されており、今日はちょうどその日にあたるのも幸いだった。

だが、そんなことよりも、マリーは今の状況が信じられず、心臓は早鐘をうち、頬が熱くてしかたなかった。

誰に声を掛けられることもなく、学院の外に出たふたりは、しばらく通りを歩いたのちに、乗合馬車を見つけ、街の中心へと向かったのだった。

舞踏会への誘い 4

大量の荷物とともにとともに部屋に戻ったマリーは、色々な意味で疲れ切っていた。

「楽しかったけど、大変だったな……」

つぶやいて、荷物を見つめる。

ここに持ってきたものはごく一部で、大半はアレックスにあずけてあったり、まだ仕立てあがっていなかったりする。それを思うと、なんだか頭がくらくらしてきた。

もう二度と、華やかだけれども、自由も尊厳もまったくないあの場所には寄りつくまい、と決めていたのに、結局アレックスの笑顔に負け、かなり色々と買いこんでしまった。

マリーは、催しなどに必要なもののほとんどは手放してしまっており、一応残したのも、父の領地にある実家に置いてきてしまっていたので、いざ舞踏会に出席するとなると、さまざまなものが必要だったのだ。

ボンネットに、傘、扇子、手袋、靴……無味乾燥だった部屋のなかに、突然あふれたあざやかな色彩に、なんだか目がくらむ。

特にドレスやガウンを選ぶときが大変だった。

何しろ、ここしばらく流行のことなど考えたこともなかったし、そもそも色やデザインで服を選ぶこと自体久しぶりだったので、すべて仕立て屋のマダムに聞かなければならなかったのだ。

その際に、あなたはこんなに素敵なものにもつたいない、とか、こんなに美しいものを隠すなんて犯罪よ、などと、非常に恥ずかしいことを言われ、いたたまれなくてどうしようもなかった。

しかも、アレックスまでもが、その通りですよ、本当に綺麗ですよ、よく似合っています、などなどと世辞を並べるので、マリーはますます恥ずかしくて困ったのだった。

「今まで、私のほうがアレックスを振りまわしていると思っていた

けど、違う、違うわ。

絶対にそうよ。

私のほうが彼に振りまわされてる」

ふいに、名前で呼ぶことが普通になっているのに気づいて、マリ―は赤面する。

こんな簡単になじんでしまうとは、思ってもみなかった。

マリ―は小さくうめいて、荷のひとつに手をのばす。

それはとても小さな包みだ。けれど、中味はとても高価なもの。

そつと紙を開いて、中から出てきた箱を開けると、大粒のサファイアがきらきらと輝いた。

マリ―は、身を飾るアクセサリーもひとつしか持っていない。

それも実家に置いてきたのだ。わがママを言って大学院に入っただの。せめて、金銭面での迷惑はかけたくないという覚悟で、高価なものはすべて置いてきた。

だから、今マリ―が持っているのは、真珠のネックレスひとつのみ。

祖母が贈ってくれた大切なものだから、これだけは手放したくなかったのだ。

そのことを告げたら、アレックスはさっそくマリ―を宝石商のもとへ連れて行き、目の前で輝くネックレスとイヤリングを買ってくれたのだ。

マリ―は買うことに反対したのだが、押し切られてしまった。

「さすがに、あとで返さないかね」

そう言ったものの、返したら彼が傷つくだろうという気もしていた。

だから、あずかっけていてもらう、と言って返そう。それなら、また何かの機会にこれを借りてつけられるだろうし、アレックスも受け取ってくれるはずだ。

「どうして、こんなことになっちゃったのかな。」

すごく楽しそうだったし……少し前に告白してきたひとと同一人

物だなんて……とてもじゃないけど思えない」

少し前まで、結婚はできない。だから婚約はできないがそれでもいいか、と言っていたのに。これでは完全に婚約者扱いだ。

嬉しいといえば嬉しいのだが、納得がいかないのも事実だった。

「とにかく、これは明日研究室に行くときに持っていて、あずかってもらおうの。私が持つてるのって、なんだか怖いし」

言って、箱を閉じると、大きく息をつく。

澄んだ冷たい空気が肺に入りこみ、心と頭を冷やしてくれる。

「ハウエルズ……どうしてるかな？」

話をして、手をつないで帰った夜から、彼は姿をあらわさない。なぜ知っていたのかわからないが、彼はマリーが妙なうわさに困惑していることを承知していた。だから、一緒に寮までくることを拒んだのだ。

あの日の夜、マリーはハウエルズとともに、市場を見てまわった。雑多な階級のひとびとが、さまざまなもの売り買いしている場所。あのような熱気と喧騒のなかを歩いたのは初めてだった。珍しい食べものを買ひ、ひとびとの暮らしをまのあたりにしたことはマリーに新鮮な驚きを与えた。

そのときに買った品物を置いた棚に目を向ける。

殺風景そのものだったこの部屋に、少しずつものが増えていく。ぼんやりとそれらをながめていると、ふいに胸が痛んだ。心を決められない弱い自分が嫌でたまらなかった。

けれど、必要とされることの喜びは、たとえようのないほど魅力的だった。今だけ、今だけだ。こんなことはこの先、もう二度とないだろう。クリスマスなのだ。少しだけ夢を見よう。ほんの、少しだけ……。

マリーは小さく気合をいれ、買ってきたものを整理しはじめた。

舞踏会の夜 1

クリスマス当日は家族だけで過ごすものであるため、舞踏会はその翌々日に開かれた。

マリーには、着付けを手伝ってくれるメイドなどの使用人がいないので、当日はアレックスの住んでいる屋敷に招かれた。

久しぶりに淡いブルーのドレスに着替えて、つややかな赤褐色の髪を、流行のかたちに結い上げてもらいながら、鏡にうつる自分の顔が、こころなしに青ざめていることに気づいた。

やはり怖い。今からでも、行くのをやめようか。

けれど、ここまでお膳立てしてくれたアレックスを裏切ることはできそうになかった。

それでも、マリーはかすかに震えた。

首都からは離れたパディントン市だが、上流階級の集まりともなれば、知りあいには会わないとも限らないというのに。舞いあがって失念していた自分を、マリーは心のなかでののしった。

それでも準備を終えてエントランスホールに出て行くと、すでに準備のとのつていたアレックスが驚いたようにマリーを見た。注がれた視線にこもった感情は、否定的なものではなかったので、マリーはすこし安心して、転ばないようにゆっくりと階段を下りていく。

すると、アレックスが慌てて階段を上ってきて、手を貸してくれた。

「すみません、こういう格好は久しぶりにするので……」

「いいえ、それより、すごく綺麗ですよ。……そのネックレスも、とても似合っています」

「あ、ありがとうございます」

首もとを見るアレックスの視線が、どこか熱を帯びているような気がして、マリーは頬が熱くなるのを感じた。思わず、ぎゅっと唇

を噛む。落ちつかなくては。舞踏会が終わるまででいいのだ。それまでは、平静さを失いたくない。いくら心がおどつていても、それを顔にだすのは、はしたないこと。それが上流階級。たとえば、今回のようにささやかな集まりであつたとしても。

マリーはそのままアレックスにエスコートされ、用意されていた馬車に乗り込んだ。

タンプリエ・ハウスはさほど遠くないので、会場へはほどなく到着した。

ひとびとのさざめきを耳にし、マリーの緊張は嫌でも高まる。

馬車を降り、建物の中に入ると、想像していたよりも、多くのひとが集まっていた。

身なりなどからして、この周辺で暮らす地主階級や、将校たちもまざっているようだ。顔も知らなければ、名前も聞いたことのないひとびと。

マリーは少しだけ安堵した。

アレックスにうながされるまま、舞踏室に足を踏みいれ、主催者にあいさつする。

緊張のせいで、立っていられるか心配だったが、アレックスのためなのだから耐えなければ、と言い聞かせた。幸い、未亡人はマリーのことを知らず、ただ興味ぶかな目を、扇子越しに向けてきただけだった。

それから会場に招待されているほかの主要な客たちへのあいさつまわり。それが終わると、マリーは心底ほつとした。

アレックスはマリーを気づかうように言った。

「疲れてしまいましたか？ なにか飲みましょう。私が飲みものを持つてくるあいだ、ここの椅子にかけて待っていてください。もう少ししたらダンスもはじまりますし、せめて私と踊ってもらう体力は、残しておいて頂かないと」

そう言つてほほえむと、アレックスはどこかへ行つてしまった。嬉しいのだが、色々と恥ずかしくもある。なにを言えばいいのか

混乱した頭で口をひらいたときには、彼の姿はもうなく、マリーはため息をついた。

「ああ、もう……アレックスってあんなひとだった？」

小さくぼやいて、マリーは壁際にならべられた椅子のひとつにかけた。

なんだか落ちつく。

ここは基本的に「壁の花」と呼ばれる女性たちの雑談場所だ。そのため、ここを注意して見るものは少ない。なにはともあれ、最も大事なことは終わった。少し緊張もゆるみ、マリーはようやく落ちついて会場を眺めることができた。

さほど大きくはないフロアでは、いつダンス音楽がはじまるのか、と楽隊の方ばかり見ている若者たちや、雑談に興じているふくよかなレディたち、用意された食事にワインを楽しんでいる紳士たちが思い思いに過ごしている。

久しぶりに感じる空気だ。

マリーは顔をあげて、シャンデリアを見た。そのかがやきを見ると、懐かしさと痛みが同時にこみあげてくる。次いで、近くに置かれた、南国より取り寄せたと思われる色鮮やかな花々を見る。それらの花々は、どこか官能的で、かぐわしい香りをはなち、女性たちの香水の香りといりまじって、複雑な香気が会場を満たしていた。すべてがきらびやかな夢の世界のようだ。

それを眺めながら、ぼんやりしていると、ふいに声をかけられた。「あれ、マリーじゃないか」

夢の世界から、一気に冷たい現実にはきずりもどされた、そんな気がした。

呆然とするマリーの目の前に、かつての婚約者、ハロルドが笑みを浮かべて立っていた。

舞踏会の夜 2

彼に腕をからめてほほえんでいる女性がちいさく会釈してきた。

マリーも人形のように会釈をかえす。

「久しぶりだね。ここしばらくずっと姿を見ていないから、どうしているんだろうと気になっていたんだけど、元気そうで良かったよ。ああ、知っているとは思うけど、そういえば会ったのは初めてだったね、妻のサマンサだ」

紹介されるまでもない。もちろん知っている。本当のところ、会ったのが初めてというわけでもない。あいさつだけなら、したことがあるからだ。

サマンサは、きれいな金色の髪をかわいらしいシニヨンにし、淡いブルーの瞳をした、細身の女性だ。社交界では、もっとも称賛される容姿。さらに、彼女にはかなりの資産もあったから、持参金はかなりなものになっただろう。あの時、ハロルドには賭けでつくった借金もあったが、それですべて返済できたはずだ。

彼はあいもかわらず、身だしなみにはひとの倍は気をつかっているらしく、ブーツはぴかぴかで、服装も流行の先端をいくものばかり身につけている。

「はじめまして」

マリーは、早く立ち去って欲しいと願いながら、礼儀を守ってあいさつをした。

「はじめまして。お話に聞いていたとおり、とてもきれいな方ね」

「そんなことはありません。奥様の方がずっとおきれいですよ」

むりやりに笑顔をつくって言う。

ああ、苦痛だ。マリーは、やはりこんなところへ顔を出すべきではなかった、と強く後悔した。

「いやいや、そんなことないよ。昔より、今のほうがきれいになったくらいだ。」

マリー、せっかく再会できたんだ。僕たちに、ちよつとしたつぐないをさせてくれないか？

あの時のことは、本当に申し訳なかったと思っているんだ。僕が、このサマンサを愛してしまったばかりに。でも、君なら僕などよりもっと良い紳士と結婚することが出来るはずだよ？

こんなにきれいな女性を放っておくはずがないさ」

よくしゃべる、とマリーは思った。そういえば、以前からそうだった。

彼はひとりで言いたいことをまくしたてて、マリーは黙ってそれを聞くだけだ。話し相手、というより、ただあいづちを打つだけの相手。彼が欲しかったのは、そんな役割をこなしてくれるかわいらしい人形みたいな女性だったのだから。サマンサはうってつけだったらしい。一度、反論を口にしてみたら、遠まわしに非難されたものだ。女性がそんなことを言うなどおこがましい、といった意味合いの……。

「そうですわね。マリーさん、わたくしに任せてくださいな。次のシーズンにはたくさんのお若い紳士方を紹介いたしますわ。わたくしは彼を選んでしまったけれど、以前親しくしていただいた方とは、今は友人なんですのよ」

「ああ、それがいいね。サマンサはとても顔が広いんだ。彼女に任せておけば、次のシーズンには、必ずいい相手を見つけることが出来るよ」

「その必要はありませんよ」

ふいに割りこんできた声に、マリーは地獄から救われたような心地がした。

ハロルドとサマンサの後ろに、シャンパンのグラスを持ったアレックスが、穏やかだが、どこか剣呑な笑みを浮かべて立っていた。

舞踏会の夜 3

「マリー、待たせてしまつてすみません。」

「……ところで、この方たちは？」

「あ、はい。」

コープ男爵に、レディ・コープです。昔からの知りあいの……」
そう言つと、アレックスは片方の眉をはねあげた。

名前を聞いて、彼らが誰だかわかつたらしい。

マリーは、全身をこわばらせながらようすを見守つた。

「ああ、そうでしたか。お会いするのは初めてですね。」

アレックス・ハーストです。これを機会に、顔と名前を覚えていただけると嬉しいのですが」

にこやかに、なめらかに言いながら、アレックスは手に持つていたグラスをマリーに渡す。名前を聞いたハロルドの顔に、ゆっくりと驚きが広がっていく。

「あなたはもしか……なかなか社交の場に出てこないことで有名なあの……」

「そのようですね。有名になど、なるつもりはなかったのですが」

「やはり！ いや、これは嬉しいな、こちらこそ、お近づきになれて光栄ですよ」

嬉しそつに言つたあと、ハロルドは怪訝そうな顔をしてマリーを見た。

「それで、マリーとはどのような関係なのでしょう？」

アレックスはその質問に眉根を寄せた。あまりにもぶしつけだと思つたからだ。

マリーはひやひやして様子を見守つていた。

アレックスが気分を害したようなのが、とても気にかかる。当然だ。こんなふうに、あからさまに詮索されて、気分を害さない方がおかしい。なのに、ハロルドはその変化に気づかないのだ。それも

また、彼のもつ、いくつもの欠点のひとつだった。

「彼女は私の優秀な助手です」

アレックスが低い声で言うと、ハロルドの顔が、なるほど、とでも言いたげな、あざけりをふくむ笑みにゆがむ。隣のサマンサも、まるで理解できない、異物を見るような目つきになった。

マリーは、目頭が熱くなってくるのを感じた。やはり、このような場所に来るべきではなかった。ここ数年そうしてきたように、静かにひとりで過ごしていればよかったのだ。

が、次にアレックスが発した言葉で、マリーの心境が一変した。

「それに、大切な恋人でもあります。」

そろそろ婚約を、と考えているのですが、忙しくてなかなかままなりません。仕事が忙しいのは、錬金術という学問が認められてきた、という意味でもあり、嬉しくもあるのですが、私生活を犠牲にしなければならぬところが、つらいところですね」

あまりにも唐突な告白に、思わずグラスを落としそうになる。

手もとを見ると、指が震えているのがわかる。

いま、彼は何と言ったのだ？

「あ、ああ、やはりそうなのではないかと思っていたのですよ。」

そうですか、いや、おめでとうございます。正直、彼女のことはずっと気にかかっていたので、これで幸せになってくれると思うと、僕も嬉しい。……良かったね、マリー」

「あ、ありがとう」

マリーは、氣力をふりしぼって精一杯幸せそうに、ややほにかみながら、ほほえんでみせた。だが、ハロルドの目は全く笑っていなかった。むしろ、苛立っていることに、マリーは気がついてしまうけれど、そんなことはどうでも良かった。

サマンサの祝福の言葉も、ほとんど耳に入っていない。機械的に会釈をかえし、お礼を述べるが、何を言ったのかもよく覚えていない。

その時、楽隊が音楽を奏ではじめた。ハロルドとサマンサは、ダ

ンスのためにふたりから離れていった。離れていくとき、ハロルドは小さい声でつぶやいた。

「まあ、色仕掛けでもしたのだろうね。でなければあんな大柄で、頭の中に聖書でもつまっているような女、彼が相手にするはずもないさ」

小声だったのに、聞こえてしまった。

マリーは落胆した。彼は、なにひとつ変わっていないのだ。結婚することにならずに済み、良かったとは思う。だが、彼の放ったナイフのような言葉が、マリーの心に残した傷は、決して消えることはない。そう考えると、出会ったことじたいが、不運だったのだと感じた。

「彼の言ったことなど、何ひとつ真に受けることはありません。君は私を誘惑してもいないし、とても美しいのですから。ほら、他の男性たちを見てみるといいですよ。君にダンスを申し込みたくて、こちらをうかがっている紳士が大勢いますよ？」

言われたとおりに顔をあげ、フロアを見渡してみると、何人かの独身男性とすぐに目があつた。慌てて目をそらし、シャンパンを口にふくむ。なぜかひどくのどが渴いた。

「ああ、あまりたくさんは飲まないでくださいね」

「どうしてですか？」

「酔ってしまうと、踊るのが大変になるでしょう？」

せっかく舞踏会に来たのですから、ぜひ、私とワルツを踊ってください」

その言葉に、マリーは頬が熱くなってしまった。

もうずっと、ワルツだけではなく、ダンスを踊っていない。そもそも、マリーを誘うような男性自体がいなかったのだ。

嬉しさと不安の入り混じった目でアレックスを見ると、彼は優しくほえんでくれた。

「実は私、この日のためにダンスの特訓をしてきたんです。せっかががんばったのに、特訓の成果がむだになるのは悲しいので、どう

か……」

穏やかに懇願されると、マリーの心は明るくなった。断るつもりはもともない。けれど、ドジを踏んで、迷惑をかけたくなかったのだ。けれども彼のほうも、あまりダンスを踊りなれていないという。それならば、あまり気に病むことはないかもしれない。

マリーは、半分ほど干したグラスを、近くのテーブルの上に置いて立ち上がると、アレックスに向かって、ほほえんだ。

「私などで良ければ、よろこんで」

アレックスは嬉しそうにマリーの手をとり、甲に唇を落として「ありがとう」と言った。マリーは心まで躍りだしそうな気分になった。

ふたりはぎこちなくダンスフロアに足を踏みいれ、ゆっくりと、まわりの邪魔にならないような位置で、ダンスを楽しみはじめた。特訓した、というだけあり、アレックスのリードは、マリーの不安をとりのぞくことが出来るほど、ゆるぎないものになっていた。

久しぶりの空気に気分が高揚する。

最初のダンスを終えて、もといった場所に戻ると、マリーのもとへ、ダンスのパートナーになつて欲しいと申しこむ男性が殺到した。ほとんどが若い独身男性であり、驚きと困惑のなかでアレックスを見ると「楽しんできてください」と言われたので、ちょっと戸惑いながらも、彼らと踊ることに決めた。

幸い、相手の足を踏みつけるようなこともなく、マリーは、自分の体がステップを覚えていてくれたことに感謝した。途中で休憩や軽食をとりながら、ふたりは舞踏会を楽しんだ。アレックスのほうも、何人かの女性と踊ったようだ。アレックスは誰に対しても穏やかに接し、マリーはそれにかすかな不満を覚えながらも、それすら舞踏会の熱気にもこまれて、夜は更けていった。

やがて、パーティもお開きになり、楽隊が片づけをはじめた頃、ふたりは館を辞して帰途についた。

乗り込んだ馬車の中。

まだ興奮を引きずって、頬の上気したマリーを見ながら、アレックスは切り出した。

舞踏会の夜 4

「その、あのような場所で、突然の告白をしてすみませんでした。驚いたでしょう?」

「あ、はい。驚きました……突然だったこともありますけど、それ以上に……」

マリーがなお、言葉をつづけようとするのを、手を上げてさえぎり、アレックスは息をついた。

馬車の中は暗く、互いの顔が良く見えない。マリーの目には、今アレックスがどういう表情を浮かべているのかは、まったくわからなかった。闇に浮かびあがる、アレックスの白い手袋を見て、少しでも心境を読み取ろうとしてみた。けれど、やはりそれは不可能なことだった。

「……そうだったろうと思います。正直、いきなり意見を変える気になったことには、私自身が一番、驚きました。でも、あれは、本当の気持なのです。」

正式には、日を改めてきちんと言いますが、私は、あるとき、あなたに?なかったことにしよう?と言われて、とてもつらかった」

「……ごめんなさい」

「いいえ、謝らなければならぬのは私のほうなのですから、あなたには怒られても仕方ありません。ですが、さっき言ったことは、本当の気持ちです……信じてください。」

私は、あれから、自分の気持ちを整理してみたのですが、結論としては、過去にとらわれつつづけることは、悪なのではないか、と感じたのです」

「過去……」

マリーはつぶやいた。それは、ずっと気になっていたことだった。彼は、昔になにかつらい経験をしており、そのために人を愛することに抵抗を抱いているのではないか。マリーはそう考えていた。

本当は、聞いてみたい。けれど、変な聞き方をしたら、傷つけてしまうような気がして、聞くことが出来なかったのだ。

「そうです。過去は、変えられません……けれど、これからは、自分の努力しだけで、優しくてあたたかい未来をつくることができるのだ、とようやくわかったんです。

そして、その試練に立ち向かうとき、私は、あなたに側にいて欲しい。

……他の誰でもなく、あなたに、マリィ……」

暗がりから、アレックスの手がのびてきて、マリィの両手をそっと包んだ。ふたりは、向いあわせに座っている。すぐ近くで、アレックスが深呼吸したことに気づかないわけにはいかなかった。

マリィの心臓は、いまにも口から飛び出しそうなくらいときどきしていた。

「私と、結婚してくださいませんか？」

少し震えた声で、彼は言った。

まるで、乞い願うような声で。

マリィは心臓がとまりそうになった。落ちつかなければ、と思って、息をおおきく吸おうとするのに、のどが震えて、うまく吸えない。

それは、一生聞くことのない、マリィには縁がないと思っていた言葉。

知らず知らずのうちに、マリィの頬を、涙が伝う。

「……泣いているんですか？　だめならばだめと、はっきり」

「いいえ。違うんです……ただ、嬉しくて」

それ以上は、のどがつまって声にならない。

「……それは、肯定の言葉と受けとつてもかまわないんでしょうか？」

「はい」

涙声で、かすれてはいたが、マリィは必死にそれだけ言った。

涙がとまらない。早く止めなくては、館についてしまう。マリィ

は、懸命に目もとをぬぐった。

「使ってください」

アレックスが、そつとハンカチを渡してくれた。マリーは感謝しながらそれを受けとって、涙をふいた。そうしているうちに、馬車は館に到着する。今夜は、このまま館に泊まっていくことに決まっていた。やがて、御者が下りる音が聞こえ、扉が開けられる。

馬車を降りてエントランスホールに入ると、アレックスが言った。「あの、よろしければ、明日すぐに戻ってしまわずに、しばらくここに滞在していきませんか？」

色々と話もしたいですし、一緒に、新年を迎えられたなら、嬉しいのですが」

「でも、ご迷惑ではありませんか？」

「平気ですよ。前にも言ったとおり、この館の持ち主は、私の姉の夫なのです。彼らは、冬の間はまず戻ってきませんし、私はなにかを催したりしないので、部屋もほとんど開いているのです。使用人たちも、世話しなければならぬひとが、ひとり増えるくらいはどうということもないでしょうし……」

アレックスの声がすこし弾んでいる。マリーは少し気後れしながら、その申し出を受けることにした。

こんなことがあった後、寮の部屋で、ひとり過ごすのはあまりにも寂しい。それに、サラとビックのことも気になる。寮より、こちらのほうが、彼らの暮らす館に近いから、様子を見に行ける、という思いもあった。

クリスのことは気にしていない。彼は、いつも新年を研究員仲間と酒を飲んで騒いで過ごすのだ。

「じゃあ、よろしく願います」

マリーが言うと、アレックスは心から嬉しそうに笑って「良かった」と言ったのだった。

眞とほころび 1

翌日、マリーはアレックスの暮らす館をおとずれた客人に腹を立てていた。

その客人とは、リサとビックだ。

「もう！ 私は本当に心配したのよ！」

「だから、ごめんなさいってば。でもね、あなたを舞踏会に引きずり出すには、これしかないと思ったのよ。教授ってばなかなか動かないし、ビックと相談して、ちよつとしたお芝居をすることにしたのよ」

謝りながらも悪びれずにリサは言った。

ビックはそのとなりに、どこかすまなそうに、けれど少し楽しそうに座っている。マリーは彼を恨めしげに見た。茶色い髪に、繊細そうな顔だち。どこかあどけなさも残しており、保護欲をかきたてる。妹のイーディスとは、あまり似ていない。

「ウエストン卿までこんな悪ふざけに加担するなんて……あなたに対するイメージを書き変えないといけなくなってしまったわ」

マリーが疲れたように言うと、ビックは明るく笑った。

「はは、そうかもしれないね。でも、僕らは良かれと思ってしたんだよ。」

実際、結果はご覧のとおり、そうだろう？ アレックス」

問われたアレックスは、肩をすくめた。

「まあ、心配して訪ねたのに、元気に仕事している姿を見たときは頭に来ましたけどね。」

それに、最初に話を聞いたときも、なんだか騙すみたいで、あまり気がのらなかったのも本当です。けれど、話を聞くうちに、良い機会だとは思いましたし、ばやばやしていると、いつまでも行動を起こせなかったというのは事実だったもので……申し訳ありません、マリー。

ですが、よくイーディスまで騙せましたね？」

「なに、イーディスは僕が体調を崩すといつも、うつるのを恐れてすぐにおばさんの家へ行ってしまうからね。母と主治医と使用人たちに協力してもらっただけで、すぐに騙せたよ」

「いい気味よ。私、どうしてもあのひとだけは好きになれないの」

リサは鼻を鳴らして、あっけらかんと言った。

マリーはびっくりした。リサが、自分の婚約者の家族をそんなふうに言うなどとは、思ってもみなかったからだ。啞然として彼女を見ていると、リサはいたずらっぽくほほえむ。

「騙したことで、嫌な思いをさせたならごめんね。」

でも、私たちはふたりの幸せを思ってたの。それだけはわかって」

「それについては疑っていないわ」

マリーはリサのほほえみに苦笑しながら言った。

「だけど、ふたりがいたずら好き、ということもわかったわ。」

だから、これからは用心させてもらうことにするわね」

「ちょ、ちよっと、マリー！」

「いや、彼女の言うとおりだよ。用心しておいた方がいい。そのうえで、君たちをまた罠にはめられるか、方法を考えてみることにするよ。寝込んだときの最高のひまつぶしだ！」

ビクはそう言って、心から楽しそうに笑い声をあげた。

賢とほころび 2

ほどなくして、リサとビツクは帰って行った。

マリーは、心のつかえがひとつとれたことを喜んだ。

もうひとつは、ハウエルズのことだ。それだけが、ずっと胸に刺さってとれない。

しかし、マリーは、決してそれを表には出さなかった。

アレックスが嫌がりそうな気がしていたから。

そのおかげか、マリーはアレックスと、屋敷の使用人たちとともに、穏やかに新年を迎えることができた。市街には雪がたくさん降り積もり、ひとびとは屋内で暖かく過ごし、用のあるひとだけが、体をちぢめて外を急ぎ足で歩いていた。

マリーは久しぶりに、寮の部屋以外で新年を迎えられ、自分で自分の世話をせずすみ、あたたかく、ゆったりと過ごすことが出来て幸せだった。

アレックスといえば、性急にことを進めたくない。まずは、マリーの父であるヘイスティングス卿にあいさつしてから、数年のうちに正式に結婚したい、と語った。マリーも、まだ研究に少なからず未練が残っていたため、その案に心から賛成したのだった。

そうして、アレックスのすすめもあり、結局十日ほど屋敷で過ごしたあとで、マリーは寮へ戻った。

学院内の通路には、ここしばらくのあいだに降った雪が深く積もっている。真ん中だけ、管理人が雪をかいたあとがあり、マリーはそこを通って寮へ向かった。

この時期、たいいていの学生たちは例外をのぞいて帰郷しているため、どこもかしこも閑散としているが、マリーはこのときの学院の雰囲気がとても好きだった。

アレックスは寮の入り口まで送る、と言ってくれたのだが、マリーはあえて断ったのだ。この静けさのなかを、ひとりのんびりと歩

きたかったから。街の中と違って、さほど危険なこともない。そう
言くと、アレックスは残念そうにマリーを学院の入り口に置いて、
帰って行った。そのときの表情を思いだしたら、なんだかおかしく
なってきた、マリーは思い出し笑いをしてしまった。

歩きながら、考える。

いつか、結婚したら、どうするのか。研究をとるか、家をとる
か。アレックスは特に訊ねてこなかったが、マリーはここ数日、そ
のことばかりを考えていたのだ。

なんとなく、アレックスは研究を続けてもいい、と言ってくれそ
うな気がした。けれど、本当に結婚すれば、子どもが出来るかもし
れない。それだけならともかく、親類縁者との付き合いも発生する
だろう。と、いろいろ考えるうち、ゆううつになってきてしまった。
マリーがいったん寮に戻ろうと思ったのも、頭を冷やして、気分
を切り替えたかったからだ。

学院がいつもどおりに業務をはじめるまで、屋敷にいても良かった
のだが、とりあえずは、ひとりになりたかったのである。

「ちょっと、自分勝手だったかな」

白い息とともに、思いも吐きだす。

ちよつとだけ、うしろめたい。

だからといって、アレックスが好きだ、という気持ちに変わりは
ない。出来るなら、一緒に過ごしたいのだ。だからこそ、この十日
間は、ほんとうに、ただ幸せだった。誰かといて、こんなにも穏や
かな気持ちになれることがあるなんて、知らなかった。まあ、マリ
ーからすれば、いろいろと物足りなくはあったのだが。

アレックスは、きちんと結婚してから、と言ったが、婚約段階で
すでに男女の関係になってしまうカップルはたくさんいる。と言っ
ても、話に聞いたただだが。そうだとすると、キスのひとつもした
っていいような気がする。

ふいに、リサの顔が浮かぶ。

彼女だったら「自分からやっちゃいなさいよ」と、実に楽しそう

に言うだろう。

それもいいかもしれない。

そう思いながら、表面が凍ってざくざく音をたてる雪を踏みしめて、寮の中へと入った。

罾とほころび 3

ラウンジは少し散らかっていた。ここに残った研究員たちが、ここで新年を祝ったり、酔っ払って騒いだのかもしれない。もう開けてずいぶん経つのに、まだどんちゃん騒ぎし足りないようだ。それを見て怒る管理人の顔が目には浮かぶ。

マリーはくすくす笑いながら、自室へと向かった。

やがて、部屋へたどりつくと、自室の戸がうつすらと開いていることに気づいて立ち止まる。おかしい、鍵はちゃんとかけてきたはずだ。寮の部屋の戸には、すべて鍵がつけられている。もろもろの犯罪を防止するためだ。良く見ると、鍵が壊れて、戸の取っ手にぶら下がっているではないか。

「……ちよつと、やだ」

マリーは怖くなって、足音を立てずに後ずさる。なかを確認したが、ひとりでは恐ろしい。

とりあえず、クリスを探して来よう。もし彼が、どこかに出かけていて、部屋にいれば帰ってくるまで待っていよう。そう決めて、マリーはクリスの部屋へと急いだ。

幸い、クリスは部屋にいた。聞き取りにくい声で、なにごとか言いながら出てきた彼は、やたらと酒臭い。ラウンジでの酒宴に加わっていたのだろう。

マリーはクリスを、ほとんど無理やり引っぱって部屋へと戻った。「考えすぎだよ。だいたい、侵入者がいたとしても、もういなくなってるって」

ものすごく迷惑そうに目をこすりながら、クリスはあっさりと部屋の戸を開けた。

マリーは彼の背中越しに部屋の中をのぞきこむ。

「だ、誰かいたりしない？ 荒らされてたりは……」

「どこもなにも落ちてないし、動いてもずれてもないよ」

不機嫌な声で、クリスはさっさと部屋の中に入ると、ある一点を見つめてから、振り返る。

「……侵入者ってさ、彼のことなんじゃないの？ 君の最高傑作のさ」

半分寝ているような顔で、クリスはベッドを指差した。

マリーはクリスの言葉に仰天し、あわてて部屋の中に入った。彼の言ったとおり、ベッドに横になっていたのはハウエルズだった。眠っているのだろうか。悪魔に睡眠が必要ななどは知らなかったが、とにかくにもほっとした。

「ああ、もう、心配して損したじゃない。

ねえ、ちょっと、起きてよ、なんでここにいるの？」

マリーはため息まじりに言って、寝ているハウエルズの顔を二、三回、軽く叩いた。ちいさなうめき声があがり、ハウエルズが目を開ける。しばらくはぼんやりとしていたが、マリーの存在に気づくと、力なく腕を上げ、何か言おうと口をぱくつかせる。

マリーはかすかに異変を感じとり、彼の全身をじっくりと見た。

やがて、異変の正体を知ると、血の気がひいた。

「なに、これ……どうしてこんな」

ハウエルズの腕や足には、まるで細長い焼きごてを当てたような赤いあとが無数についていた。それらすべてが、古い文字のかたちをしており、ツタがからみつくように、全身をめぐっている。

「ああ、やっと引っかったんだ」

すると、背後から明るい、どこか面白がっているような声がした。マリーは勢いよく振り向いて、探るような目つきでクリスをにらむ。ひっかかった、とは、いったいどういう意味なのか。

「あれ、教授に聞いてないの？ 僕ら協力して、少し前だけど、学院のいるんなところに、対悪魔用の罠をしかけたんだよ。悪魔学科のひとたちに手伝ってもらってさ」

「……どうして？」

マリーは怒りをこめて問うた。心臓のあたりが痛くなるような怒

りがわきあがる。そんなマリーを見て、クリスは意外そうに首をかしげた。

「どうして、なんて聞かれるとは思わなかったな。むしろ君が一番、そいつのことを捕まえたかったんじゃないの？」

マリーはうつむいた。そう、それに間違いはなかった。

こんな姿を見るまでは……。

賢とほころび 4

もちろん、この体がもどるのならば、それはマリーにとっても本望だ。

なんといつても、この体そのものが、マリーの内面や願望を、あからさまに形にして、現実世界に公表してしまっているようなものなのだ。この体が動いた姿を見て、マリーはそのことに気づいたのだ。

遅いといえば遅いが、制作中は夢中で、自分の思いつきに酔ってもいた。

だから、戻ってきてくれるのは、本当にありがたいのだ。けれど、こんなやり方は、いくらなんでもひどい。

マリーはなんだか裏切られたような気分だった。

「確かにそうよ。でもこれはなに？　こんなに傷つけて、痛めつけて、苦しめてまで、私がこの体を取り戻したいと思うの、そんな訳ないじゃない」

「ああ、そっか。体に傷がついちゃうことは想定外だったな。それは良くなかったね、でもまあ、教授も熱くなつてたし、仕方ないよ。許してあげなよ。君が悪魔にたぶらかされるんじゃないか、って心配してたからそこまで気が回らなかったんだよ」

クリスは肩をすくめ、あくびまじりに言った。マリーは、違う、と思った。そんなことに怒っているのではない。そう思った瞬間、マリーは自分の思いに気づいた。クリスの言葉が胸に突き刺さる。

抱える矛盾が、浮き彫りにされてしまった。

「だいたいそいつ、悪魔だろ？　ひとを墮落させて、混乱におとし入れて楽しむようなやつらなんじゃないの？　それにさ、少しくらい痛みを感じたんだとしても、どうせ不死身なんだし、気にすることないんじゃない？」

「不死身……悪魔」

マリーはつぶやいて、顔をしかめているハウエルズを見た。そうだ、おかしい。なぜ、彼はこんなになってまで、この体から出て行かないのだろう。体から出て行ってしまえば、こんなに苦しむことはないのに。不死身なのだとしたら、傷もすぐに治るはず。

「そうだよ、今チャンスじゃん。その体から、そいつを追いつけるかもしれないよ？」

寮に残ってる悪魔学科のやつ探してさ」

言いながら、クリスはおおきくあくびをした。

「もう戻っていいかな？ まだ眠いし、そいつもしばらくは動けそうにないから、少しの間くらいいいなくても襲われたりしないだろうし」

「あ、ああ、そうね」

考え込んでいたマリーは、クリスの声に我にかえると、急いで言った。クリスは「それじゃ」と言って、さっさと自室へ戻って行った。その足音が遠ざかるのを確認して、マリーは息をつく。少し落ち着くと、イスを持ってきて、ベッドのかたわらに置き、腰を下ろした。

荒い息をするハウエルズの顔に手をのばす。そつと額に触れると、マリーは気づいた。

「そんな……うそでしょ？」

つぶやいて、自分の指先を見つめる。ごくわずかながら、水分がついていた。

しかも、触れた額はほんのりと熱を帯びていなかっただろうか。そうだ、良く考えてみれば、彼がこんなふうに痛がること自体がおかしい。クリスが先ほど言ったように、悪魔はおそらく不死身であり、痛覚などないはず。なのに、ハウエルズは苦しんでいる。

マリーは意を決して、てのひらで額に触れてみた。熱い。うそではない。体温がある。これではまるで、人間みたいではないか。

うめき声をあげ、マリーは混乱する頭を抱えながら、とりあえず、手ふき用の布をいくつか持って、部屋を出た。頭を冷やしたい、い

や、冷やさなければ。ついでに、マリー自身の頭も冷やしたかった。
今はとにかく、ハウエルズの体の痛みをやわらげてあげることが
先決だ。

彼が話の出来る状態にならなければ、何があつたのか、問いた
すことも出来ない。

マリーはため息をつきながら、看病をはじめた。

痛みと執着

つめたい手が、やさしく肌に触れる。

この体に入ったときから、それだけは感じられていた。最近、それが温度をともしなうように変化してきていることに、ハウエルズは気づいていた。

痛みも、感じるようになってきている。悪魔といえども、体や魂が傷つけば、痛い。

だから、痛い、という感覚は知っている。

しかし、それが長時間つづくというようなことはなかった。

（そのせいだろうな、あんな単純な罠に引っかかるなんて……）
いつかは何か仕掛けてくるだろうとは思っていたが、こんな簡単な罠だとは。

簡単すぎて、逆に見落としてしまった。

罠、と呼べるようなしろものではない。

あの教授とその助手がしたことは、研究所のあらゆるドアノブに神の言葉を記した細長い紙を張り付けたり、小さな十字架を飾れるところすべてに置いておいたのだ。

ハウエルズがそれらを避けて行くと、マリーの個人研究室にたどりつく。そこに、悪魔の魂を焼く魔法陣が描かれていたのである。灰色の石の床に、薄い、とても薄い黒で。簡単には消えないように、油分を含んだインクを使っていたから、マリーが気づかずに歩きまわってもそうそう消えることはない。

おそらく、彼女は知らなかったのだ、とハウエルズは思った。思いこもうとした。

ただ、ハウエルズ自身が、信じたかっただけなのかもしれない。マリーなら、自分を傷つけるような真似はしないだろう、と。そう思って、個人研究室に逃げ込んだのだ。

そうして、ハウエルズは罠にかかってしまった。

彼女なら、体を返して欲しければ、真っ向から話し合いで決着をつけようとするはずだ。そう思っていたから。けれどもし、そうでなかったとしたら……？

それを思うと、つらかった。

自分のなかに生まれてしまった人間のところが言う。もしこんなことを本当にしたのだとしたら、彼女の大切に行っているものすべてを傷つけてやる。こころが手に入らないのなら、その命と体だけでも、むりやりに食らってやる。

だからこそ、ハウエルズはふらつく体でここまでやってきた。

暗い情念に、身も心も焼かれているような気分で……。

ハウエルズは、もうろうとする意識のなかで、ゆっくりと目を開けた。

視界はぼやけている。少し前から、体の表面を冷たいものがなでていく。なでられるごとに、痛みがほんのわずかやわらいだ。ふしぎに思っ、ぼやけた視界のなかに理由をさがす。

「あ、気づいたのね？ 今、傷に効く軟こうを塗ってるから、じっとして……もしかしたら、しみて痛いかしら？ でも、我慢してね」

やわらかな、ハウエルズにとって甘やかにひびく声がした。

「……マ、リー？ 聞き、たいことが」

「後でね。もう少し、熱と痛みがひいてからじゃないと」

ハウエルズは、たまらなくなつて痛む体を起こした。視界が少し晴れてくる。額から、濡れた小さな布がぼとり、と落ちた。それには目もくれず、ハウエルズはマリーの二の腕を強くつかんで、問う。

「あれを、知ってた……のか？」

「なんのこと？ あれ……ってなに？ そんなことより、今はまだ起きちゃ……」

「魔法……陣のことだ」

ハウエルズは荒れた声で、マリーの言葉をさえぎるように言った。すると、マリーの目に理解の色が浮かんだ。

「私は知らなかった。さつきはじめて聞いたの。私は、私だったら、こんな方法は選ばないわ。」

さあ、休んで、まったく……悪魔を看病することになるなんて、夢にも思わなかったわ」

マリーははつきりと言った。

信じてもいいのだろうか？

そんな思いがよぎったものの、それ以上は思考が続かない。ふたたび横になると、ハウエルズはマリーの手を握った。

マリーは、びっくりしたような顔でハウエルズを見る。

「手、握ってても、いい？」

そう訊ねると、マリーの頬に赤みがさす。彼女は困惑したように、口のなかでなにことかつぶやいていたが、やがて諦めたように言った。

「いいわ」

その答えに、ハウエルズは満足して目を閉じる。

痛みと冷たさばかりが満ちていた感覚のなかに、あたたかさと安心がまざりあう。ああ、これが安心する、という感覚なのか、と思いつつ、ハウエルズはふたたび意識を手放した。

悪魔学科の女 1

マリーはハウエルズの寝顔を見ながら、どうすればいいのだろう、と考えていた。

彼はどんな人間に近くなってきているようだ。最初のころは、眠りすら必要としていないふうだったのに。今では、こんなにも無防備な寝顔をさらしている。

こんなことが、起こるものだとは、思いもしなかった。

「……このまま、ハウエルズが人間になっちゃったら、どうなるのかな」

ぼつり、とつぶやいてみて、マリーはため息をついた。

悪魔が入り込んでしまったとはいえ、この身体は自分が生み出したものだ。作った時は、しばらく眺めて過ごし、やがて体が朽ちたら、どこか迷惑にならない場所へ、夢や望みや嘆きや、その他、もるもろの苦しい感情とともに、埋めてしまおうと思っていた。

けれどももし、彼が生きてしまったら？

それは、そもそもどういう存在になるのだろうか。

どういう定義の上に成り立つ生物になるのだろうか。

マリーも、悪魔について調べたことはあるものの、何から何まで詳しいことはわからないことだらけだ。とにかく、細かいことについては、ハウエルズ自身に聞くのが一番良いだろう。

けれど、彼が回復するのにはもう少しかかりそうだ。

その間は、図書館でいろいろと調べてみよう。

そう決めて、マリーは複雑な気持ちを押しこめた。こんなふうに普通の人間みたいに、弱っている姿を見ると、こころが動いてしま

う。

アレックスは、決して弱いところを見せようとはしない。

そんな彼を、愛しているはずなのに、こんなにも気持ちが引き裂かれるのはどうしてなのだろう。そんなことが頭にうかび、マリー

は激しく首を横に振った。思考がやや混乱しているいま、そのことについて考えるのは良いことではない。

いまは、ハウエルズに回復してもらうこと。そして、彼自身がどうしたいのか聞くこと。

そのこと以外は、考えても無意味だ。

そうところを決めた後、マリーは戸のほうに目をやって、血の気が引いた。鍵が壊れたままだ。あのまま放置していて、もしも、誰かが訪ねてきたら困る。それがアレックスだった場合は……。

けれど、いまはここを動けない。ハウエルズの手を、放すことなど出来ない。

マリーは祈った。せめて今日一日だけでいいから、いや、ハウエルズが目覚めるまででいいから、誰も訪ねてきたりしませんようにと。

それから約三時間後にハウエルズが目覚めるまで、マリーはやきもきして過ごすはめになってしまったのだった。

ハウエルズの意識は戻り、少し安堵したものの、まだ痛みが強そうだった。

動かすことは当面のあいだ出来そうにないが、鍵だけは直しておかなくては、マリーは思った。鍵が壊れたままでは、安心して部屋にいられない。

そのため、少しの間だけ隠れてもらうことにした。マリーは急いで管理人のおじさん呼び、すぐにつけなおしてもらった。管理人のおじさんは、酔っ払いが壊したみたい、という言葉をしんがり信じてくれたので、マリーはとりあえずほっとした。

「じゃあ、ちよつと図書館に行ってくるけど、じつとしてるのよ？」
「はいはい、行つてらっしゃい」

ベッドの上からひらひらと手を振り、ハウエルズは笑って見せた。マリーは、ため息をついて、直してもらったばかりの鍵をかけて外に出た。

外に出ると、マリーはうめいた。

「ああ、今夜どうしよう」

時間は午後である。帰って来てから、ずいぶんと時間がたってしまった。

別の思索についてやそうと思っていた時間が、すべてつぶれてしまった、と思いながら、マリーはすべて転ばないように、静かに歩いた。

図書館は、学院の建物のなかにあるのではなく、まったく別の建物である。古い離宮を改装してつくられた学院の本館とは異なり、最近建てられたものだ。そのため、造りがまったく異なっていた。シンプルで明るく、機能的な図書館を、マリーはとても気に入っていた。

また、図書館は一般のひとでも利用できるようになっており、建物

のそばには、まばらだがひとの姿がちらほらあった。入口まで来ると、寒いので、さっさと中に入った。

薄暗い入り口をくぐると、少しかびくさい紙の香りに包まれる。

マリーは早速、入口のカウンターに座っている司書に名前を告げて、本を探しにかかった。

ハウエルズには言ってこなかったが、マリーは悪魔について調べたつもりだった。真っ直ぐに悪魔学の書籍がある場所へ向かう。今まで、錬金術に必要な範囲でしか、悪魔については学んで来なかったのが悔やまれるが、たとえ付け焼刃であっても、もう少し知識があれば、彼の役にたてるのでは、とマリーは考えたのだ。

アレックスのことと同じくらい、マリーにとって、ハウエルズに関わる問題は重要なことだった。

自分が、生み出してしまったようなものなのだから。

いや、完全に、ではないかな、とマリーは考えた。あの時、勝手に持ち去った悪魔学科の者にも責任はある。そのときのことを思い出したマリーは、怒りも同時によみがえり、大きくため息をついた。怒っている場合ではない。

落ち着け、と言いつ聞かせ、ずらりと並ぶ背表紙に目を走らせる。

その時、となりに軽くぶつかってきたひとがいた。

「あ、ごめんなさ……」

その人物は謝りかけて、マリーを凝視した。マリーの方も凝視した。

「あー……!」

ふたり同時に、互いを指差して叫ぶ。すると、周囲から避難めいた視線がたくさん突き刺さり、マリーとその人物は口を押さえた。マリーはうらめしい思いで、その女性を眺める。

黒い髪、華奢な体つき。大きな青い瞳。まつ黒なローブなど着てさえいなければ美少女なのに、と思ったことは忘れていない。

「あなた、あの時の……」

そもそもの元凶をつくったうちのひとりだ。

「あの時は申し訳ないことをいたしました。勝手に研究物を拝借してしまつて……。それで、あの、あなたがまだ生きてらっしゃると言うことは、あの方は抜われてしまったのでしょうか？」

あの方、とはようするにハウエルズのことだろう。

マリーは苦虫をかみつぶしたような顔をしながら、答えた。

「まだいるわよ」

しかも厄介なことに、人間の心まで持つてね、と心の中で言い添える。

すると、女性は顔を輝かせた。

「いるのですか！ ああ、良かった滅びていなくて。私が初めて召喚に成功した方なのです！」

あの、あの方に会わせてはもらえないでしょうか？ お願いします、一目、ひとめっ！」

その女性はマリーの両手をがっちりつかみ、目をうるませて叫んだ。

ふたたび、非難の視線が集まつてくる。マリーは、慌てて言った。「ちょっと、静かにお願い。そのことについては、ちょっと話合いましょう、ほら、あつちで、ね？ だから落ち着いて、興奮しないで、迷惑になるから……」

マリーは、図書館の南側にある喫茶スペースを、視線で示してみた。女性は、何度もうなずいてからマリーの手を放すと、嬉しそうに、本を持ったままそちらへ歩いて行く。相も変わらずのまっ黒ローブ姿に、まわりのひとがぎょつ、として逃げて行く。

面倒なことになった。

マリーはすでに疲労をおぼえながら、彼女のいる席へと向かったのだった。

悪魔学科の女 3

女性はジユディと名乗り、自分は悪魔学科で講師を務めている、と言った。

「あなたは錬金術科の方でしたか。あのときはすみませんでした。私、初めて儀式を行って、上手くいったもので、大興奮してまして、あの体がどういう経緯でそこにあったかとか、なんにも考えなしに使っちゃったんです」

申し訳なさそうな顔をしつつ言うが、声ははしゃいでいる。

マリーは渋面でジユディを見て、ため息をついた。

「まあ、だいたいそんなことだろうと思ってましたけどね。」

それで、ハウエルズに会いたい理由はなんなんですか？」

「そんなこと決まっているじゃありませんか。聞くんですよ、いろいろと。」

悪魔、という神秘的な存在が、どんな考えを持ち、どんなふう生まれ、どんなふうひとを墮落させるのか、それに、墮天使という言葉もあるくらいですからね、もともと天使だったのか、天使だったら神とはどのような存在なのか…… ああ、たまりませんよね」

ジユディはうつとりしながら語る。

マリーは頭痛がしてきた。こういう手あいは、大学院にはたまにいる。ようするに、変人奇人の類だ。

頭はおそろしく良いのだが、人間性が微妙にだめで、社会性がまったくないタイプであるために、大学院にしか居場所がないのである。

おそらく、彼女もそういうタイプなのだ。

腹がたっていたこともあり、マリーは勝手に決め付けた。

「それで、会わせていただけなのでしょうが？」

ジユディは懇願するような目でマリーを見つめた。

マリーは腹立たしいので、断ってしまおうか、とも考えたのだが、

ふと、考え直す。

そうだ。わざわざ自分で調べなくても、悪魔に詳しい人物が、目の前にいるではないか。

手伝ってもらって悪いことはないはずだ。

なにしろ、今現在マリーが悩むはめになったのは、彼女のせいなのだから。

「いいわよ。ただし、今ちょっと面倒なことになっているの……ねえ、悪魔の魂が傷ついた場合に、なにか有効な手段、みたいなものがあるの？」

マリーが言うと、ジュディは表情を一変させた。

「まさか、ハウエルズ様の身に何か！」

ただでさえ白い顔が、ますます蠟のように白くなる。

「うん、まあ、ちょっと……捕縛用の魔法陣に捕まりかけちゃって、傷ついちゃったの」

「私に、私に見せて下さい！」

「方法があるの？ 手伝うからまずそれを教えて」

マリーが問うと、ジュディは少し考え込むようなしぐさをして、唸る。

「うーん、悪魔の治療ということについては、私も読んだことがあります。もともと、悪魔は自己治療能力が異常に高いのです。少々の傷くらいなら、すぐに治ってしまうはずですよ。」

それが治らないということは、何かが変化したとしか」

ジュディの言葉に、マリーはやはり、と思った。

「もともと、悪魔は魂だけの存在に近い、というのは私も読んだわ。それが、ああして実体を得てしまった、ということが関係しているのかしら？」

そう聞くと、ジュディはうなずいた。

「おそらく、そうだと思います」

「……じゃあ、体から切り離せばいいんじゃないかしら？」

「多分、そうだと思います。でも、出て行きたければ自ら出ていけ

るはずですけど」

「それがね、そうでもないみたいなの……とりあえず、見てみられる？　もしも体と魂を切り離す儀式のようなものがあれば、やってみて欲しいの」

マリーが言うと、ジュディはちよつと意外そうな顔をしてマリーを見た。

「マリーさん、ハウエルズ様のこと好きになっちゃったんですか？」
ジュディは唐突に言った。マリーは言葉に詰まり、目を見開いて、しばらく黙りこむ。

「な、何でそんなこと……」

「だって、そうじゃなきゃ助けたいなんて思いませんよ。相手は悪魔です、人間ではありません。たぶらかされたふうにも見えないし、だったら、そうだとしか」

ジュディはすけずけと言いたいことを言う。

マリーは否定も出来ず、言葉に詰まってジュディを睨みつけた。頭をフル回転させ、言い返せる言葉を探す。

「あなたの思い違いよ」

「ええ、そうは見えないんだけどなあ」

「ああもう！　いいから、私の部屋に来てよ、彼、今動けないの。会わせて欲しいんですよ？」

マリーは怒って言った。

すると、ジュディは突然態度を変える。

「はいはい、会いたいです、行きます！」

「じゃあついてきて……」

目を輝かせはじめたジュディを見て、マリーは疲労を感じた。彼女の手を借りようなどとずるい手を考えたのが、間違いだったかもしれない。それでも、もう言ってしまったことは取り消せないのだ。

マリーはため息をつきながら、ジュディを連れて図書館をあとにしたのだった。

悪魔学科の女 4

マリーの部屋に入ると、ジュディは歓声をあげた。

「あああ、お会いしたかったです」

言いながらベッドに近づいて、瞳をうるませる。

すると、横になっていたハウエルズが、迷惑そうな顔でマリーを見て聞いた。

「なあ、こいつ誰？」

「……自分の召喚者も忘れたの？」

呆れた気分で言うと、ハウエルズはそれでもジュディのことを思い出せないらしく、小さく首をひねっている。よほどどうでもいいらしい。マリーは、何だか彼女がかわいそうに思えてきた。

「ああ、こんな痛々しいお姿になってしまつて。」

どうして、この入れ物から出てお行きにならないのですか？」

「え？ ああ、なんだろうな。出られないんだよ、出ようとしてみたんだけどさ」

ハウエルズはてのひらをふしぎそうに眺めながら言った。

やはり、分離しようと試みてはみたらしい。

「そつか、そんなことじゃないかと思つたわ。」

それでんだけど、ジュディ……どんな感じ？」

「うーん、あまり詳しいことはわかりませんね、やってみないことには、なにしろ、実物の悪魔の記録ってなかなか残ってないんですよ。誰かの想像の産物じゃないかと思われるものとか、薬物中毒症状が悪魔つきと間違えられていたり、あきらかに別の疾患が悪魔の仕業とされていたりとかで……」

ジュディは嬉しそうにしながらも、ちょっと困つたように答えた。

マリーはため息をついて、腰に手を当てた。

「なあ、何の話なんだ？」

「あなたが苦しんでるから、その体から悪魔であるあなたの魂をひ

きはがせれば、傷も治るんじゃないかっていう話よ」

問いに答えると、ハウエルズは顔をしかめて、体を起こそうとした。

だが、やはりまだつらいのか、唇が引き結ばれ、顔が苦痛の表情に染まる。

「だめよ、まだ痛むんでしょ？」

「俺は別のところに行く」

「何で？ 何もしたりしないわ」

マリーは、ハウエルズの両肩に手を置いて、寝台に押し戻そうとした。しかし、彼は苦痛の表情のまま、頑固に起き上がろうと力を込めている。

ジュディは寝台の前にひざをついたまま、おろおろしていた。

「今、ひきはがすとか言っておいて何もしないだと？ 言ってることがおかしいぜ。」

俺は、この身体から出ていきたいとは思っていない……だから、この部屋から出ていく」

「やめて、何よ、そんなにこの身体が気に入ったの？ だったらいいわよ、もう体から出ていけなんて言わないから、それなら、傷を治してからまた戻ればいいだけの話でしょう？」

マリーが言っても、ハウエルズは横になろうとしない。

「そういう意味じゃないさ……俺は、ただ」

「ただ、何なの？」

ねえ、とにかくお願い、今は横になつて。そんなに苦しそうな顔、見てるほうもつらいの」

マリーが、諭すように言うと、ようやく彼は横になった。

「……あのお、もしかしくなくても、ハウエルズ様はマリーさんのお好きなんですか？」

ふいに、ジュディが好奇心むき出しの顔で言った。

マリーは固まったが、ハウエルズは笑った。

「まあね。マリーのほうは、そうじゃないみたいだけど」

「え、違いますよ、マリーさんも好きですよ、ハウエルズ様のこと。うわあ、なんだかわくわくしますね、禁断の愛ですか！」

ジュディは、ものすごく楽しそうに言った。

今度はハウエルズも固まった。マリーは、彼の顔を見られなかった。しかし、ハウエルズのほうは、しげしげとマリーの顔を見つめている。

「それ、本当なのか？　だって、マリーはあの教授が……」

「もう！　やめて、そんな話、今しなくたっていいでしょ。」

私だって、自分の気持ちがわかんなくて混乱してるの！」

マリーが顔を赤くして叫ぶと、ふたりとも黙った。

なんともいえない空気が流れる。

ハウエルズは、マリーを見ては目をそらし、ジュディは何やら楽しげに笑いを噛み殺している。いたたまれなくて、マリーは言った。　「とりあえず、ハウエルズが決めて。その傷は、そのまま置いておいて治るものかどうかわからないのよ。だったら、試してみる価値はあると思う。でも、無理強いはいしないから」

「ああ、わかった」

ハウエルズは、納得したようにうなずいた。

「という訳で、必要になったら儀式をお願いできるかしら？」

マリーはジュディを見て言った。まだ頬が熱い。

「はいはい、会わせて下さいましたもの。それに、マリーさんと話が出来て嬉しかったです。」

私、こんなですから、話相手になってくれるひととか、ほとんどいないんです。同じ学科のなかでも、極めて変人だと思われるみたいなんですよね」

そう言って、ジュディはえへへ、と笑った。

マリーは、やや気が咎めた。今だって内心、ジュディを変わり者だと思っているのだ。けれど、彼女は変なひとではあるが、悪い人間ではない。まあ、思ったことを何でも口にしすぎる、という欠点はあるが。

「その、私でよければたまに話を聞くくらいはかまわないわよ。

思ったんだけど、まず、その黒いローブを何とかすれば、もっと友だち増えると思うの」

主に異性の、ではあるが。それでも、マリーの言葉に、ジユディは顔を輝かせた。

「え、いいんですか、話相手になってもらっても。

嬉しいです……でも、きつと嫌な思いさせちゃうと思いますよ？」

「そこよ、話をしながら、私がどこがだめなのか教えてあげる。あなたはそのままでもいいひとだけど、口に出していいことと悪いことがわかれば、いろいろと違ってくるはずよ、ね？」

手伝ってもらうのだから、せめてそのくらいしてもいいだろう。

それに、ハウエルズという秘密を共有できる唯一の人物でもある。

ジユディは驚きに満ちた顔をして、少し恥ずかしそうに「はい」とうなずいた。

かわいい。女のマリーから見ても、とんでもなくかわいい。やりようによつては化ける可能性ありだ。

「じゃああの、今日のところは自分の家に戻りますね。もう夕方ですし」

「そうね。じゃあまた明日、何かお願いしたいことがあったら、私のほうから声をかけるから」

マリーはそう言つて、部屋を出ていくジユディを戸の外に出て見送った。

ジユディは頭を下げながら、ゆっくりと歩き去っていく。

少しのあいだ、そこに立ってぼんやりする。

正直、疲れていたのだ。なにしろ、寮に戻ってきてからというもの、気の休まるひまがない。

「まあ、協力してくれるひとと知り合えたことだし、今日はこんなものかな」

つぶやいて、部屋のなかへ戻ろうとしたとき、廊下のつきあたり、人影をみとめて、マリーは驚いた。と同時に、心臓を氷の手で

つかまれたような感覚が襲う。

今日、最も会いたくなかったひと。
アレックスがそこにいた。

彼は穏やかな表情のまま、マリーのそばへ歩いてくる。

「その、迷惑かとも思ったのですが、やはり心配だったので、様子を見に来てしまいました。」

何ごともありませんでしたか？」

「あ、はい」

マリーはとっさにうそをついた。

今、アレックスに部屋に入られては困る。

そう考えてから、はた、と思いとどまった。どうして、なぜ困るのだろう。むしろ、正直に言って、アレックスにも協力してもらい、ハウエルズを体から切り離せれば、そのほうが良いはずなのではないだろうか。

それに、どうして相談もなく、ハウエルズを捕らえるワナを仕掛けたのか、問い正してもいいはずだ。

なのに、マリーの口から、それらの問いが出てくることはなかった。

ジュディの言った言葉が、頭のなかをめぐっている。「マリーさん、ハウエルズ様のこと、好きになっちゃったんですか？」あの言葉が、何度もくり返し浮かんでは消えるのだ。

「そうですね。それなら良かった……先ほど、部屋から出ていったのはお友だちですか？」

今まで見たことのないかたでしたか」

「今日、図書館で会って、話をしたんです。彼女は悪魔学科のひとで、いろいろなことを教えてもらいました」

そう言つと、アレックスの表情が険しくなった。

「悪魔学……まさかとは思いますが、マリー、彼に会ったりしていないでしょうね？」

「どうしてですか？」

「当然、彼が悪魔だからですよ。あの体が大事だというあなたの気持ちはわかっていますが、悪魔を甘く見ないほうがいい。文献にもたぶらかされ、墮落させられてどん底の人生を歩むだけでなく、命を奪われるという記述もあるくらいです」

アレックスは、声を強めて言った。

心配してくれているのだ、とわかって、マリーは素直に嬉しかった。

「ありがとうございます……私は大丈夫です」

「それなら良いのですが、そうだ、少しですが、あなたが館で使っていた服を持ってきました。少しは寒さが違うと思います……なかに置いていきますね」

アレックスはそう言って、部屋の戸に手をかけた。

マリーは、全身の血が冷たくなる思いがした。どうやって、部屋に入らせないようにするか、頭がまわらないでいるうちに、アレックスは見てしまった。

どうしようもない気分で、マリーは後ずさる。

このまま、逃げてしまいたい。けれど、振り向いたアレックスの表情は、それを許してくれそうになかった。驚愕と怒りに染まった顔に、恐怖をおぼえる。

「マリー……どういことですか？ 会っていない、と今あなたは言いましたよね」

「会っていない、とは言っていない」

今日、戻ってきたらいたんです……それで、図書館に行つて……」
声がかすれているのがわかった。

マリーは、呆然としたまま、言葉をなんとかつなげるように声を出す。

「どうして、私に黙ってわなを仕掛けたりしたんですか？」

唐突に、マリーの口から問いがこぼれた。

「決まっているでしょう。この悪魔を、この世から消すためですよ……この悪魔は、いろいろな意味で私にとって悪だ。やはり、あな

たはたぶらかされている、もつと早く手を打てば良かった」

アレックスは言いながら、手を伸ばして、ハウエルズのえりくびをつかんで引き上げた。

ハウエルズの顔が苦悶に歪む。

「は、ついにお優しい仮面を脱ぎすてたのかよ。それが、あんたの本性か？」

嫉妬深くて、見苦しいな」

苦しげに、けれど嘲笑しながらハウエルズは言う。

「悪魔のくせに、知ったような口をきかないで下さい。いい機会だ、このまま消してあげましょう。マリーには申し訳ないが、体ごと燃やしてあげますよ。そうすれば感情に焼かれる苦しみもわかるというものです」

そう言うのと、アレックスはハウエルズを寝台から引きずり出した。低い声には、深い怒りがこもっている。

ハウエルズは、痛みからうめき声をあげ、アレックスの手から逃れようともがく。だが、怒りの力を借りているアレックスは、そんな抵抗をもともせず、ハウエルズを殴り倒した。大きな体が壁に打ちつけられ、あるはずのなかった血が唇から流れ出る。棚が揺れて、中のものが転がり落ち、ハウエルズに当たる。彼は小さくうめくと、体を丸めてうずくまり、動かなくなる。

アレックスは、ハウエルズを部屋から引きずり出そうと、両腕をつかんだ。

マリーは思わずハウエルズに覆いかぶさった。

「マリー？　どきなさい！」

「嫌です、こんな……なんで、教授がこんなことまでするなんて変です！」

叫ぶように言う。

騒ぎを聞きつけて、近くの部屋の戸がいくつか開く。まだ寮に残っていた研究員たちだ。

アレックスはそれに気づくと、悔しそうに顔をゆがめた。

「マリー、よせ……俺なら、平気だから」

くぐもった声で、ハウエルズはマリーをどけようと、弱々しい力で、腕をあげようとする。

「そんな訳ないでしょう！　だったら、そんなつらそうな顔してないはずだわ」

マリーはさすがのようにハウエルズの胸にしがみついた。

嫌だった。この体が失われるのも、宿った心が消えてしまうのも、耐えられないほどつらい。

すでに、マリーのなかで、ハウエルズはひとりの男性だった。目の前で傷つくのを、黙って見ていられない。このままでは、ハウエルズは殺されてしまうかもしれない。

そう思ったら、体が勝手に動いていた。

「どくんだマリー！ 君はただ、その悪魔に魅入られているだけだ」
「嫌です！ どいたら殺すんでしょう？ 絶対に嫌っ！」

ハウエルズの背に、顔を押しつけたまま、マリーは言う。
自然と涙があふれ、ハウエルズの服が濡れる。

アレックスは、マリーの行動と言葉に衝撃を受け、苦しげなうめきをもらした。

「どうして…… かばうんですか、それは人間ではない、ひとの魂を食らうために、純粋な魂を汚して絶望させて背徳を喜ぶ…… 悪魔なんですよ！」

アレックスは怒鳴った。

とたん、まわりから悲鳴があがる。

悪魔、と聞いてパニックに陥ったのだろう。それぞれ、部屋のなかへ戻るか、逃げだしていく。

だが、黒ローブ姿をしている悪魔学科の研究員たちは、興味深そうな顔で残っている。

そのなかに、啞然としているクリスの姿もあった。
それでも、ハウエルズから離れないマリーを見て、アレックスの表情が冷たくなった。

憎々しげに、ハウエルズを睨みつける。睨みつけられたハウエルズは、懸命に上体を起こすと、マリーに向けて言った。
「ちよっと、力をゆるめてくれ」

「え？」

疑問に感じつつ、痛いのかと思ってしがみつく力を弱めると、ハウエルズの瞳から、赤く暗い光が放たれた。その妖しく輝く瞳が向けられているのは、アレックスだ。

「……っ、何を」

「残念ながら、この？魅了の瞳？はマリーには通じなかったが、あなたにはどうだろうな？」

言いながら、誘うような笑みを浮かべる。

殴られたために額が切れ、唇も破れて鮮血により紅に染まった、美しい人ならぬ存在の、妖しく、艶やかなほほえみ。髪の色も、アレックスのものと似ていたはずなのに、なぜか漆黒に染まって見える。

ほとんど、別人だ。マリーはそう思いながら、見惚れていた。

アレックスは、ふらつきながら、つぶやいた。

「そんなものに、惑わされるものか……。私は、決してそんなものには屈しない」

目もとを抑えて、ハウエルズに歩み寄ろうとする自分を、押しとどめているようだ。その姿をマリーは胸が張り裂けそうな思いで見つめた。すると、アレックスの視線が、マリーの視線とからみあう。彼は、嘲笑うような笑みを浮かべた。

心を傷つけた相手を傷つけることで、その痛みを癒そうとすると、き、ひとはそういう顔になる。

「コープ男爵の言葉の通りでした……あなたは、女性として失格だ」

マリーは大きく目を見開いて、口もとを押さえた。

奈落に突き落とされ、ハンマーで殴られたような痛みが襲ってくる。

それでも、マリーは涙だけ流しながら、嗚咽はもらさない。もらす資格もないことは、マリー自身が一番よくわかっていた。だから、こらえた。

その言葉は、報いなのだ。

はつきりと心を決めず、ふたりに愛されていることでいい気になっ
てしまったことへの。

マリーが、嗚咽をこらえていると、ハウエルズが悲しげな笑みを
浮かべるのが見えた。

「それが、好きな人間に対する言葉なのか？ あんたら人間ってい
うのは、好きなやつに傷つけられたら、傷つけ返さないと気が済ま
ないらしいな」

大きく息をしながら、ハウエルズが言う。

アレックスは、ハウエルズの言葉には答えず、無言で背を向ける。
そのまま、足をふらつかせながら立ち去ってしまった。

マリーはハウエルズを支えるつもりが、すぎるような形になっ
ていることに気づいて、離れた。

涙はまだ止まらない。さすがに我慢しきれなくなつて、嗚咽がも
れだす。

そんなマリーの背に手を当てて、ハウエルズが苦しげに言った。

「ごめん、俺のせいだ……俺がマリーを頼ったから」

その優しい言葉に、マリーは激しく首を横に振った。

「違うのよ、私が全部悪いの……ちゃんと、はじめをつけなかつた
から。だから、アレックスは正しいのよ、こんな女と、結婚しなく
て済んで……良かったのよ」

涙声で、ふりしぼるように言う。

マリーは、両手で顔を覆って、嗚咽が鎮まるのを待った。しばら
くは、悲しみの波に揺られる他はないのだ。感情が荒れ狂っている
うちは、何も出来ない。なんてはがゆいのだろう。

「……全く、相変わらず面倒ごとを引き起こす天才だよね、マリー
は」

クリスの声がした。

その声も言葉も、決してマリーを否定していない。

それが、かえってマリーの胸をしめつけた。

ただ、泣きじゃくるしか出来ない。こんなに泣いたのは、子ども

のとき以来だ。

やがて、マリーたちを見る野次馬も、狭い廊下から去っていった。ハウエルズとクリスは、マリーが泣きやむまで、何も言わずにそばにいてくれた。

やがて、マリーが落ち着くの見計らったように、ハウエルズはクリスを見て、言った。

「悪いが、手を貸してくれないか……俺は、ここを出ていく」

マリーは驚いて、まだあふれてくる涙を必死でぬぐいながら言った。

「だめよ、ただでさえひどい状態だったのに、出ていくなんて許さない」

「俺はここにいたべきじゃない。それに、場合によっては、実験体のような扱いをされるかもしれない。あれだけ目撃者がいれば、なおさらだ」

目撃した者の数は、ひどく少なかったが、人の口に戸はたてられない。ハウエルズが存在が知れてしまうのは時間の問題だった。

「それもそうだね。でもマリーが納得しないんじゃないよ。どこか、かくまえるような場所とかないか、学院内はかえって危なそうだしね」

「それなら俺が知ってるから、大丈夫だ、それに……」

ハウエルズは何かを言おうとして口をつぐんだ。

「なに、どうしたの？」

「何でもない」

そんな言い方をされたら気になる。けれど、マリーは彼の表情がひどく曇っているのを見て、問いただすのをやめた。

「……わかったわ、でも、居場所はちゃんと教えて。急にいなくなるしないで。……それだけ、私が望むのは、それだけよ」

真っ向からハウエルズの赤い瞳を見つめて、乞うように言う。ハウエルズは、戸惑ったような顔をしたものの、うなずいた。

「ああ、ちゃんと教える。だから、今は行く」

マリーも、うなずいて、立ち上がった。

クリスは呆れたようにため息をつく、ハウエルズを立ち上げらせ、肩をかした。

「ああもう、重いなあ」

クリスがため息をつきながら、ハウエルズを引きずるように連れていく。

その背を見送りながら、マリーは深呼吸した。頭が痛い。目がじんじんとする。

休みたい。

ふらつく足で、マリーは部屋の中に戻って鍵をかけると、ベッドに向かい、倒れ込むように横になった。乱れたままのシャツから、なぜか甘い香りがする。ハウエルズは体臭など持たないはずなのにふしぎと、心が安らいだ。まるで穏やかな波の上に浮かんでいるような、そんな感覚に包まれて、マリーはすつ、と目を閉じた。

すでにおぼろげに霞む意識の中で、気づいたことを思い返す。

ハウエルズは、ずっとマリーを一番に考えて行動してくれていた。どうすれば最も幸せになれるか、傷つけずにすむのか。それが、身にしてみても痛くて、同時に嬉しかった。

愛おしさが、こみあげて、また涙をこぼす。

これから、出来うる全てで彼を救おう。マリーは強く誓うと、眠りに身をゆだねたのだった。

人として、悪魔として

（あの女を食らいたいんだろう？ お前は悪魔だ、契約なんてくそくらえだ！ とつとと魂を汚して、墮として、食らっちゃまえよ、回復するには、それしかないぜ？）

心が哄笑をあげながら、甘い蜜をちらつかせる。

（そんなことは出来ない。マリーは、俺を信じてくれた。自分の人生を台無しにしてまで、かばってくれたんだぞ！）

そう。わかっていた。彼女が、あの教授に心の安らぎを覚えていくことも、結婚の約束をしたことも。遠くから見ている。だから、最後にせめて、研究所で生き生きとしていた姿を記憶して、完全に姿を消そうと思った。そのとき、畏にかけられたのだ。

体を引きずるように歩きながら、ハウエルズは痛み集中した。

余計なことを考えるな。そう言い聞かせつつも、手に入れた人間ならではの迷い、悩み、それらの思いが脳内を満たしていく。だから、意識を外に向けようと、自分の入れ物より小さい、肩を貸してくれている青年に声をかける。

「どうして、手を貸してくれる気になったんだ。お前、教授と一緒に畏をしかけただろう？ 俺に、消えて欲しかったんじゃないのか？」

「え、そりゃ、手伝って欲しいって言われたからさ。教授に恩を売っておけば、いろいろと便利なこともあるんだよ。それに、ちよつと勇気のある普通の人は、友人に悪魔がまわりついてることを知ったら、排除しとかないと、って考えるものだよ」

特になんの感慨もないようすで、クリスは言った。

「それに教授、本気でマリーのこと好きみたいだったし、まあ、悪い話でもないかなと思ってさ。じゃあ応援しようかな、と。まさか今日あんな光景を見ることになるとは思わなかったけどさ。正直、僕にはマリーの気持ちがわかんないや」

「ああ、俺にもわからない」

「って言うかさ、女の人がわかんないんだよ。いきなりさっきまで言ってたことと逆の行動をとり始めるんだからさ。思いつきでものを言うし、相談に乗って、って言うから話聞いて、アドバイスしてあげたら、私の気持ちをわかってくれない、最低、とか言い出すんだよ。なんか疲れる」

ぼやくように語ったクリスを見て、ハウエルズは言う。

「そういうものなのか？ その女、もしかしたらお前に気があったんじゃないのか？」

「……」

クリスは不意に立ち止まり、しげしげとハウエルズを横目でながめた。ハウエルズは、理由がわからず、ただじっと見つめ返す。

「な、何だよ」

「マリーの気持ちが変わった気がする」

クリスは唐突に言って、ふたたび歩きだした。

「本当に悪魔なのかわかんなくなるよ、調子狂う……」

ハウエルズはクリスの言う意味が理解できず、口を閉ざした。なにを訊けばいいのかすら、浮かんでは来なかったからだ。やがて、ハウエルズがいつもねぐらに使っていた廃墟が見えてきた。

街の中心部から西の方角へ進むと、そこはあまり裕福ではない、貧しい人々が暮らす街区になっている。安宿や酒場があり、時折酔っ払いや、香水のきつすぎる娼婦とすれ違う場所だ。そのため、出て行ったまま放置されている家屋が点在している。ハウエルズはそのひとつをねぐらにしていた。

その家まであと少し、というところで、ハウエルズは言った。

「ここがいい。マリーに、俺はあの廃墟にいて伝えてくれないか？」

そう言つと、クリスは少し意地の悪い笑みを浮かべた。

「そっちこそ、よく僕を信用する気になったね。今言ったこと、教授に教えてマリーに教えなかったらどうするつもりだい？」

その言葉に、ハウエルズは苦笑した。

「お前、マリーの父親に雇われてるんだっけか？ 支援が打ち切られるかもしれないのに、彼女を傷つけるようなことが出来るとは俺には到底思えないな」

そう言つてやると、クリスは舌打ちし、小声で毒づいた。

「全く、いらないうところでちゃんと悪魔してやがる。はいはい、ちゃんと伝えますよ、けど、マリーとはちゃんと友だちなんだ。だからその立場で本音を言わせてもらうと、彼女には近づいて欲しくない。マリーはあんたが人間の心を持っている、と言つてたけど、それはつまり、悪魔の中に人間的な部分が出てきたつてだけだろ？ あんたが悪魔であることには変わらない。いつ本性を現すかわかったもんじゃないからね。それを言うために、手を貸すことにしたんだ」

その通りだな、とハウエルズは思つて、口の端をつりあげて、自嘲する。

「なにがおかしいんだよ」

「いや、別にお前を笑つたわけじゃない。全く同意見だなと思つたんだ」

そう言つと、クリスはわけがわからない、と言いたげな顔になる。

「変な奴だな。まあいいや、じゃあ僕はこれで戻るよ、明日あたり、またマリーと一緒に来るから」

「ああ、すまなかつたな」

クリスは、その返事を聞くと、ハウエルズが壁にもたれかかるのを確認してから、ため息をついて歩き去った。ハウエルズは、痛む体を引きずるようにして、壁の割れ目から廃墟の中へと入り込んだ。かつてここで暮らしていた住人が使っていた家具がいくつか、暗い部屋の中にぽつん、と置かれている。ハウエルズは、寝台がある寝室までふらつきながら進むと、すぐに横たわった。

薄汚れた寝具の上で、ハウエルズは、目を閉じる。

やがて、訪れる眠りを待ちながら、外の物音に耳をかたむけて、

静かに息をついた。

外では雪が舞い踊りはじめている。

誰もいない部屋の空気は、ひどく冷たい匂いがした。

目が覚めたのは、人の気配を感じたからだった。

横になってから、まだたいして時間がたっていないのは、周囲が暗闇に塗りこめられていることから明らかだった。

そのとき、ひたり、と首に冷たいものが当てられた。ナイフだと気づくのに、さして時間はかからなかった。ハウエルズは、特に身じろぎもせずに、闇に目が慣れるのを待った。少し前であれば、すぐになじんだ闇の中だったが、今はいろいろと不便だ。

「動くんじゃない。つたく、なんにもねえな……」

「最初から、物とり目的で来たんじゃないよ。いいからそいつを捕まえな」

「はいはい」

侵入した人間は、三人。ハウエルズは、唐突に言った。

「俺をさらに来たのか？」

三人が、驚いて悲鳴をあげたり、床の上にひっくり返るのがわかる。首にナイフを当てている男の手も震えている。

「だ、だったらどうだってんだ！」

「別に……どこかの金持ちに売るんだろう？ 薬漬けにして。綺麗な顔をしているからな。成人男性であつたとしても、いくらでも捌けるルートがあるという訳だ」

のどから、勝手に低い笑いが漏れだす。ハウエルズは、自分に向かってやめろ、と叫んだ。だが、本来の悪魔としての本能が、そんなことで止まるはずもない。しかも、傷を負い、魂が強く飢えているのだ。

瞳が、赤く淀んだ光を放つ。三人が、魅入られたように自分から

目をはなせずにいるのがわかる。

「俺なら、もつといいやり方を教えてやれるがどうする？」

ナイフを持つ男ののだが、ごくり、と鳴る。

「て、てめえ一体何者だ！」

「肉体を持たない闇の化身。この顔と瞳が何よりの証……俺は、悪魔だ。お前たちは手を出してはならないものに手を出したのさ、このまま俺を刺すならば決して逃れられぬ報復が待っている。だが、契約を結べば、お前たちが心から望むものを与えてやろう」

追いつめるように言葉を並べながら、彼らの姿をしつかりと視認した。三人とも、薄汚れて痩せている。労働者階級の中でも、極めて低い位置の者たちだろう。女は、年増の娼婦だと思われた。年をとると、客も寄り付かなくなる。ついでに、腐臭に近いものをまとっているから、何かの病気を患っているようだ。おそらく性病だろう。

「ただし、全ては契約が済んでからだ。それさえ済めば、俺はお前たちに地上で最も強い快楽を約束しよう……金、酒、女、あふれるほどの食べもの、豪華な部屋で眠り、絹をまとう贅沢をくれてやる」
彼らが望むものを片端から並びたて、心が揺らぐのを見て楽しみながら、問う。

「どうする？ 試しに契約をしてみるか？」

リスクなどないように見せかける。

「自分たちからあらゆるものをむしりとった奴らを、踏みつけにしてみたくはないのか？」

最後のひと押し。彼らは、迷いながらも、ハウエルズに告げた。

「わ、わかった。いいだろう、契約とやらを結んでやる……だが、お前の言葉が助かるための嘘だったら、すぐに金持ちの婆に売り飛ばす」

男の、精いっぱい虚勢に、ハウエルズは嗤った。

そして、マリーに出会って以来、決してしなかった契約をした。久しぶりに、気分が高揚している。なんと楽しいのだろう……こ

れから、この三人をどこまで墮落させるか、考えただけで心が震える。

こみ上げる哄笑を抑えながら、契約書を虚空から取り出す。そのときハウエルズは、マリーのこと、人間としての感情もすべて忘れ去ってしまっていた。

イーデイスの来訪 1

「もう、なんでいないの。ちょっとクリス、本当にここであつてるんでしょね？」

「間違いないつて。あいつ、ここだつて言ったし、僕はうそはついてない。見てみなよ、この血痕……多分あのあとここで寝てたはずだよ、それから起きだして、出かけてるんじゃない？」

クリスの言葉に、マリーは顔をしかめて寝台を見た。

「どうして、約束したのに」

悲しみが胸をついて、マリーは口ごもる。

「まあ、半分は悪魔だからね。彼の人間的部分が対抗できるとは思えないよ、もしそうじゃなくても、服の替えでも探しに行ったんじやない？ またあとで来てみればいいよ」

「……そう、よね」

マリーはため息をついて、廃墟を見回した。二階建ての一回部分。天井はないに等しい。陽光が降り注ぎ、冷たい風がともに屋内に吹き荒れる。

（こんなところにいたなんて。私が、アレックスの館でぬくぬくと過ごしているときも）

白い息を吐くと、マリーはマフラーに顔を埋めるようにして、そつと廃墟を出た。

朝である。結局ものすごい勢いで眠ってしまったマリーは、クリスに起こされて、ここにやってきたのだ。早く、生きている姿を見たいと、急ぐ心のまま走ってきたのに、ハウエルズはいなかった。

「ごめんなさい、責めるようなこと言つて」

「別に、いつものことだろ。正直、こんな不安定なマリー見るのは初めてだよ」

「そうよね」

「とりあえず、戻ろう。今日は普通に仕事あるんだしさ、また夜に

来てみよう」

「うん。ありがとう」

マリーは素直に礼を言っ、て、気味悪がるクリスを小突きながら、寮へと戻った。

本当は会いたい。不安で、たまらないのに、なぜ彼はいないのだろう、とそんなことばかり考えていると、学院の入り口で、困惑顔のジュディに呼び止められた。

「あの、マリーさん！」

「あ、ジュディおはよう」

「おはようじゃないですよ、学院内うわさで持ちきりなんですから。まだ始業までには時間ありますよね……その、迷惑じゃなければ、私にも何があつたか教えてくださいませんか？」

心から案じてくれているジュディの表情を見て、マリーは嫌とは言えなかった。

「ごめんなさい。今すぐにはさすがに時間が足りないわ。今日の夕方はいてる？」

「はい。いつも暇です」

「じゃあ、夕方にある場所へ一緒に行きましょう。道すがら、話をすればいいから」

そう言つと、ジュディはやっぱりまだ不安そうに、それでも得心したようすでうなずいた。

「わかりました、じゃあ後で」

「また、ここで落ちあいましょう」

マリーが言つと、ジュディは「はい」と返事をして、クリスにも会釈して自身の仕事場へと戻って行った。

「マリー、今の美人だね？」

クリスが、去っていくジュディの背中を凝視しながら訊ねてきた。マリーは、無理もないか、と思いいながら、肩をすくめて言った。

「ハウエルズを召喚した悪魔学科の人よ」

「えっ！ あんなに美人なのに……うわあ、何かいろいろと世の中

間違ってるような気がする」

確かにクリスの言う通りだと思った。けれど、他のことを考える余裕のないマリーは、まだジュディの後姿を見ているクリスはそのままだに、さっさと自身の研究室へ向かった。

その日は、研究室の床掃除からはじめた。

魔法陣を、クリスに手伝ってもらい、完全に消す。まずはそれからだ。午前中はそれでつぶれた。午後は、図書館に行って調べものをしてから、研究室へ戻り、材料があるかの確認作業。

マリーには、どうしても試してみたいことがあった。

ハウエルズが入ったあの体は、ホムンクルス作成の方法をアレンジして錬成したものだ。あれが成功したのならば、もしかしたら、何かきっかけさえあればホムンクルスを錬成出来るのではないか、そう考えたのだ。

彼の小人は、あらゆる知識を授けてくれるとされている。

それにすがってみたい、とマリーは考えていたのだ。

ただし、ホムンクルス錬成は教会法で禁止されている。

熱心な信者ではないマリーは、かまうものか、という気持ちだった。今大切なのは、真実だ。知るということだ。そして大学院は、悪魔学を容認していることから明らかなように、知識の探求には寛容であるため、これからマリーが行う行為が、咎められることはない。

真剣に集中し、本をめくり、どのように錬成を行うか考える。周囲の雑音すら耳に入らないほどのめり込んでいたマリーは、突然の来訪者の声に、心臓が飛び出しそうな思いをすることになった。

「ちよっと！ どういうことなのマリー、説明して」

「リサ、ええと、ごめんなさい」

午後、大学院にやってきたリサは、クリスの首根っこを捕まえて、

マリーの研究室に怒鳴りこんできた。とつさに謝罪の言葉が口から
まろびでる。

しかし、目をつりあげたりサが、そんな言葉ひとつで納得するは
ずもなかった。

「謝って済む問題じゃあないでしょう！ あなた、あの体も悪魔も
どこかへ行っちゃったみたいって言うてたじゃない。だから私は安
心してたのに……しかも、教授とケンカしたですって？ 結婚の約
束はどうなるのよ！ 悪魔に魅入られただなんて、嘘でしょう？」

リサは勢いよくまくしたてた。マリーは黙って聞いていたが、ク
リスは少し驚いたようにつぶやく。

「もうそこまで話が進んでんだ、じゃあいろいろと不味かったか
もね」

「そうよ！ 進んでたの、お膳立てしたのは私とビツクよ、不味い
にきまつてるでしょ！ へたをしなくても話が消滅するわよ、それ
だけじゃなくて、一生が台無しよ」

クリスはもの言いたげにリサを見るが、何も言わない。マリーと
同じで、今のリサには余計なことを言わないほうがいいと判断した
のだろう。

「そうね。いろいろしてもらったのに、ごめんなさい……私が悪
いのよ」

マリーは静かに言った。

「そんなこと聞いてない。本当に、本当に悪魔に魅入られたのなら、
今すぐ教会に行きましょ！ 悪魔祓いをしてもらうのよ、あなたは
教授と結婚するべきなのよ、ようやく見つけたんじゃないの、あ
なたをちゃんと見てくれるひとを。私はあなたにもずっとそんなひ
とが現れたらいいって思ってたのよ。それは絶対に教授だわ！ そ
う思ったからビツクをたきつけてまで応援したのよ！」

リサは泣きそうな顔をして言う。マリーは、何も言えない。彼女
の考えや、気持ちに報いることが出来ないから。だから、ただうつ
むいて、目の前に広げた文面をながめた。

「私も一緒に行くから、教授に謝りましょうよ、それから教会に行くの、ね？」

リサはマリーの腕をつかんで、立たせようとした。

「やめて、リサ。私にはやりたいことがあるの。教会に行く必要なんかないし、教授には後できちんと謝罪するわ、お願いよ……しばらく、放っておいて」

そう言つと、リサはつらそうに顔をゆがめた。

「クリス、説明して。マリーはどうしちゃったの？」

「え？ 僕が説明するの？」

突然話の矛先を向けられたクリスは、当惑した視線をマリーに向けた。

そのとき、戸の向こうから別の声が割り込んだ。

「わたくしにも、聞かせて頂けませんか？」

マリーは驚いて目を見開いた。

そこにいたのはイーディスだった。

イーデイスの来訪 2

リサは思いきり顔をしかめた。

その顔にはまるで？不快？の二文字が書いてあるようだ。

「アレックスを訪ねて来たのですが、こちらから大きなお声がしましたものでつい。そうしたら、彼のことが話題になっているようなので気になってしまいましたの。もし迷惑でなければ、わたくしもお話に加わってよろしいかしら？」

「よろしくないわよ、あなたには関係ない話なんだから。教授に会いに来たのなら、こんなところに寄り道せずに早くその顔を見せてあげればいいじゃないの？」

リサがつっけんどんに言う。

クリスは怯えた表情をして、部屋の隅へこそそと逃げていく。マリーもここから逃げ出したい気分だった。なんでこんなことになるのだろう。今日から実験を開始するつもりだったのに。これでは無理そうだ。

「わたくしはあなたには訊いておりませんわ。それで、よろしいかしら？」

マリーに向けて問いかける。愛らしい顔には、冷たい笑みが浮かび、まるでマリーを絞め殺したいと思っているかのような。

「は、はい。どうぞ」

小声で返すと、リサが舌打ちした。マリーは猛獣二匹の前に放りだされた小鹿みたいな気分だった。

「ありがとうございます。それでは質問させていただきますわ。さきほど、アレックスの結婚がどうの、と仰っていたようですね……それは、兄の言っていた、あなたと婚約した、というのは本当のことなのですか？ 今日はそのことを訊きにアレックスを訪ねてきたのですが」

イーデイスはやや憔悴しているように見えた。少し前に見たとき

より痩せている。流行の可愛い小花柄の服装に包まれているので、余計に痛々しい。おそらく、シヨックだったのだろう。もしかしたらそのことで、アレックスを問い詰めに来たのかもしれない。ということは、マリーは彼女にとっての朗報をこれから告げることになるのだ。そのことに対して、胸が重く痛む。だからといって何かが変わるわけでもない。起こったことは元に戻らないし、戻りたいとも思えなかった。ただし、それを口にするには気力が必要だった。

マリーは数回こっそり深呼吸をし、なんとか気力を奮い起こすと、言う。

「……いいえ。おそらく、破談になりました」

イーデイスの顔色が一瞬で変わる。

「マリー！」

リサの咎めるような声が飛ぶ。

「まだ教授とは話をしていないんでしょう？　だったら、決めるのは早いわよ！」

マリーはリサの言葉に首を横に振る。それから、力を込めて言う。「いいえ、おそらく彼は許してくれない。私も、そんな卑怯なことは出来ないの、ごめんなさい。リサ、本当にごめんなさい」

「なんてこと、もう知らないから！」

リサは顔を赤くし、そう言い捨てるように叫ぶと、勢いよく出て行ってしまった。

マリーは悲しみに胸が痛んだが、何度かまばたきを繰り返して涙を追い払う。応援してくれたのに、その逆の行為で報いてしまったのだ。

「……それは、本当なのですか？」

「はい。私が愚かな行いをしたせいで、彼に嫌な思いをさせてしまいました。ですので、おそらくそうなると思います」

マリーがはつきり言うと、イーデイスはしばらくうつむいてから、笑った。

「そう、やはりそうよね。アレックスが、わたくし以外の女性と親しくなれるはずがないんだわ。彼のことを本当に知っているのは、わたくしだけですもの」

どこか、狂気のにじんだ笑いだった。マリーはただ、じっと彼女を見る。

「そうよ、だからあなたが何をしたにしても、最初からアレックスはわたくしのもの。なるべくしてなっただけ、だからあなたは全く気に病む必要なんかありませんわ」

イーデイスは、優越感を含めたいわりの言葉を、悦楽の表情で並べた。マリーは、その言葉に傷ついた。早く、ここから去ってほくれないだろうか。そんな思いで、絞るように問う。

「他に質問がないのでしたら、教授に会いに行かれたらどうです？」
イーデイスは喜色のにじんだ表情でうなずいた。

「ええ、もちろん……ああ、あなたもお忙しいのですものね、ごめんなさい。でもわたくし、どうしてもあなたに聞いて欲しいお話があるのよ。少しでいいから時間を下さらないかしら？　ほんの少しでいいの」

「何でしょう？」

マリーはこれ以上彼女と話をするのが嫌で、ややつつけんどんに答える。

「アレックスがどうしても、あなたと結婚したいと考えるようになったか、ちゃんとこうやって向き合ってみてやっとなったわ。あなたは、アレックスのお姉さまに良く似ているのよ」

イーデイスの言葉に、マリーは首をかしげる。

「いきなり言われてもわからないわよね。彼のお姉さまはね、自害したの」

「えっ！」

声をあげたのはクリスだ。イーデイスは特に気にする風もなく、テーブルの側にやってくると、粗末なイスに腰掛けてマリーと並んだ。

「お姉さまは、当時まだ学問としても技術者としても異端であつた錬金術師に恋をしたの。彼はもともとアレックスの家庭教師をしていてね、その縁でお姉さまと知り合い、お互いに恋に落ちたのよ。もちろん、ハースト家は由緒ある貴族の家柄、許されるはずもないわ。でも、彼は必死に認めてもらおうと頑張つたの」

イーデイスはそこまで一気に語ると小さく息をき、すぐに話をつづける。

「その当時、お姉さまには婚約者がいたわ。心からお姉さまを愛していた彼は、錬金術師の青年を異端者だと告発したの。そのせいで彼は国外追放されてしまった。そして外国で、彼は病を得て死んでしまったのよ。絶望したお姉さまは自害してしまわれたわ……だから、アレックスは誓つたの。決して恋などしない。恋は身の破滅を招くから、と。どのみち、ハースト家は兄が継ぐのだから自分は結婚などしなくてもいいのだし、と言つてね。本当に良い方だったのよ。彼のお姉さまは。アレックスはお姉さまを愛していた。彼女は、あなたのように決して自分のことを優先しない、強くて優しいかただった」

イーデイスは、じつとマリーを見ながら言つた。

マリーは、アレックスがなぜあれだけかたくなに婚約や結婚を恐れていたのか知り、悲しくなった。本当ならこんな形ではなく、アレックスの口から直接聞きたかつた。それでも、容易に心の傷をさせないと考えた彼を責めることは出来ないだろう。マリーは、どうしようもない思いでうなだれた。

「わたくしは、ずっとそんな彼を見てきた。近くにいて、恋とはそんなものじゃないと教えてあげたくてたまらなかつた。けれど、代わりにあなたがやってくれたのね」

イーデイスは穏やかに言う。

優しい声で。毒を含んだ言葉を。言われてすぐに心に突き刺さるのではなく、後で痛むような傷を与える言葉だ、とマリーは思った。そのまま言わずに放っておけばマリーが一生知る必要のなかつた情

報を、わざわざ教えて、後悔させる。

リサが彼女を嫌がる理由がわかった。

「後はわたくしが引き継ぐわ、どうもありがとう。もし、なにかわたくしが力になれることがあれば言ってみてね？」

そう言って、聖女のような笑みを浮かべる。

マリーは彼女の言葉を無表情で聞きながら、言った。

「なら、ひとつお願いします」

「なにかしら？」

「ここで、私たちが話をしたこと、教授の過去を知ってしまったことを黙っていてくれませんか？」

「どうして？」

「私たちが知ったことを、教授は快く思わないはずです。特に、私には知られたくなかったはずですよ」

そう言つと、イーデイスは納得したようにうなずいた。

「ああ、そうかもしれないわね。いいわ、言わないでおくわね」

「ありがとうございます」

礼を言つたが、自分でも心がこもらなかったのはわかる。イーデイスがそれに気づいたかはわからない。けれど彼女は嫣然とほほえんで立ち上がる。

「時間をとらせてしまつてごめんなさいね。お話を聞いてくださつて嬉しかったわ。わたくしはこれからアレックスに会うけれど、彼を責めなくて済みそうよ。それじゃあ、ごきげんよう」

イーデイスはそう言つと、優雅に身をひるがえして出ていった。

マリーはほっとしたが、同時に胸にじくじくした痛みが残ったことを感じた。

「……嫌な女だな、マリー、大丈夫か？」

嫌悪を隠しめせずにクリスが問う。

「平気よ。でも、教授が気の毒といえは気の毒かな」

「そうだね、と言つても僕たちにはやりようがないし、気にしても意味ないよ。さて、と、掃除も終わったことだし、僕は一旦自分の

仕事に戻るよ。夕方にはちゃんと迎えに来るからさ」

クリスは肩をすくめて言った。こういうとき、彼のさっぱりした態度は救いになる。

「うん、いろいろごめんね。夕食はおごるから」

「お、やった！　じゃあ僕は行くけど、絶対にひとりで行くなよ？　あいつのねぐらがある場所はめちゃくちゃ治安が悪いんだから」

「わかってる」

マリーが笑うと、クリスはしばらく疑わしげにしていたものの、やがて諦めて出ていった。

ひとり研究室に残されたマリーは、自分の頬を叩いた。

「さあ、ぼんやりしないの！　やるわよ」

今はどんなに痛くても傷ついてても、立ち止まっている訳にはいかないのだ。後で、思う存分泣けばいい。その後で、再び立ち上がれるかどうかは疑問だったが、今は、忙しくしていることで気がまぎれる。それだけが、マリーにとつての救いだったのだ。

他のことは、集中するとともに頭から完全に追い出す。すると、心にかかっていた霞も靄もきれいに晴れて、頭がクリアになる。

それから夜までのあいだ、マリーは集中を切らすこともなく工程表を書き、材料を集めて過ごした。

おかげで、イーデイスの言葉は思い出さずにいられたのだった。

人生で最大の試み 1

ためこんだ思いを吐きだしたい。

怒鳴り散らして、なんでこんな思いをさせるのか問い詰め、謝るまで許してなどやらない。そう思うのでなければ、気がおかしくなりそうだ。

マリーはそう思いながらも、唇を固く引き結んで、衝動に耐えていた。

「今日もないな、あいつウソついたのかな？」

「それは、否定できませんね……悪魔ですから」

距離を置いた場所で、クリスとジュデイが言った。あれから、一週間がたとうとしている。なのに、ハウエルズは全く姿を見せなくなってしまうていた。

研究の方は、気味が悪いくらい順調だ。クリスも少しは手伝ってくれるし、朝や夕方にはジュデイも一緒にいてくれる。リサはあれから口をきいてくれなくなってしまうた。

時刻は夜だ。手もとのランプだけが唯一の光源である。やわらかなオレンジ色の光が、暗い廃墟を少しだけ温かみのある場所へと変えてくれているが、マリーの心の中は嵐が吹き荒れていた。

「仕方ない、今日は帰ろう」

今日も、の間違いだろうとマリーは言いたくなかったが、クリスに八つ当たりしても何の意味もない。クリスは何も悪くないのだから。苛立たしげにため息をついて、マリーはうなずいた。

「そうね」

痛みを押し殺して、外に出ようとしたマリーは、ふと前方に影が揺らいだのを感じて、顔をあげた。そして、大きく目を見開いて、口をあけた。

「……あ」

ハウエルズが、いた。

マリーは少し後ずさったあと、言いたいことが多すぎてのどがつまってしまう。

「マリー……？」

彼は、ひどく驚いた顔をしてマリーを見やる。その目が、今にも泣きだしそうに見えた。ハウエルズは手を伸ばして、まるでがつくようにマリーにもたれかかり、強く抱きしめてきた。

彼の唇から、震えた吐息があふれて、耳に、首筋にかかる。

心の中を、どうしようもない安堵が満たす。マリーは震える声で訊ねた。

「無事で良かった……今まで、どこにいたのよ」

背中をさすりながら、ランプを手近なテーブルに置き、改めて自分に抱きついていて大きな体を見ると、マリーは異変に気づいた。ない。アレックスに殴られたはずの傷も、魔法陣で傷ついたやけどのあとのような傷もない。

こんな短期間で治るような傷ではなかったはずなのに。

驚きに目を見開いていると、ハウエルズの唇から、苦しげな声が低く響いた。

「……お願いだ、マリー、俺を……俺を殺してくれ」

心臓が、大きくはねた。

「な、に……言ってるのよ」

「人を、食らってきた」

マリーは殴られたような衝撃を感じた。後ろのふたりも、息を飲んだ音が聞こえた。ひどい耳鳴りがしている気がする。

どうりで、傷が治っていたはずだ。マリーは両腕で自分より大きな体を力いっぱい抱きしめた。

この気持ち伝わればいい、と思いながら。

「そんなこと言わないでよ……今、あなたのために出来ることをやってるのに。人と悪魔と、ふたつの存在に分けられないか調べてるの、だから、結果が出るまでは絶対に自分から死ぬようなことはしない。お願いよ。あなたに消えられるなんて、私には耐えられ

ない」

マリーは懇願するように言う。彼の苦しみを考えたら、マリーもつらい。けれど、彼が消えてしまうほうがもつと嫌だった。

今の彼は、人が人を食らわなければ生きていけない状況になってしまっているのだ。

早く、早く解放してあげなければ……彼の心が壊れてしまう。せめて、研究している時間以外を一緒に過ごせればいいのだが。ここに住むことは、マリーには出来そうもない。

「ねえ、クリスにジュディ、どこかあまり治安が悪くなくてすぐに借りられる部屋を知らない？」

マリーは、すぐるような気持ちでそう訊ねた。

「部屋ですか……そうですねえ、あ、そうだ！ でしたら私の家に来て下さいよ。結構広いし、開いてる部屋もたくさんあるので」

「……いいの？」

「はい！ ハウエルズ様をかくまうんでしょう？」

明るく答えてくれたジュディに、マリーは思わず涙ぐんでしまった。

「ありがとう」

「いいえ、気にしないでください。そもそも、私が勝手にマリーさんの研究物を拝借しちゃったのがいけないんですから」

ジュディはそう言ったが、マリーはそれでも感謝の言葉を繰り返した。

それからマリーは、クリスに手伝ってもらいながらハウエルズを廃墟から引つ張り出し、ジュディの家へと向かった。

ジュディの家は内科医をしている。比較的裕福な中流の家だ。貴族を多く患者に持っているらしく、自宅はとても大きい。彼女の言った通り、使われていない部屋がたくさんあった。四人は裏口から

こっそり入り、一旦ハウエルズを部屋に落ち着かせてから、改めて訪問という形をとった。

マリーは特に歓迎された。

なにしろ、自分ではあまり気にしていなかったが、マリーは貴族令嬢なのである。

相談事があるので滞在していくと告げたら、喜んで了承してくれた。

軽く夜食も頂くことができ、マリーは本当に感謝しか出来ない。その日だけは夜も遅かったので、クリスマスと一緒に泊まっていくことになった。

マリーはあえて、ハウエルズと同じ部屋で眠ることにした。

寝台に横たわったまま、呼吸音しかさせない彼を見て、心が痛む。ジューデイに借りた夜着姿で、隣の寝台へ歩み寄ると、顔をのぞきこむ。

容姿の変化はさらに顕著になってきている。

顔は、優しげなものから、どちらかという鋭い印象に。髪の毛、色が黒褐色に変じている。声と目が違うのは最初からだだったが、マリーはこちらの方が確かにハウエルズらしい、と思った。

マリーは、精神的に参っている彼を見て、自分も同じ部屋で休むから、と告げた。すると、ハウエルズは困惑したような顔になった。「部屋は……別々の方がいい。俺は、俺がどうなるかわからないんだ。気づかないでマリーを襲ってしまうかもしれない」

「……別に、かまわないわよ。それより、今のあなたからは目を離せないもの」

言いながら、ハウエルズの横たわる寝台に腰を下ろす。そつ、と手を伸ばして、目にかかった髪をかきわけ、目を見る。

（私は最初から……この目に魅了されていたのかもしれない。だから、悪魔としての彼に支配されなくてすんだのかもね）

そう思っただけで、ハウエルズが顔をゆがめた。

「何で、側にいてくれるんだ？ あんなに魂食われるのを嫌がって

たのに」

「そうね、なんなのかな。自分でもはつきりとはわからないの、ただ側にいたいから」

静かに言って、マリーは笑う。

「こんなに静かで落ち着いてるあなたはらしくないわよ。初めてのキスを奪っておいて、いまさら私から離れたいだなんて、許さないから」

「許さなくてもいい。むしろ、許してくれないほうがいいんだ」

「……何があったの？ 教えて、お願いよ」

問いながら、マリーはハウエルズの手をとって、その甲を頬に押しつける。ハウエルズは、痛みをこらえるような顔をして、ため息をつくと言った。

「俺は、人殺しをしたんだ……俺を、売り飛ばそうとして、廃墟に押し入ってきたやつらがいた。俺は、そいつらをそそのかして悪事に手を染めさせ、悦楽の底まで導いて、背徳行為をすすめ、決定的な間違いを犯させて、警察に捕まって絶望していたところを食ったんだ……、なあ、おぞましいだろう？」

ハウエルズの顔が自虐的な笑みに歪む。

「そうね。でもね、それをしたのはあなたじゃないの。あなたと魂を同じくしている悪魔がそうさせたのよ。だからね、私は分離させようとしているの」

「そんなの、無理さ」

「ええ、わかってる。でも、やるだけはやらせて。それでもダメなら、一緒に死にましょう」

そう言っでやると、ハウエルズの顔が驚愕と怒りをないませにしたようなものになる。

「本気で言ってるのか？」

「本気よ」

「あの教授とはどうなった……俺は、邪魔しないようにしていたのに」

彼が苦痛から吐きだした言葉に、マリーは微かに口を開いて、震えた。やはり、ハウエルズはそんなことを考えて行動していたのだ。彼の気持ち思うと、恐ろしく胸が痛む。

「もう、終わったのよ。今の私には、あなたしかないの……だから、私はあなたを死なせたくないし、死ぬなら一緒よ。ねえ、どう言えばあなたは私から逃げないと言ってくれるの？」

つぶやくように言うと、なぜか勝手に涙が頬を伝った。

ハウエルズは、つらそうに顔を強張らせたまま、マリーがつかんでいた手を動かした。マリーは手を放して、彼の好きにさせる。その手はマリーの頬にふれると、ゆっくりとさするように上下に動く。その撫で方が優しく、どうしようもない気持がこみあげた。

「どうして……俺はこんな形で生まれたんだろうな。ちゃんとした人間だったら、素直に喜べたのに」

「喜んでいいのよ。受け入れてくれれば私は嬉しい……お願いだから、黙って消えたりしないで」

「わかったよ、それが望みなら俺はそうする」

ようやく、彼はそう言うてくれた。マリーはほほえんで、体をかがめて自分から口づけた。初めて、自分から相手を求めて動いたのだ。

この身体は自分が作ったものだけど、今は違う。マリーが心から願った、自分ひとりだけを見てくれる恋人になったのだ。触れると温かくて、ちゃんと存在している。

ハウエルズの手が、頬を離れて首筋を伝い、腕を伝い落ちていく。眠くなってきたのだろう。

「おやすみなさい」

マリーは囁くように言った。ハウエルズは微かに口端をあげて笑うと、目を閉じる。

明日から、また戦いだ。マリーは、不安のこびりついた心のまま、ロウソクの火を静かに吹き消した。

人生で最大の試み 2

不安だった。ハウエルズがちゃんと、言ったとおりに側にいてくれるだろうか、勝手に消えたりしないだろうか。重い気持ちを抱えながら、マリーは研究室に足を踏み入れる。

そうして、毎日毎日、必死に観察と変化を書きとめた。いくつものフラスコを同時に並べて、その中をたゆたう水分に目を凝らす。成果の出ないまま一日を終え、ジュディの家へこっそり向かい、ハウエルズがちゃんといえることに心から安堵する。それが一週間繰り返された。

その翌日に、変化は起こった。

時刻は夕方で、久しぶりに晴れた日だった。

外には雪が降り積もり、暖炉がなければ凍えてしまいそうな、張りつめた空気のなか、外から差し込む、透明なオレンジ色の光に照らされて、フラスコの中が揺れる。

「……出来た？」

つぶやいて、よくよく見る。

小さな小さな、豆粒ほどもない大きさの人が見えた。記録にあるより遥かに小さい。これでは、彼の小人の声など聞こえないのではないか、と思つて、唇をかんて考えた。

だが、その悩みはすぐに解決された。

頭の中に、机をひつかいたような音がしたからだ。

《お前が、我を作ったのか？》

「……え、喋った？」

マリーは驚いて、思わず訊ねていた。すると、豆粒ほどの「それは、馬鹿にしたような笑い声をあげた。体はものすごく小さいのだが、マリーには耳の側でわめかれているくらいの音量があるため、非常に耳ざわりだ。

顔をしかめると「それ」はどこかあざけるような口調で言う。

表情の確認が出来ないので、声で判断するしかないのががゆい。
《何だ、我に用がないのか？ であれば、早々に滅びるとしようか？》

「ま、待つて！ お願いよ、知りたいことがあるの」

《であれば、訊くがいい。ただし、答えられることと答えられぬことはあるし、我が与えるのはあくまでも知識のみであり、奇跡ではない。そこを履きちがえるな》

小さな全知……それが彼の小人の別名だ。

マリーは、激しい動悸を感じて、深呼吸する。早く訊かなければ、と思うのに、体は言うことをきいてくれない。必死の思いで、現状を説明してから、問う。

「それで、そうなってしまった魂を分離することは出来るの？」

《結論から言うならば、どちらも生かすという条件がある限り不可能だ》

小人の言葉に、マリーは落胆して肩を落とす。

《そもそも、魂というのは三層構造になっているのだ。すべてが存在してはじめて、それは魂としての意味を成す。最も表面にあるのが、肉体と魂を結び付ける表層。その後ろにあるのが、肉体を動かし現世の記憶や自我を有する中層。さらに奥にあるのが、その魂自体が発生したときの原初の物質。すべての肉体の記憶や経験を有する、存在の核となる深層。すべての魂を持つ存在が同じものを持っている。そして、ひとつの肉体にはひとつの魂、これが絶対原則だ》
小人は淡々と語る。それは、マリーも薄々考えていたことだった。
「では、今のハウエルズの状態はどういうもののなの？」

《おそらく、その悪魔が食らった魂の核がひとつ、消えずに残ってしまったのだ。悪魔という存在は、肉体を持っていたとしてもそれはかりそめであり、魂そのものの存在だ。その核は、魂にこびりついているだけであつたところを、お前が肉体を与えたことで育ってしまったのだらう。お前の言う人間の心を持った存在、その魂は核のみであり、表層と中層が存在していない。なのに核はふたつ

ある。しかし、魂は三層構造でなければ安定しない。つまり、どちらかの核しか生かせないのだ」

「何か、方法はないの？」

「すぐるような思いで、訊ねる。小人はどこかあざけりを含んだ調子で笑う。」

《相変わらず人間は愚かなり。危険をおかし、自身が犠牲を負うことでしか望むものは手に入らないということをわかっていない》

「マリーは、その言葉から、ふいに希望の匂いを感じ取った。」

「それはつまり、私が何か犠牲を払えば出来るということ？」

《そうだ。だがその行為はお前を一生縛り、自身で伴侶や死を選ぶ自由を失くす……》

「教えて、教えて下さい！」

「マリーはフラスコをつかんで叫ぶ。中の液体が、とぷりと揺れた。」

《おい、丁寧に扱え。訊き出す前に我が消えるぞ…… ああ、変わらぬこの儚さ。ようやく外の世界を見られたと思えばもう終える。ものを知っているがゆえに、お前たちより儚いのが悔しい》

「ぼやくようにつぶやいた小人は、言葉をつづけた。」

《お前とその者が魂を共有すれば良いのだ。その代わり、お前は体をふたつ持つこととなり、相手が死ねばお前も同時に死に、相手と距離が離れすぎても死ぬ。場合によっては喜ばしいことだが、場合によっては恐ろしい拷問にもなりうる状態だ》

「私にとつては、何の問題もないことです。むしろ、願ったり叶ったりだわ」

《そうか…… それでは、魂縛の儀式を行い、その後に魂離の儀式を行え。それぞれの儀式を行う図式は霊王術書の六百八頁に載っているだろう》

「小人の言葉にマリーは感極まり、涙を浮かべた。」

「あった。方法があった。ハウエルズを生かす方法が。」

「それだけで、もうなにも言うことはなかった。」

「ありがとっ、ありがとっございます！ 私が、なにかあなたに出

来ることはありますか？」

《そうだな、出来る限り長くここに置いて欲しい。我は知りたい、全て知りたい、世界をながめ、人をながめ、物質をながめたい…… 我の寿命は半年ほどだが、扱い方によってはすぐに消えてしまう》

小人の並べた言葉に、マリーは考えた。

それはおそらく、この研究室に置いておけば叶うことだろう。けれど、誰に託せばいい？ クリスは、あまり好まないような気がする。リサは、まだ怒っているから、話も出来ない。ジュディでは門外漢だ。だとすれば、クリスしかない。

「わかりました。出来る限り半年あなたが世界をながめられるように配慮します」

《そうか。では、我は少し眠る……》

そう小人が告げると、頭の中からひつかいたような音が去る。

マリーは、すぐにフラスコの前に「ホムンクルス錬成に成功。生存中」と書いた紙を置いた。誰かが中身を捨ててしまったら困るからだ。

それから後片付けをはじめた。早くしなければ夜になる。

明日。すべては明日だ。そう決めた瞬間、ふとした思考の隙間をぬって、不安がそっと忍びこむ。

もしも、万が一、小人の言ったことがうそだったら？

マリーは首を左右に振った。今は、小人の言葉を信じて進むしかない。

結果は、やってみればわかることだ。明日図書館に行こう。その前に、ジュディに訊ねてみなくては。「靈王術書」とはいかなる書物なのか、マリーには全くわからなかったからだ。

とにかく、ここを綺麗に片づけて、ハウエルズに会いに戻る。そして、彼に説明をする。もしかしたら、彼も何か知っているかもしれない。

マリーは、数日前から持ち出しはじめた、数少ない自分の私物を

まとめ、床を掃き清める。濡れた布で台を拭き、ホムンクルスの宿ったフラスコ以外の器具を洗う。少しずつ、日が傾き、室内が暗くなった頃、マリーはそっと研究室を出た。

ドアのプレートにはめこまれた「マルガレーテ・ヘイスティングス個人研究室」の紙を抜き取り、てのひらの中でくしゃくしゃに丸める。

それからもう一度室内を見渡してから、マリーはきびすを返した。

人生で最大の試み 3

やるべきことはあとひとつだけだ。

はじめをつけること。そこをきちんとなければ、マリーは納得して次へ進めない。服のポケットに入れた紙の存在を意識して、重い足を動かす。まだ、彼が残っていることはわかっていた。

そこまでの道のりが遠い。けれども、マリーは歩を進め、やがて辿りつく。

教授の部屋の前に。

息を吸い込み、ノックする。

「はい」

「教授、お話があるので少しよろしいでしょうか？ マリー・ヘイ スティングスです」

廊下に声が響く。答えはすぐに返ってこなかった。間の悪い静けさが場を満たす。

「どうぞ」

控えめだが、固い声が返ってきた。マリーは扉を開けて、執務机につき、なにか書きものをしているアレックスを見た。彼は顔を上げずに、感情のこもらない声で言った。

「要件は何でしょう？ 忙しいので、手短にお願いします」

「……これを、受理していただきたいと思ってきました」

マリーはポケットから封筒を取り出し、彼の前に置く。そこには「辞表」と書かれていた。さすがに驚いたのか、アレックスが顔をあげる。マリーは真っ直ぐにその目を見て、頭を下げた。

「色々のご迷惑をお掛けしてしまい、申し訳ありませんでした。一身上の都合で恐縮なのですが、辞めさせて頂きたいと思います」

きっぱりと言うと、アレックスはそれを手に取ることもせず言う。「これを受け取る訳にはいきません」

「なぜですか？」

「あなたは優秀な研究員です。確かに、私との間には色々なことがありましたが、それと仕事内容に対する評価は関係ありません。この研究所には、あなたがいた方が良い」

にべもなくそう告げると、ふたたび書きものに戻る。

それでも、マリーは引くわけにはいかなかった。

「では、学院長か副学院長のところへ行きます」

そう言うと、アレックスは顔をあげて、迷惑そうに眉間にしわを寄せた。マリーは、その視線を受け止めて、静かに心境を語る。

「これは、私にとってのけじめなんです。錬金術にたずさわることや、研究自体から離れることではないと思うのですが、他のひとや、教授を巻き込むようなことを独断でしてしまったのは、やはり私の責任です。ですから一度、責任をとらなければならないと考えました。身勝手なことを言って申し訳ありません……ですが、たとえそれが受理されなくても、私はここを一度去るつもりです」

アレックスは、つらそうな顔をした。

「なら、これは私が預かっておきましょう」

「……わかりました。教授、今までいろいろとありがとうございました。私は、あなたに会えて良かった、いつかの舞踏会では、本当に嬉しくて仕方なかったです。あの時ハロルドからかばってくれたことはずっと忘れません。本当に、ありがとうございました」

一息に言葉を並べて、マリーは彼に背を向けた。そうしないと、また泣いてしまいそうだったから。それから急いで部屋から出ようとすると、声がかけられる。

「ま、待って下さい！」

マリーは立ち止まった。だが、振り向けない。

「これで、何もかも終わりにするということですか？」

「……そうです」

マリーが答えると、椅子から立ち上がる気配があった。その場から動かずにいると、後ろから肩をつかまれ、振り向かされる。

「私は、確かにあなたに暴言を吐きました、ですがそれは……」

「わかっています」

アレックスの言葉をさえぎるように、マリーは言う。

「心配してくれた教授を、私は裏切ったんです。だから、あなたの思いを受ける資格はない……それに、彼は私が生み出したも同然です。だから、彼の思いも存在も、私が受け止めるべきだと決めたいです。それが理由です」

「納得出来ません」

言って、アレックスはマリーを抱きしめた。涙がにじむ。この腕の強さも、胸の温かさも、優しい声も全てが好きだった。

「納得……して頂けなくても、私は決めたいです」

「まだ、婚約は破棄していません」

「教授なら、またいい恋が出来ますよ……」

小さく言って、腕の力がゆるんだ好きに胸を押す。腕が放れて、呆然としたアレックスの顔が見えた。マリーは、せめてもの思いで、うそをつくことにした。

「私なんか、いつまでも捕らわれて欲しくないから、言います」

「何を……」

「教授なんて大嫌いです！ 全然タイプじゃないです。身分がいいから付き合ってみただけですよ。ただ肉体関係になるにはいいかなと思ったし、ここで出世もしたかったですね。なのに真面目すぎだし、その上、顔が綺麗すぎて一緒にいたらこっちが引き立て役になっちゃうし。しかもこれだけ一緒にいても何もしないし、教授って女に興味ないんじゃないですか？ という訳で、さようなら！」

わざと大きな声でマリーは言った。

ひとつも本心ではない。それでも、彼の心に突き刺ささればいいと思った。マリーのことなど、嫌な女だったと思って忘れてくれればいい。

マリーは、アレックスが驚いているうちに走り出した。

必死で走って、大学院の外まで来ると大きく息をする。しばらくは、喋ることも出来ないほど呼吸が苦しかったが、しばらくして収

まってくると、マリーは振り返った。

これでいい。

こうするのが、今マリーに出来る全てだ。

つ、と頬を涙が一筋伝う。

初恋だった。

ハロルドとうっかり婚約してしまったせいで、恋する前に傷ついたマリーは恋らしい恋など出来なくなっていた。けれど、彼の優しさに恋をしたのだ。そして、傷つけてしまった。マリーはせめて、彼が自分などより遥かに素晴らしい女性を見つけてくれることを祈りながら、帰路へとついた。

人生で最大の試み 4 (前書き)

R15 (多分) が出てきますのでご注意ください。

人生で最大の試み 4

いつまでもジューディの家に厄介になっている訳にはいけない、という理由で、マリーはパディントン市内に貸家を見つけて借りていた。ジューディは気にしなくても良いと言ってくれたものの、マリーはやはり気が咎めていたのである。

運が良いことに、探し出してほどなく、比較的治安の良い場所の家賃も思っていたより良心的な場所を見つけることができた。

そこに戻ると、室内から焦げた匂いがする。マリーは苦笑しながら、鍵を取り出して開けると中に入った。室内は狭く簡素なものだ。作りつけの家具も少ないが、生活出来れば十分だ。台所は暖炉と兼用になっている。そこに行くと、ハウエルズが鍋をかきまぜて渋い顔をしていた。

「また焦がしたの？」

「料理って難しいんだな。肉を焼くくらいならなんとか出来たけどさ」

渋面で答えると、テーブルを見る。

食卓の上には、焼いた肉や豆と切ったパンが載り、灯心草ロウソクの明かりに照らされて、美味しそうな香りを放っている。

マリーは、むしろシチューを焦がす方が難しいのにと思いながら笑った。彼はまだ鍋とにらめっこをしている。

それを横目に、上着を脱いで荷物を置くと、近づいて背中に抱きつく。早く言いたくてたまらない思いをこらえながら、ゆつくりと言う。

「聞いて。もしかしたら、一緒に生きられるかもしれないの」

マリーの言葉に、ハウエルズの手が止まった。一旦はなれて向き合つと、彼の瞳が不安と期待に揺らいでいるのがわかる。マリーは今日あったことを説明した。さらに、ハウエルズに書物の名前を聞くと、彼は知っていると答えた。マリーは思わず彼を凝視する。

「その本は、あらゆる魂を弄んだ罪で悪魔に墮天させられたやつが人間に教えた秘術を記したとされる本だ。あまり有名ではないし、よほどの好事家でもなければ出てこない題名だ。その小人とやらの言っていること、信ぴょう性がありそうだな」

「私は、信じることに決めたわ」

真つ直ぐに目を見て言うと、ハウエルズは戸惑ったように笑った。「だけど、それだとマリーは一生、俺に縛られることになるぞ……いいのか？」

「もちろんよ。例えうんざりすることがあつたとしても、今日の気持ちをもう一度思い返せばいいだけよ、違う？」

きっぱりと言うと、ハウエルズは嬉しそうに、けれど意外そうな顔をした。

「……何というか、少し前まで迷って泣いて、俺とあの教授に振り回されていたマリーと同一人物には見えないな。こう、強さを手に入れたって感じがするよ」

ハウエルズの指摘に、マリーは苦笑した。

確かに、その通りだ。あの時は進んでも進んでも、道が見えなかった。けれど、今は違う。はっきりと進むべき道が見えていて、やるべきことも、気持ちも定まっている。

だからきつと、強く見えるのだろう。

今ならわかる。マリーは、ふたりともを心から愛していた。

ひとは、誰かひとりだけしか愛せない訳ではないのだ。

けれど、どちらかを選ぶことが出来ずにいた。怠慢だったのだ。

だからこそ、アレックスを傷つけ、ハウエルズに身を引かせるという残酷なことをさせてしまった。

それは、取り返しのつくものではないけれど、もう決めたのだ。

だから、迷わない。

「そうね、多分気持ちがあつきりしたからだと思う。私はあなたが好き、だから側にいたい。他にはなにもない。あなたのさっきの言葉だけど、そのまま返すわ。あなたは一生私に縛り付けられること

になるけど、それでもいいの？」

小首をかしげて問うと、ようやくハウエルズの顔から強張りが取れた。

「望むところさ」

つぶやいて、マリーの頬に触れる。ハウエルズはそのままかがみこんで、唇を重ねた。

ここに来て以来、何度となく繰り返された口づけ。

軽いものから、全てを奪い尽くそうとするようなものまで、さまざまなキスをした。

そのまま、最後まで行ってしまうそうになったこともある。けれど、そうはならなかった。

マリーは男を知らない。だからだろうか、彼はキスしかない。体に触れる手が、欲しいと訴えているように思えても、決して行為の要求をすることもない。

マリーは唇がはなれた隙に言ってみた。

「ねえ、最後までいつでもいいのよ」

ハウエルズが動きを止めた。驚愕に瞳孔が開き、頬に赤みがさしている。その反応に、いたずら心が刺激され、動きをとめている彼の耳にふっ、と息を吹きかける。

「……！」

驚いたハウエルズは体を思いきり離れた。

「ごめん、でも、今言ったことはうそじゃないから」

マリーはほほえんで、焦げ付いたシチュー鍋を暖炉からおろした。黒い部分を取り除けば食べることが出来そうだ。さて、食事にしようかと鍋を覗き込んでみると、ハウエルズが近寄ってきた。顔を上げると、真剣な顔をしている。

「どうしたの？」

「本当に、いいのか？」

マリーは一瞬呼吸が止まりそうになった。

「うん、私の覚悟は決まっているわ」

そう言うと、ハウエルズは困ったような顔をした後で、そつと手を伸ばしてきた。マリーは、せつかく作ってくれた食事が冷めてしまうなと思いながらも、何も言わずにおいた。

大きな手が、マリーを抱えあげて寝室へと運んでいく。心臓の音がうるさい。やがて寝台に横たえられると、綺麗な顔が視界を埋め尽くした。最初の造形とは異なる、鋭くて少し悪賢いような、それでも愛おしい顔が。

ハウエルズは顔をマリーの首もとに埋め、静かな声で囁く。

「ずっと、こうしたかった」

嬉しそうな、少しかすれた声だ。

お腹に、きゅんとした痛みが走る。

言葉ではなく、彼に抱きつくことでマリーは応えた。

「温かい。私ね、ずっとあなたの身体が冷たいのが寂しかったの、つないだこの手が温かかったらいいのに、って何度も考えた」

「なら、叶ったわけだ」

ハウエルズはそう言いながら、マリーの首にキスをしようとして、動きを止めた。その目がある一点を凝視している。マリーは彼の見ているものが何なのか気づいて、笑った。

「これ……まだ持ってたのか？」

「うん。だって、あなたが初めて私に買ってくれたものでしょう？」

マリーは、ハウエルズが首にかけたウォーター・サファイアのネックレスに触れるのを感じて、そう言った。彼は名状しがたい顔で、嬉しそうに何度もそれに触れる。

小さな、安物のアンティーク・ジュエリー。けれど、マリーにとっては本物のサファイアくらいに価値のあるものだ。

「とっくに捨てたと思ってた」

「そうね。そうしようかと思ったこともあるけど、どうしても捨てられなかった。あの時、手をつないでくれたのが嬉しかったし、本心では、もうあなたのことを好きになっちゃってたのね」

アミーリアの話を聞かされたあと、彼と一緒に市場を歩いた。ほ

んの短い時間だったけれど、そのときの胸が温かくなる感覚は今でもずっと残っている。

「だとしたら、時間を無駄にしたよな」

「そうね、私のせい……だから、もう無駄にするのはやめましょう」手を伸ばしてハウエルズの背中に触れる。彼は笑った。

「そうだな」

その晩、食卓の料理がふたりのお腹に収まることはなく、それはそっくり朝食になったのだった。

人生で最大の試み 5

「では、はじめますよ」

ジユデイの声がして、マリーは冷たい石の床に横たわったままうなずいた。

「準備はいいわ、ジユデイ……お願いね」

「はい！ 全力を尽くします」

ジユデイはまっ黒なローブのフードの中から、妖しい微笑を浮かべて請け合った。

なんだが、いつものジユデイとは違うひとに見える。恐ろしい迫力が今の彼女にはある。そのせいか、マリーは成功するような気分になってきていた。心から祈る。

身勝手なのはわかってはいるけれど、成功して欲しい。

「うわ、何だろう。見てるだけなのにすっごいどきどきする。くれぐれも入れ替わっただのなんだの、妙なことはないでよ」

見学状態のクリスが、やはり緊張した面持ちで言う。

「失礼な！ 陣はマリーさんの作った小人さんに聞いた通りにきちんと書きました。ハウエルズ様の召喚に成功した私の構成が間違うものですか！」

ジユデイが憤慨しつつ叫ぶと、マリーは彼女の気持ちをなだめたくて言う。

「私は信用してるから」

「……はい、絶対に信頼に応えて見せます」

頼もしい返事が返ってくる。マリーはほっとして、隣に横たわるハウエルズを見やる。すると、穏やかなほほえみを浮かべて、彼はマリーを見ていた。こちらが恥ずかしくなるくらい、透明な笑みだ。四人が集まっているのは、悪魔学科の実験室だ。実験室、といっても、マリーたちにおなじみの器具がある風景ではなく、石壁に囲まれた小さな部屋で、窓はなく、天井に穴があいているだけだ。部

屋は暗く、ろうそくやランプがなければ何も見えない。

壁際には、かつて悪魔を召喚して操った経歴のある男性の頭蓋骨やら、水晶玉、逆さまにした十字架、薬草、逆五芒星を書いた紙は壁に貼りつけられ、室内全体に、甘ったるい香が炊きしめられている。

以前であれば、気味が悪いと言って決して近づかなかった場所だ。室内に暖炉はないので、非常に寒い。

まだまだ、春は遠いのだ。けれど、これが成功すれば、マリーにとってはそれこそが春だ。

あの晩の翌日、マリーは早速ジュディとクリスに説明してどうすれば儀式が行えるかを相談した。すると、ほとんど使われていない悪魔召喚に用いる実験室が開いているから、そこでやろうとすぐに話がまとまった。また、ジュディは「霊王術書」を熟読したことがあり、たった三日で儀式用の準備をひとりで終えてしまった。

あまりに潤滑にことが進んでしまい、マリーは拍子抜けしていた。「では、はじめます」

ジュディが開始を告げる。マリーは目を閉じた。例えどんな結果になっても、それを受け入れる。覚悟は、もう決まっていた。

やがて、ジュディが聞いたことのない言語で何かを唱え始める。

それと同時に、マリーの全身に負荷がかかった。意識が飛びかけ、妙な浮遊感にさいなまれる。吐き気がし、頭が痛むが、マリーはうめき声ひとつあげなかった。うつすらと目を開けて、隣のハウエルズを見ると、彼の顔も苦悶に歪んでいる。

しばらくくらえていると、何かがずるり、と意識に入り込んできたような感覚があり、そこでマリーの意識は途切れた。

暗闇の中に、意識がだけが浮かんでいる。そこで、マリーは光るものを見た。

美しい女性がそこにいた。古い衣装をまとい、長い黒髪に大きな褐色の瞳。体つきはふつくらとしていて、小柄だった。曲線を描く唇が蠱惑的な印象を残す気の強そうな顔を見て、マリーはふと直感した。

「アミーリア？」

「あら、知ってたのね。初めまして、といってももう二度と会う訳じゃないけれど」

意志の強いはつきりとした声。マリーはほほえむアミーリアが腕に抱いている半透明の魂を見やる。

「それは」

「あの悪魔が抱いた人間への思慕。だから、完全に私の魂を消せなかった、でも、その思いはこうして形をとったから、私はこれで完全に消えるわ」

少し寂しそうに言って、アミーリアは？それ？をマリーに差し出した。

「ある意味では、これは私の子……どうかよろしくね」

「は、はい」

マリーは？それ？を受け取り、大切に抱きしめると、すうつと体の中に入り込んで消えた。

同時に、マリーは自分を呼ぶ声に目を覚ました。

人生で最大の試み 6

目の前に、ハウエルズの顔がある。見慣れた顔。けれど、決定的に違うのは瞳だった。暗く淫靡な赤い色を宿していたのに、それが消えているのだ。

「マリー、大丈夫か？」

「え、ええ。ありがとう」

背を支えて起こしてもらいながら、マリーは部屋の中にもうひとり増えたことに気づいた。驚いてそちらを見やると、見たことのない美形が香などの載っている台の上に腰かけて、嫣然と笑っている。その口もからは、牙がこぼれて見える。

さらりとした黒い髪。整った、端正だが冷たい印象を受ける顔。背も高く、しなやかな体つきをしており、漆黒の羽根が生えている。まとう衣服は全て漆黒。唯一、切れ長の瞳だけが赤い光を内包して、深い輝きを放っていた。

「あれが、もとのハウエルズ様です」

ジュディの声がした。悪魔はほほ笑みながら声を発した。

「ようやくその窮屈な檻から出ることが出来た。感謝するぜ……それと、邪魔な感情を取り払ってくれたことにも礼を言う」

悪魔は、肉体のあるハウエルズを見て言う。

「こつちこそ、お前と離れられてせいせいしたさ」

ハウエルズは、鼻を鳴らして行った。向き合う、もともとは同じ魂を持っていた者同士。目線だけで意思を交わし合ったのか、互いに口端をあげ、微かに笑った。

「まあいい、礼は言ったぞ。何も出来ないが……せめてお前たちが生涯悪魔に狙われることがないようにしてやろう。俺が出来るのはそれだけさ。じゃあな」

低く艶めいた声で言うと、悪魔はぱさり、と羽根を羽ばたかせて消えた。

「あつ！ あゝあ、行っちゃいました」

ジュディがしょんぼりして言う。

「あなたなら、また呼び出せるわよ」

心からそう思っただけで、ジュディは言った。それから、ゆっくりと戸惑いながらハウエルズを見る。

「本当に、人間になったのね」

「ああ。ちゃんと血も流れて心臓も動いてる。ありがとう……これで、人を食らうことなく生きられる」

ハウエルズはそう言う、強い力でマリィを抱きしめた。体は温かく、きちんと存在を感じる。マリィはあまりに強く抱きしめられたので痛かったが、何も言わなかった。

しばらくそのままじっと抱きあう。

「あれだね、奇跡ってあるもんだね」

呆けたようにクリスが言った。ジュディはそれを受けてうつとりと言う。

「ロマンチックですよねえ、神秘的な存在と結ばれるなんて」

「いや、僕はふつうの女の子がいい」

クリスが半笑い気味に言うと、ジュディは彼を睨みつけた。

「そうですか。別にあなたに同意は求めていますよ。まあ、あなたには理解は出来ないでしょうが、私だっていつかは悪魔を呼びだしてその下僕にしてみらうのが夢なんです」

「は！ 下僕？ 君は頭がおかしいの？」

「失礼な、本心ですよ」

ジュディが断言すると、クリスは頭を抱えてうめき声をあげた。

それから、ジュディに言う。

「その件についてはちょっと話し合おうか？ どうしても理解できないんだけど？」

「いいですよ！ 理解させてあげますよ」

なぜかふたりは言い争いをはじめ、部屋を出て行く。

「あ、マリィさん、後片付けは私がやるときですんで。むしろへた

に触らないほうがいい物もあるのでここはそのままにしておいて大丈夫です。それじゃあ、また！」

「うん、またね」

マリーは答えて手を振った。

やがて、言い争いをしながら去っていくふたりの姿が見えなくなると、マリーはつぶやいた。

「あのふたり、もしかしたらもしかするかも」

今はまだ何も芽生えていないが、マリーはちよつと期待してしまう。でも、それは未来の話だ。今は、自分を抱きしめてくる存在と言葉を交わしたい。マリーは、彼の身体がわずかに震えているのに気づいた。ハウエルズは、泣いていた。

「ハウエルズ……？」

「ごめん。ただ、さっきまで死ぬんだとばかり思っていたから」

「うん、でももうそんなこと考えなくていいのよ。どちらかが死ぬまで、一緒よ」

マリーはハウエルズの背をさすりながら、優しく言う。それは、自分に言い聞かせる言葉でもあった。

「信じられない」

「私もよ……でも本当なのよ」

マリーは、彼にしがみつこうにして言った。少しずつ、思いがとめどなくあふれる。彼が生きている。ここにいる。それだけで胸がいっぱいになり、言葉が詰まって出てこない。お互いに、ただ互いがちゃんとしていることを確かめあうだけの時間が流れる。

あふれた思いは、ゆつくりと全身に広がり、静かな幸せを感じた。やがて、落ち着きを取り戻したマリーは言う。

「これで、あなたは私とは離れられない。ねえ、後悔してる？ 私はひどい女よ、いろいろなひとを傷つけたのに、こうしていられるのが嬉しいんだから」

「そんなの、俺も同じだ」

ハウエルズはそう言つと、体を離してキスをした。最初は軽く、

感触を確かめるようなキス。つづいて、息を奪うようなキス。マリもそれに応えた。

お互いを確かめあうように、何度も重ねあう。

そうして、ふとした瞬間に見つめあって、同時に笑った。

マリーは思った。

私は、本当に恋人をつくってしまったのだ。あのとき結婚式で、情けない思いをぶつけるようにしてつくった。それでもう、ひとりに泣くことはないのだ。

「ずっと、離さないから」

笑顔で心から言う。

私は、幸せだ。

その後の話

十年後。

レピージュ大学院の研究室の窓が二回叩かれた。マリーは目の前の器具に向けていた視線をあげてほえんだ。すぐに窓に近づくと開ける。

「いいかげん普通に入ってくることを覚えられないの？」

呆れつつ言うが、どうしても笑いをこらえきれない。

開け放たれた窓からは、暖かな風が花の香りを運んでくる。穏やかな初夏の陽ざしに温められた草花が少ししおれているのが見えた。「こっちの方が早いだろ」

そう言つて、ハウエルズは持つてきた包みをにかけて明るく笑つた。

布の端から、長いサンドイッチがはみ出している。マリーは苦笑して、窓から離れる。ハウエルズは相変わらず身軽にするりと入り込んでくると、紙が散らばったテーブルを手なれたようすで片づけた。

「別に、いつもここに届けにこなくてもいいのよ？ 学食だってあるんだし」

「いいの、一緒に食べたいんだから。それにマリーに味見してもらつて好評だったやつは売れるんだ」

楽しげに言うと、彼はお茶の準備まではじめた。

研究は一時中断だ。マリーはため息をつくと、片づけを手伝った。室内には、食べものの良い香りが漂いはじめる。

やがて支度が整うと、昼食の時間だ。

「それで、少しは講義をするのも慣れた？」

「全然だめね、人前で話したり自分の考えを誰かに伝えるって本当に難しいわ」

マリーは口の中のを飲み下してからゆうつつそうに言った。
あれから、マリーは別の大学院に移り、そこでハウエルズの身体を作ったときの経験を生かして、人体の一部を錬成し、それを人体移植用に使えないかという研究をつづけている。

結果、患者の皮膚や血液から血管などを錬成することに成功し、マリーは現在この大学院で助教授の立場になった。一方のハウエルズは、なぜか料理に興味を持ち、一から修行をしてパン屋で働いている。美形の職人さんがいるということで、そこそこ人気者になってしまったらしく、そのパン屋は割と繁盛しているようだ。

もともと存在していなかった人間である彼と暮らすには、いろいろと手続きが必要だったものの、マリーは家族の助けなどを得て、でっちあげでなんとかした。

家族は最初、マリーの馬鹿さ加減をあげつらい、考え直すようにとさんざん迫った。けれど、それでマリーの意思が変わることはなく、結局は向こうが折れてくれた。ハウエルズと会わせたときも、最初は恐々と接していたものの、彼の素直さや真っ直ぐさに次第に心を許すようになり、今ではちゃんと家族の一員として認めてくれている。

以来、マリーは研究に没頭する日々をおくっている。そんなマリーを、ほほえましいものでも見るような目で見ながら、ハウエルズは言った。

「マリーならいつかは何とかするさ」

「そうね。でも今は無理そう、他にも大切なことができたし。そういえば、リサのところでもまた子どもが生まれたそうだから、また会いに行きましょうね」

「ああ、パディントンならすぐだし、週末にでも行こうか」
ハウエルズはお茶をすする。

なんだかんだで、リサとは仲直りすることができた。最初にハウエルズと会わせたときは大変だったが、最終的にはわかってくれた。そこはやはり親友だな、と思う。彼女はすでに大学院をやめて、ピ

ツクと結婚し、今では男の子と女の子がひとりずつ生まれて、母親業にいそしんでいる。女の子はビツクに似て、いたずら好きで困ると良く手紙に書いてよこすくらいだ。

「ジュディは相変わらずみたいだし、クリスマスも大変ね」

そう言うのと、ハウエルズは楽しそうに笑い声をあげる。

クリスマスはどうやら本気でジュディを好きになっちゃったようなのだが、彼女の方は研究が命、のままで、当分進展はなさそうだし、ちなみに、マリーのアドバイスを受けて見かけを変えたら、異性に言い寄られることが増え、うっとうしくなったのか、結局またもとの黒ロブに戻ってしまった。せっかくの美貌が生かされないのは残念だったが、それがジュディなのだろう。彼女とは今でも手紙のやり取りがあり、互いの研究について話し合うのが楽しみな研究馬鹿の仲間である。

また、結局何だかんだでホムンクルスを彼に押し付けてしまったものの、彼は彼の小人とそれなりに有益なやり取りをしたようで、あの後出世していた。たくさん面倒をかけたし、小人もたくさん話が出来たようで、マリーとしてはほっとしている。

それから、ハウエルズから聞いて、クリスマスが父に自分を見張るよう頼まれていたことも知った。マリーは、ハウエルズのことを報告するために、怒られるのを覚悟しつつ父のところへ行った。そのときに、クリスマスのこと頼んだのだ。もう彼を解放してあげて欲しいと。しばらくは父も譲らなかったが、マリーの決意が固いことを知り、最終的には頼みを聞いてくれた。いま、クリスマスは自由の身だ。

「まあ相手が相手だしなあ」

苦笑するハウエルズ。

彼の顔からは鋭さが消え、年齢を重ねたことによる穏やかさが表面に出てきている。

その横顔を見て、マリーはリサが手紙に書いてきたことを思い出す。

教授はパディントンから別の大学院に移り、そこで大きな功績を

残したそうだと。まだ誰とも結婚はしていないが、婚約を考えている女性がいるという。それは、心にひっかかったトゲが、あと少しでとれるかもしれないという期待を抱かせる情報だった。真実のほどはわからないが、彼にも人生とともに歩んでくれる女性が現れるといい、と心から思う。けれど、彼の人生は彼のもので、良くできるのも彼しかない。マリーには、見守ることしかできないのだ。

それに、と心の中でつぶやいて、マリーはお腹に触れる。

「ねえ、家族が増えるってどんな感じなのかしらね」

「そうだな、わからないけど、パンを買いに来る親子はたいてい幸せそうに見えるよ」

「私たちもそうなるといいね」

マリーが言うと、ハウエルズは食べる手を止めて、驚いた顔でマリーを見てくる。

それ以上は何も言わない。顔を見れば、言う必要がないのが一目瞭然だ。どうやら、言いたいことをわかってくれたらしい。

マリーは幸せな気分です静かにお茶を飲み、食事をつづける。

その少し後、研究所からひととき大きな歓声があがった。

たまたま廊下の前を通った学生たちは、驚いて目を見交わしあう。けれど声の主がわかるとすぐ、いつものことのように談笑しながら、のんびりと扉の前を通り過ぎて行った。

（ F i n ）

その後の話（後書き）

完結です。ここまで読んで下さった方、途中だけでも一部分だけでも目を通して下さった方全てに、心から感謝いたします。

構成も何もないままただ書きたい！という気持ちとノリで書き始めたせいか、終息させられるのか不安でしたが、何とか終わらせることが出来ました。評価やお気に入りを下さった方々のおかげです。本当にありがとうございます。

一応この話のもとになったのはギリシア神話のピグマリオンのお話。その男女逆転バージョンを書いてみたかったのですが、成功したようないないような。

とりあえず、三角関係って難しいとしみじみ痛感しました…（・・

・、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8687m/>

ある女錬金術師の試み

2011年8月25日03時12分発行